

現代チェス・プロブレム入門1

若島 正

今月から、チェス・プロブレムのコーナーを新設することになりました。この魅力的な世界を、少しでも多くの詰将棋愛好家に知っていただけるよう、初心者からマニアまで楽しめる欄にしたいと思います。基本方針としては、タイトルに掲げたように、主に現代（なるべく70年代以降）の作品・作家・テーマを紹介するつもりです。

まず、最小限の約束事をいくつか。これを先に必ずおぼえて下さい。

1 キング・クイーン・ルーク・ビショップ・ナイト・ポーンをそれぞれK・Q・R・B・N・Pの記号で表す。ただし、手順表記ではPは省略する。

2 盤面は縦列を左からa, b, c, ..., h, 横列を下から1, 2, ..., 8と順に呼び、拵目はその組み合わせで表す。指し手の表記も、駒と移動場所の組み合わせで書く。

3 駒取りはx、成りは=、王手は+、詰みは≠でそれぞれ表す。

4 白黒（または黒白）1手ずつのペアを1手と数える。

この他にもまだありますが、それは追々述べることにして、今回のテーマはPの成り（プロモーション）です。

敵の7段目にいるPは、8段目に

進むと成れることは誰でも知っていると思います。でも、必ずしもQに成らなくてもいいことは、意外に知られていないようです。そこでルールを再確認すると、

PはQ・R・B・Nのどれかに成れる。

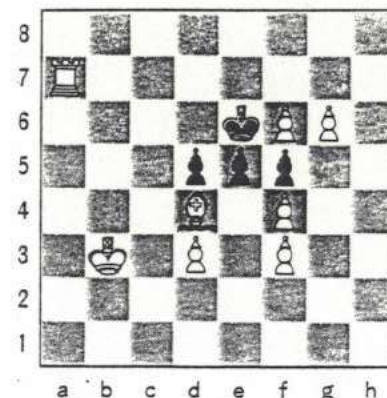
このとき、Qに成らずにわざとR・B・Nに成ることを、専門用語でunder-promotionと呼びます。NはQとまったく働きが異なるので、Nに成っても不思議ではありません。しかし、R・BはQより性能が劣りますから、どういう場合にR・Bへの成りが成立するのでしょうか？

それは、詰将棋で飛・角・歩の不成を考えればわかります。つまり、打歩禁のルールに対応するチェスのルールがスティルメイトです。チェスでは、チェックがかかっていないのに指す手がないとき、それをスティルメイトと呼び、引き分け（ドロー）になるのです。

もちろん、このunder-promotionだけでも作品になりますが、欲の深いプロブレム作家はさらに複雑なことを考えます。すぐに思いつくのは、「一局の作品にQ・R・B・Nすべての成りを盛り込めないか？」ということでしょう。この四種成は、ドイツ語でAllumwandlungと呼ばれ、よくAUWと略称されています。

AUWの古典として有名なのは、第1図です。

1 N. Hoeg (1904)



≠ 3

これはいわゆる普通問題（オーソドックス）で、白から指し始め、黒のKを詰めます（黒は抵抗する）。このとき、詰将棋とプロブレムとの大きな違いは、プロブレムでは絶対にチェックをかけなくてもよいという点です。

第1図の初手（キー）は、平凡な1.f7。それに対して変化が4通り。

1...Kd6 2.f8=Q+ Kc6 3.Qc5≠

1...exf4 2.f8=R! Kd6 3.Rf6≠

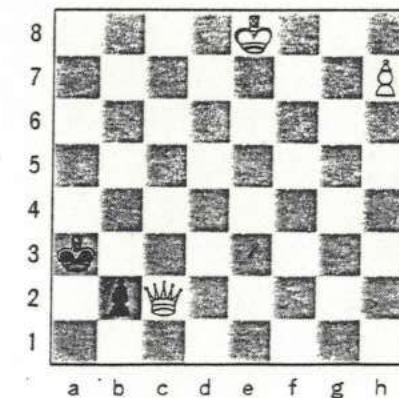
1...exd4 2.f8=B! Kf6 3.Ra6≠

1...Kf6 2.f8=N! exd4 3.Rf7≠

2番目と3番目の変化では、いずれもQに成るとスティルメイトになってしまうことをご確認下さい。

普通問題では、このようにAUWを実現させるのは最短で3手かかりますが、普通問題を離れると、ずっと表現は楽になります。第2図はAUWを大量生産しているE. Bartelのもので、

2 E. Bartel (1964)



H=2 (2解)

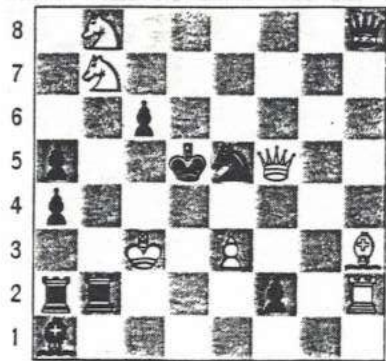
条件のH=2のHとは協力（ヘルプ）、=はスティルメイトを表します。こうした協力系のH≠（ヘルプメイト）およびH=では、特に指定がないかぎり、黒から指し始めて黒のKをメイト（あるいはスティルメイト）にするのが目的です。さらにこの問題は、2解を求めよという指定がついています。現代のH≠のジャンルにおいては、ほとんどの作品が単一解ではなく複数解です。

第2図の解はごく簡単。

1.b1=R h8=Q 2.Rb4 Qf8=

1.b1=N h8=B 2.Nc3 Bxc3=

次に、協力系と並んでポピュラーな自殺系をのぞいておくことにしましょう。自殺詰を表すS≠（セルフメイト）では、白から指し始めて、白のKをメイトにします（黒は抵抗する）。次の第3図は、現代を代表する作家、フランスのM. Caillaudの最新作です。



S# 2

キーは1.Na6!。この手は2.Nb4+を狙っています。これをPa5またはRb2のどちらで取っても詰みです。一見すると受けはない(1...c5でもやはり2.Nb4+)ように思えますが、ここで黒に最後の手段が残されています。Pf2を動かせば、Rh2がb2の地点に利いて、2.Nb4+をRxb4+と取り返せるのです。さて、Pの四種成に対応して、それぞれ攻め方があざやかに分離されるところにご注目下さい。

1...f1=Q 2.Qd3+ Nxd3≠

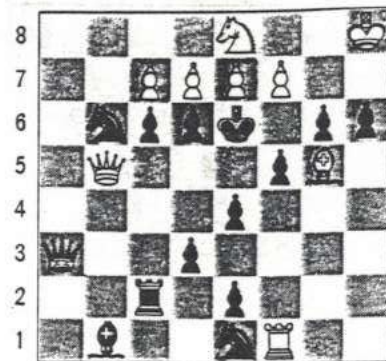
1...f1=R 2.Rd2+ Rxd2≠

1...f1=B 2.Qf3+ Nxf3≠

1...f1=N 2.Bg2+ Rxxg2≠

配置もほぼ完璧で、さすが Caillaudらしいセンスにあふれる傑作だと感心します。

最後にもう一題、これも超一流作家の一人、B. Lindgrenの第4図を見てもらいましょう。



S# 30

手数は長いのですが、必然的にチェックの連続で、その意味では詰将棋マニアにとってわかりやすい作品です。しかも、AUWに加えて、連取り趣向2回に準煙詰(そんなのプロBLEMにあったかしら?)と、まるで詰将棋そっくり。上田吉一氏に見せたら、「Lindgrenに持駒を持たせてみたい」と言っていました。

1.f8=N+ Kf7 2.Dxf5+ gxf5

3.Nxd6+ Qxd6 4.e8=B+ Kxf8

5.Rxf5+ Df6+ 6.Rxf6+ Ke7

7.Rxh6+ Kf8 8.Rf6+ Ke7

9.Rxc6+ Kf8 10.Rf6+ Ke7

11.Rxb6+ Kf8 12.Rf6+ Kf8

13.Rc6+ Kf8 14.Be7+ Kxe7

15.d8=Q+ Kf8 16.Df6+ Kxe8

17.c8=R+ Kd7 18.R8c7+ Ke8

19.Re7+ Kd8 20.Rxe4+ Kd7

21.Re7+ Kd8 22.Rxe2+ Kd7

23.Re7+ Kd8 24.Rxe1+ Kd7

25.Re7+ Kd8 26.Re3+ Kd7

27.Rxd3+ Ke8 28.Rc8+ Rxc8

29.Rd8+ Rxd8 30.Qf7+ Kxf7≠

(注: 18.R8c7+ は、c8のRを動かしたという意味。)

要するに、詰将棋の世界で煙や七種成がそれだけではもう誰もびっくりしなくなり、それプラス何かの時代になっているように、プロBLEMの世界でもAUWは日常茶飯事で、それに何かをくっつける工夫が必要になってきているわけです。

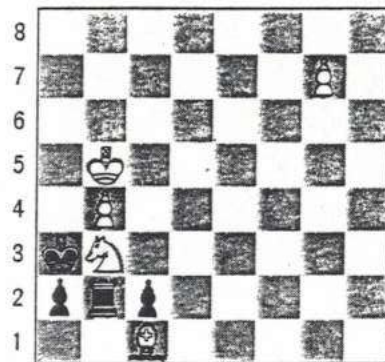
さて次回は、このAUWをさらに発展させた作品群を紹介する予定です。お楽しみに。

【今月の宿題】

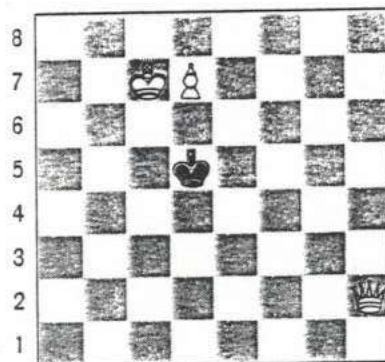
すべてAUWの復習です。1は普通問題のAUW。スティルメイトに気をつけて。2は、この図を(a)として、(b) Kc7→Kg7 (c) Kc7→Kf7 (d) Qh2→Qh6に変えた図も解いて下さい(条件は同じH# 2)。この四つを合わせるとAUWが出てきます。

3は自殺で、実力者向きの問題。作者Petkovは、このジャンルでは質量ともに第一人者で、ヘヴィー級の難解作が得意。本作は彼のものとしては軽い部類です。キーが発見しづらいかもかもしれませんが、詰めあがりを想定すると逆算でわかります。

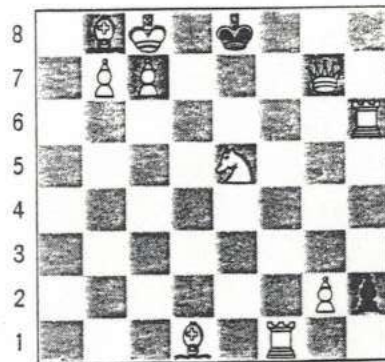
一題でも解けたらぜひ解答をお寄せ下さい(締切4月末日)。それから、読者のオリジナル作品を募ります。いずれも宛先は〒563 池田市畑 1-14-10-A 若島正まで。



#3



H# 2



S# 4

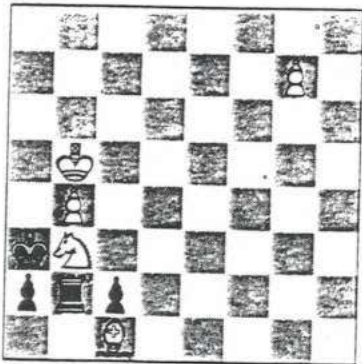
1994/7

ルール訂正

キング・クイーン・ルーク・ビショップ・ナイト・ポーンをそれぞれ K・Q・R・B・S・P の記号で表す。ただし、手順表記では P は省略する。

前回では、ナイトを N と書くことにしておきましたが、将来フェアリー駒を導入するとき N を使うことになるので、これからは S とします。すみません。さて、第1回は P の四種成 (A U W) を勉強しましたが、その宿題を片づけておきましょう。

☆ M. Zigman (1970)



3

1. Sd2

- 1...a1=B 2.g8=R! Ka2 3.Ra8≠
1...a1=S 2.g8=Q! Sb3 3.Qxb3≠

佐藤善起：同じ変化があるのでは、A U W として不満。

という声多し。これは 1...a1=Q/R の変化が余分なのを気にしたものです。たしかに、これが判断しづらいので、A U W の例題としては不適切だったかもしれませんが、次の評を見て下さい。

山田康平：Pc2 がなかったらどうなるのでしょうか？

そういうこと。たしかに、初手のキーに 1.Sd2 と指してしまえば、この P は不要なのです。ところが、初手の紛れとして、先に Pg7 を成てみると……。

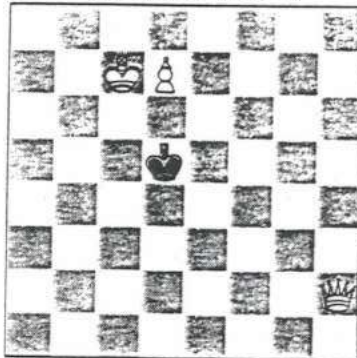
1.g8=Q? a1=B!

1.g8=R? a1=S!

で逃れるのです。つまり、紛れ手順に A U W があり、1.Sd2! はそれを避けるための模様見になっています。

(これを指摘したのは千葉肇氏お一人。) Pc2 は、この紛れの A U W を成立させるための配置なのです。つまり、これがないと 1.g8=R は Kxb3 と応じられても詰みません。

☆ A. Karpati (1982)



H = 2

- (b) Kc7→Kg7 (c) Kc7→Kf7
(d) Qh2→Qh6

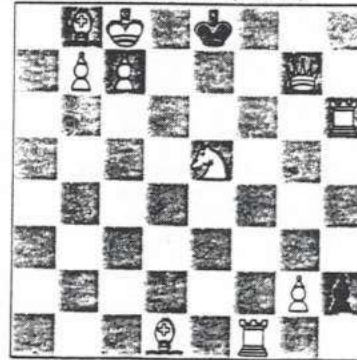
- (a) 1.Ke6 Qa2+ 2.Ke7 d8=Q≠
(b) 1.Ke6 d8=R 2.Ke7 Qd6≠
(c) 1.Kc6 d8=B 2.Kd7 Qc7≠
(d) 1.Ke5 Qg5+ 2.Ke6 d8=S≠

藤沢秀樹：簡素図式でうまく A U W が表現されていて、入門用に最適。

吉田彰+市島啓樹：(a) が相当に難しかった。Qa2+ を見つけたときに

は感動しました。

☆ P. A. Petkov (1969)



S = 4

1.Sc4!

- 1...h1=Q 2.Bh5+ Qxh5
3.Qe5+ Qxe5 4.Re6+ Qxe6≠
1...h1=R 2.Rh8+ Rxh8
3.Rf8+ Rxf8 4.Qe7+ Kxe7≠
1...h1=B 2.Bf3 Bxg2
3.Bc6+ Bxc6 4.Qd7+ Bxd7≠
1...h1=S 2.Rh4 Sg3
3.Re4+ Sxe4 4.Sd6+ Sxd6≠

井上順一：応手によってガラリと変わるみごとな手順。自力で解けて満足。

永野啓：P=B のときの 2.Bf3 を見つけたときはけっこう嬉しかった。P=S のときの S の跳び方は非限定？

そのとおりです。プロブレムにも詰将棋と同じく非限定 (dual) という概念があり、そのキズの程度は個々の作品によって判定されます。本局の場合は、ほとんど問題なし。

総評

永野啓：今、3題を解いて、ちょっと食い足りない感じ。プロブレムに対する飢餓感に襲われています。日本語の解説付きのプロブレムの名作集のような本はないのでしょうか。

日本語の入門書としては、本誌で通信販売している門脇芳雄氏の「チェスプロブレムの世界」がおそらく唯一のものでしょう。この連載は、その門脇氏の後を受ける形で、現在の到達点を明らかにすることを狙いとしています。例題は高級に、宿題はなるべく易しくというのが当面のモットーです。なお、本稿は半永久的に継続するつもりですが、もちろん三ヶ月に一度のペースでは世界のレベルに追いつくことは至難の技。読者の支持があって、初めて毎月連載も可能になるかと思えます。是非多数の解答をお寄せ下さるよう、お願いいたします。

塩田洋：図面が汚いのもう少しなんとかして下さい。Lindgren の手順中、Q と D の誤用は Dame! 宿題はこれぐらいの難度で充分だと思います。早くフェアリーピースが出てくることを期待しています。

たしかに図面は名案ありませんかね。前回の例題での誤記、すみません。ふだん英・独・仏で解答を書いていると、頭の中がごっちゃになるのです。フェアリー駒の登場はかなり先になりそうですので御了承を。

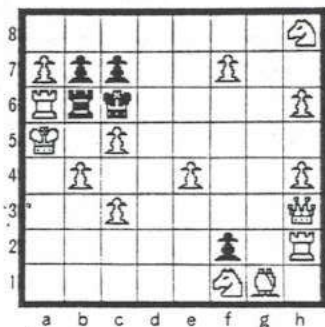
解答成績

▽全題正解者 (19名)：

- 市島啓樹、井上順一、上田吉一、喜多真一、小林敏樹、駒井信久、佐藤善起、塩田洋、千葉肇、永野啓、西村詩、橋本哲、広瀬行夫、藤沢秀樹、真鍋浩、屋並仁史、山田嘉則、山田康平、若木栄登
▽2~1題正解者 (5名)：
金子義隆、神無太郎、後藤角兵衛、小原義孝、吉田彰

さて、前回のAUWの発展として考えられるのは、双方が四種成で対抗するというテーマです。これは、最初にこのテーマの実現に没頭した作者の名を取ってBabsonと呼ばれています。この作品例として有名な古典は、次のものです。

☆ H. W. Bettman (1926)



S≠3

1.a8=B! (これでPb7をピンする)

まず1...fxg1=Qの場合

2.f8=R? Qxc5+ 3.b5+ Kd6!

2.f8=B? Qg8!

はいずれも逃れですから

2.f8=Q! としておくと

2...Qxc5+ 3.b5+ Qxb5≠

2...Qxf1 3.b5+ Qxb5≠

2...Qg8 3.Qxg8 Rxa6≠

さて次に1...fxg1=Rの場合は

2.f8=Q? Rxf1 3.Qxf1 Rxa6+

で逃れますから

2.f8=R! Rxf1 3.Rxf1 Rxa6≠

次に1...fxg1=Bの場合は

2.f8=Q? Bxc5 3.bxc5 Rxa6+

で逃れますから

2.f8=B! Bxc5 3.Bxc5 Rxa6≠

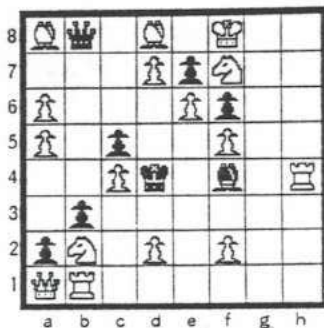
そして最後に1...fxg1=Sの場合は

2.f8=S! Sxh3 3.Rxh3 Rxa6≠

他の変化は各自ご確認下さい。

自殺ではなく、オーソドックスでBabsonを実現させるには、かなりの年月を要しました。そしてようやく完成した、歴史的な作品を次に掲げます。

☆ L. Yarosh (1983)



≠4

キーは平凡な1.a7です。ここで

1...Qxd8+ 2.Kg7 Qc7 3.d8=Q+ Qxd8

4.Rxf4≠あるいは1...Qxa8 2.Rxf4+

Qe4 3.a8=Q Qxf4 4.Qd5≠といった

複雑な変化はありますが、それを無

視して本筋に入れれば

1...axb1=Q 2.axb8=Q Qxb2

3.Qxb3 Qxa1 4.Rxf4≠

1...axb1=R 2.axb8=R Rxb2

3.Rxb3 Kxc4 4.Qa4≠

1...axb1=B 2.axb8=B Be4

3.Bxf4 Bxa8 4.Be3≠

1...axb1=S 2.axb8=S Sxd2

3.Qc1 Se4 4.Sc6≠

というわけです。これを見ていると

いかにオーソドックスという形式が

厄介なものか、よくわかると思いま

す。

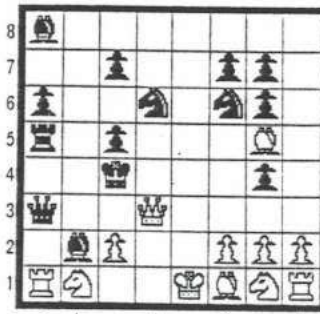
さて次は、いよいよお待ちかね、

レトロのジャンルでのAUWを見て

おきましょう。作者はオールラウン

ド・プレイヤーのM. Caillaudです。

☆ M. Caillaud (1982)



27.5手目の局面。棋譜は？

ここでいう27.5手とは、白が28手指し、黒が27手指した(すなわち将棋風に数えると55手)ことを示します。こういう形式のレトロ問題では、解き方の定跡があり、それはだいたい次の3点です。①実戦初形からそれぞれの駒が図の位置に達する最短手数を数える。②どこの地点でどの駒が取られたかを調べる。③どこの地点でどんな成駒が発生したかを調べる。この方式に沿って解いてみましょう。

まず②から。現在、盤上から消えている駒は、白PPPPと黒RRPです。黒の消えた2枚のうち、1枚は今Qxd3で取られたばかりなのに注意(そうでないとBf1でチェックになっていて矛盾)。ここで①に戻って、黒の駒が現在の位置に達する最短手数を計算してみます。

K...e8→?→?→?→c4 4手

Q...d8→?→a3 2手

R...a8→d8→d3

h8→h5→a5 4手

(注：a8→d8はクイーン側のキャスリング0-0を使うことも可能です。その場合にKはc8→?→?→?→c4でやはり4手必要になります。)

B...c8→b7→a8

f8→a3→b2 4手

S...b8, g8 ⇒d6, f6 5手

(注：いろいろなコースがあるので列挙しません。)

P...a7→a6

b7(またはd7)→?→c5

e7→?→?→g4

h7→g6 7手

これで計26手になります。d3で取られた駒がPで、Ra8がそのままの位置で取られたとすれば、同様の計算でちょうど27手。もし盤上の黒の駒のどれかが成駒だとすれば、Pが成るには最短5手かかりますから、計算しなおせばどうしても合計が27手を越えてしまいます。すなわち、黒は成駒を作っていません。

そこで②をもう一度考えてみましょう。黒のPc5/Pg6/Pg4は、それぞれ駒を1・1・2枚ずつ取っています。しかしその駒は白のPではありません。なぜなら、たとえばPc5の例を考えると、黒のc筋のPがそのまま残っているの、白のbd筋のPは駒を取ってc筋に来ることができないからです。すなわち、黒が取った駒はすべてPではないということは、白のPが4枚成っていることになります。それは当然ながらabd筋のPです。黒Pa6の存在からすると、a筋のPはPb7を取ってb8の地点で成ったわけで、残りのbde筋のPはそのまま進んでそれぞれb8/d8/e8の地点で成っています(ここで、d3で取られた黒の駒はPではなくRであることが確定します)。この4枚は、すべて成るまでに5手かかり、さらに少なくとも1手は

移動するので、これだけで6×4=24手消費します。さらに盤面を見れば、QとBで少なくとも2手動かししていますから、計26手で、白に許されている自由度は残り2手です。つまり、白の駒が取られる可能性のある場所c5/c6/f5/f6/g4/g5/g6へ、2枚の駒がb8/b8/d8/e8からそれぞれ1手で移動しなくてはなりません。

(d8にQを作ってd3に1手で移動する可能性は、盤面のSd6によって否定されています。) それには次のような方法しかありません。

◇b8=Sとして、Sc6 d7xc6。

◇Bc1をBg5 f6xg5として、d8=Bと成り、さらにg4を待ってからBg5とする。

これで白の指し手の骨格がほぼ確定しました。後は最短より1手の自由度が与えられている黒の指し手を工夫すればよいわけですが、そこは実際に駒を動かしてみるしかなく、次の正解手順を並べながら、なぜこれが唯一解になるのかを考えてみてください。

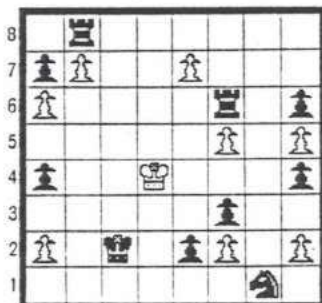
- 1.a4 Sc6 2.a5 Se5 3.a6 Sc4
- 4.a6xb7 a6 5.b8=S Bb7
- 6.Sc6 d7xc6 7.b4 Qd3
- 8.b5 Rd8 9.b6 Ba8 10.b7 Rd5
- 11.b8=Q+ Kd7 12.Qb2 Ra5
- 13.Qf6 e7xf6 14.e4 Ba3
- 15.e5 c5 16.e6+ Kc6 17.e7 Bb2
- 18.e8=R Qa3 19.d4 Kb5
- 20.Bg5 f6xg5 21.Re6 g4
- 22.Rg6 h7xg6 23.d5 Rh3
- 24.d6 Rd3 25.d7 Sd6
- 26.d8=B Kc4 27.Bg5 Sf6
- 28.Qxd3

レトロのこの出題形式でのAUW

は、この作品が史上初。まったく驚嘆すべき創作力です。

さて最後にお見せするのは、白の8枚のPでダブルAUWを行おうという、歴史に残る超傑作です。なんとなく、深井一伸氏のダブル七種合「七対子」を思い出しませんか。

☆ B. Lindgren (1987)



SS#42

ここで条件のSS#とは、白が連続して与えられた手数を指し、次に黒がどのように指しても白のKがメイトになる手順を求めよというものです。方針は、白のKはそのまゝの位置にしてその周囲を囲いながら、黒のKの自由を奪い、最後はチェックをかけてSg1で詰ませます。とにかく御覧になって下さい。

- 1.e8=S 2.Sxf6 3.Sd5 4.f6 5.f7
- 6.f8=Q 7.Qxf3 8.Dg2 9.f4 10.f5
- 11.f6 12.f7 13.f8=B 14.Bxh6
- 15.Be3 16.h6 17.h7 18.h8=R
- 19.Rxh4 20.Re4 21.h4 22.h5
- 23.h6 24.h7 25.h8=Q 26.Qxb8
- 27.Qe5 28.b8=B 29.Bxa7 30.Bc5
- 31.a7 32.a8=R 33.Rxa4 34.Rb4
- 35.a4 36.a5 37.a6 38.a7
- 39.a8=S 40.Sb6 41.Sc4
- 42.Qxe2+; Sxe2#

こうして並べてみると、解くのは

それほど難しくはないのですが、傑作ほどいかにも簡単にできているように見えるものです。手順はまったく夢を見るようになめらかで、油をさした機械の動きを連想させます。

さて今回は、キャスリングというルールをテーマにした作品を眺めてみます。お楽しみに。

【今月の宿題】

1は客寄せで、誰にでも解けるはずのBabsonです。Hは協力詰で、黒白黒白黒白と指して黒のKをメイトにします。この図を(a)として(b) Pb7→g7 (c) Kd4→d8 (d) Kd4→h7に変えた図も解いて下さい(条件は同じH#3)。

2は実力者用の問題。黒から指し始めて、協力して黒をステールメイト(チェックはかかっているが、指す手がない状態)にします。双方にAUWが出てくるとというのがヒントです。

3は今回のCaillaudと同じ趣向ですが、それと比べればかなり落ちるので、出題用としました。(盤面に白のQが2枚、Rが3枚いることに注意。) 手数が長いのですが、なんとか解いてみて下さい。レトロの解き方は本文を参照のこと。推理の過程は詳細に書く必要はなく、棋譜だけでかまいません。

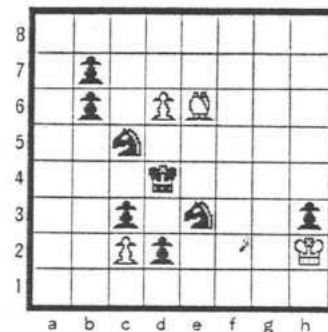
締切：7月31日

募集：読者のオリジナル作品(すでにいくつか投稿あり。数が集まり次第、御披露する予定です。)

宛先：〒563 池田市畑 1-14-10-A 若鳥正

解答者百名突破をめざして、お互いに頑張りましょう!

1 Vaulin & Iljasow (1992)



H#3

2 M. Zigman (1972)



H=7

3 D. Pronkine (1985)

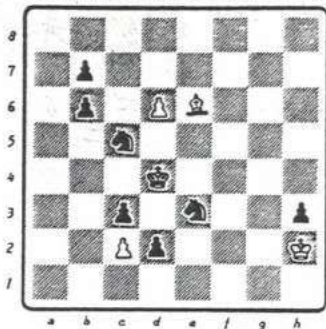


29.5手目の局面。棋譜は?

現代チェス・プロブレム入門

第3回 1994/10 若島 正
 前回の結果

☆ Vaulin & Iljasow (1992)



H≠3

- (b) Pb7→g7 (c) Kd4→d8 (d) Kd4→h7
 (a) 1.d1=B d7 2.Bf3 d8=B 3.Be4 Bf6≠
 (b) 1.d1=S d7 2.Sf2 d8=S 3.Se4 Sc6≠
 (c) 1.d1=R d7 2.Kc7 d8=R 3.Rd6 Rc8≠
 (d) 1.d1=Q d7 2.Qh5 d8=Q 3.Qh6 Qg8≠

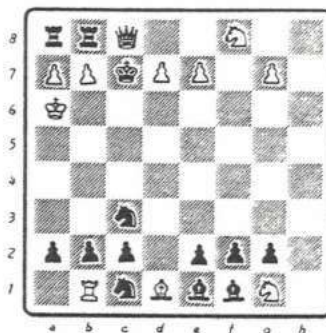
吉田 彰：本当に客寄せだった。

小原義孝：これだけで充分に楽しめた。

喜多真一：Babson をうまく表現した佳作。1問のみの解答ですが、百名突破に協力したいと思います。

▼解答者全員正解。こういうやさしい問題を、必ず一つは選びたいと思います。

☆ M. Zigman (1972)



H=7

1. cxd1=B! Txc1 2. b1=Q! dxc8=S!
 3. Qh7 bxa8=Q! 4. Qh8 gxh8=B!
 5. a1=S! Bxc3 6. Sc2 Bxe1
 7. fxe1=R! axb8=R! =

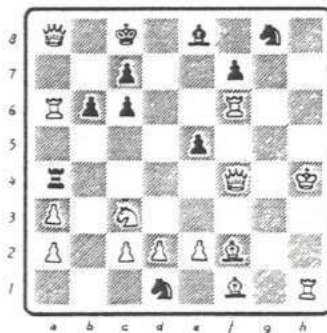
永野 啓：黒のP=Qに限定するにはQが2手動きかつ取られるしかなく、それはh8だろう、という思考過程で簡単に解けましたが、双方A U Wというヒントがなかったら、おそろしく難しく感動的な問題だったに違いありませんね。

山田康平：終形が読めたのでなんとか解けました。

▼今回の最難問。たしかに、協力系では詰将棋と同じで、最終形をまず思い浮かべるのが肝心です。

小林敏樹：解けてしまえば「これしかない」という手順なのだが、h8で成駒のQを取らせることに気づくまでは色々悩まされた。

☆ D. Pronkine (1985)



29.5手目の局面。棋譜は？

- 1.Sf3 e5 2.Sd5 Qg5 3.Sc6 Qe3
 4.fxe3 h5 5.Kf2 h4 6.Qe1 h3
 7.Kg3 Rh4 8.Qf2 Ra4 9.Qf4 hxg2
 10.h4 dxc6 11.h5 Sd7 12.h6 Sb6
 13.h7 Bd7 14.h8=R! 0-0-0
 15.R8h6 Be8 16.Rf6 Rd4
 17.exd4 Bc5 18.dxc5 g1=B!
 19.cxb6 Bc5 20.bxa7 Ba3

- 21.bxa3 g5 22.Bb2 g4 23.Kh4 g3
 24.Bc4 g2 25.Sc3 g1=S! 26.Rb1 Sh3
 27.Rb6 Sf2 28.Ra6 Sd1 29.Bf2 b6
 30.a8=Q+!

広瀬行夫：最後の一手がわかれば解けたようなもの。

▼まず白の手数を数えれば、最終手がQに成る手しかないとわかります。すなわちPf2がxe3xd4xc5xb6xa7と5枚食って進んだわけで、盤面から消えている黒の駒QRBPPPのうち、Pは1枚すなわちa7しか食えず、a3の地点でもう1枚食っていることを考慮すると、黒は2枚のP(g,h筋)が成っていることとなります。後は黒の手数計算とタイミングで、さきほどの軌跡で取られる駒がQRBSPと順列になっていることがわかります(これを指摘したのは金子義隆・筒井浩美の両氏)。

橋本 哲：手数を数えたらすぐ手順が限定できました。明らかな成駒があるのは味が悪いですね。

▼そこが例題のCaillaud作との違い。しかも手数が余計にかかっています。

上田吉一：d4とa3に何を捨てるかで時間がかった。

井上順一：レトロは大好きなのでまたお願いします。

総評

後藤角兵衛：日本の西洋詰将棋は今では紙飛行機の段階かもしれませんが、「人類が月に立つ日」も案外近いのではないのでしょうか。

▼同感。今回、全題正解者が7名もいたのは、世界のレベルと互角に競えるだけの潜在力が我々にある証拠です。

千葉 肇：「入門」を名乗り百名を目指すには≠2とか真の客寄せ作を。現在の内容は高度過ぎて到底「入門」に値する

とは思わない。

▼これもまことにごもっともな意見。解答者が増えるようにいろいろと工夫してみたいと思っています。なお、今回から各問に点数制を採用し、通算50点きざみを突破するたびに、担当者から英国のプロブレム専門誌「プロブレミスト」の最新号のコピーをさしあげることにしました。さらに年間優秀解答者には、詰バラから賞品が出る予定です。

解答成績 (満点: 12+7+10=29点)

	第1回	第2回	計
小林敏樹	30	29	59
塩田 洋	30	29	59
永野 啓	30	29	59
橋本 哲	30	29	59
広瀬行夫	30	29	59
山田康平	30	29	59
井上順一	30	22	52
上田吉一	30	22	52
千葉 肇	30	12	42
喜多真一	30	12	42
佐藤善起	30	12	42
西村 詩	30	12	42
若木栄登	30	12	42
金子義隆	14	22	36
市島啓樹	30		30
駒井信久	30		30
藤沢秀樹	30		30
真鍋 浩	30		30
屋並仁史	30		30
山田嘉則	30		30
筒井浩美		29	29
小原義孝	14	12	26
吉田 彰	14	12	26
後藤角兵衛	9	12	21
神無太郎	8		8

(第1回は満点6+8+16=30点で計算)

今回は、お約束していたキャスリングについての講義を次回廻しにして、英国のプロブレム作家たちとの会見記です。

実はこの夏、歴史的な猛暑を記録した日本を脱出して、三週間ほどイギリスに行ってきました。そして滞在中に、ロンドンから一時間の距離にあるファーンボロという町のレストランで、現地のプロブレム作家二人と会う機会を得ました。

そのうちの一人はジム・グレヴァット氏で、彼は1992年から93年の二年間、英国プロブレム協会（BCPS）の会長を務めました。得意なジャンルはオーソドックスの#3ですが、協会機関誌である「プロブレミスト」では、シンセティックス（作意解を与えて、それを満足する図をこしらえる問題）のコーナーを長く担当していました。政府の環境省に勤務し、会合の席ではいつも奥様同伴で現れるおしどり夫妻としても有名（おお、イギリスの岡田敏！）。今回は奥様のキャロルさんと一緒にでした。

もう一人はセドリック・リットン氏。彼は一九七〇年から現在に至るまで「プロブレミスト」誌でフェアリーとレトロのコーナーの担当をつづけている人で、解答やら投稿やらでいちばん最初に文通相手になってもらった、いわばわたしにとってチェス・プロブレムの恩師です。職業は医師。

グレヴァット、リットンの両氏とも年齢は五十代後半で、あちらの世界ではプロブレムとのつきあいが何歳になってもつづくものだと痛感しました。作家たちは圧倒的に中高年層が多いのです。

グレヴァット夫妻とリットン氏は、住んでいる場所が比較的近いこともあり、親友の間柄。お酒にはうるさいリットン氏が注文した銘柄のワインがあいにく切れているとわかったら、すばやくグレヴァ

ット夫人が「あらセドリック、昨日あなたがこの店のを全部飲んじゃったんじゃないの」とからかったりと、楽しい3時間はあっというまに過ぎていきました。



『プロブレミスト』を手にする
グレヴァット氏とリットン氏

——最初に、自己紹介をさせて下さい。わたしは日本でチェス・プロブレムに相当する詰将棋を作っていて、その専門誌でチェス・プロブレムの欄を担当しています。今日は、英国プロブレム界の生の雰囲気を知り、それを日本の読者に伝えたいと思ってやってきました。

グレヴァット：その雑誌を見せてくれないか。詰将棋の図面がどんな感じか知りたいので。（詰バラ7月号を手にとってバラバラとめくる。）おや、ここにも覆面駒が載ってるじゃないか。（と、フェアリーの欄を見せる。偶然「プロブレミスト」の最新号にもわたしの覆面駒作品が載っていて、ご存じだったらいい。）——それは、実を言うとわたしの作品なんです。

グレヴァット：なんだ、タダシの作品だったのか（笑）。

——現在、詰バラの会員は約二千名くらいなんですけど、「プロブレミスト」の場合はどうでしょうか？

グレヴァット：六百名くらいで、そのうち三百名が英国の会員、残りの三百名が海外の講読会員だ。しかしそれにしても二千名とは凄いな数字だね！ 私たちは財

政的に困っている。それはPCCC [注：世界チェス連盟の永続委員会として設けられた、プロブレム作家のための世界組織] にしてもそうだ。

——わたしはこちらに来る前、昨年カスバロフ対ショートの世界選手権がロンドンで行われて話題を呼んだから、もっとチェス人口もプロブレム人口も多いのかと思っていましたが……。

グレヴァット：そう、たしかに将棋に比べてチェス人口は少ないかもしれない。プロブレムをやる人間となると、さらに一握りだ。

——しかし、プロブレムは一生のつきあいだという印象を受けるのですが。

キャロル：そう言えば、この前アダム・ソビイがテレビのクイズ番組に出たんですよ。勝ち抜きチャンピオンの若い女性を相手にして、いい勝負だったけど、最後のアナグラムの問題で負けちゃって。

グレヴァット：アダムは凄いな。六十八歳で、「プロブレミスト」の担当はするわ、新聞のクロスワードの常連だわ、毎日自転車でも何マイルもサイクリングをしてるといふんだからね！

——話は変わりますが、最近詰将棋界では、コンピュータによる検討が話題になっています。過去の名作として通っていたものが、コンピュータに余詰を発見されたりして……。

グレヴァット：プロブレムでも事情は同じだね。協力詰なら#6まで、オーソドックスなら#4まで検討できるし、またその助けは不可欠だ。

——そこでおうかがいしたいんですが、将来コンピュータが創作にまで進歩する可能性をどう思われますか？ たとえばメレディスだったらどうでしょうか？

グレヴァット：メレディスというのは配

置駒の少ない簡素図式のことなんだよ。

（と、隣のキャロルに向かって説明。さすがの奥様といえども、専門用語まではご存じないらしい。）昔、ノーマン・マクラウドが、配置駒4枚ですべての可能性をコンピュータにかけて調べてみたことがある。その結果は、とりあえずプロブレムになっているものもあったが、退屈なものばかりだったようだ。

——ということは、プロブレムの将来については楽観的なのですね。安心しました。ところでリットン氏におたずねしますが、今まで何局くらい発表されたのですか？ それはフェアリーが大半なのではないですか？

リットン：過去の発表作は百局くらいしかないんだよ。最初はオーソドックスの#3に熱中していたが、六十年代の後半になってから協力詰のおもしろさを発見してね、そこからフェアリーに深入りしたわけだ。

——最後に、グレヴァット夫人におたずねしたいと思います。これは具合の悪い質問かもしれませんが、いちばん重要な質問だとも思いますので……。

キャロル：どうぞなんでも。——いったいどうやって、プロブレム作家と一緒に暮らしておられるのでしょうか？

キャロル：（大笑）そりゃもう苦勞してますよ。毎年世界大会には一緒に行ってるんだけど、スペインで大会があったときには、予定されていた会場のホテルがなんと改修中で、急遽変更になって、そこに行ったら、町もホテルも最悪！

グレヴァット：いちばんかわいそうなのは、マクラウドの奥さんのダフネだよ。大会に参加するのに、彼は愛用のコンピュータを大事に両手で抱えていった。そ

の後ろで、ダフネが重たいスーツケースを二つ両手に持って、フウフウ言いながらついてくるんだ。それを見たジョン・ビーズレーがこんな戯れ歌を作った。

大声で泣きわめくは
ダフネ・マクラウド。
プロブレム作家の妻は

哀れなるかな。(一同爆笑)
——詰将棋もプロブレムも、話は似たようなものですね。

グレヴァット：来年の夏には世界大会がフィンランドであるから、タダシも参加したらどうだい。大勢の世界のプロブレム作家たちに会えるよ。

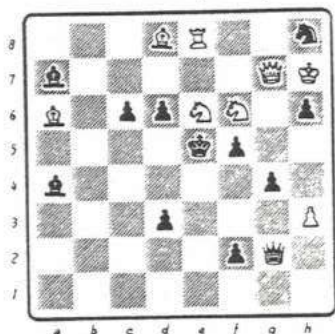
——ぜひ参加したいと思います。本日はどうもありがとうございました。



仲睦まじいグレヴァット夫妻

この会見記に登場する英国の作家たちの作品を紹介します。

☆ J. Grevatt (1985)



3

グレヴァット氏がもっとも得意とするオーソドックス#3の一局です。Re8とSe6、さらにQg7とSf6は、いずれもSが移動すると開き王手でチェックがかかる形になっています。これを専門用語でバッテリーと呼びます。初形からわかるように、本局の狙いはこの二つのバッテリーによる開き王手をどう実行するかです。

まず、働いていない駒の活用で1.Ba5とします。この手は、次に放置しておく2.Bc3+ Bd4 3.Bxd4#のメイトを狙っています(これをスレットと呼ぶ)。主要な変化は次の4通り。

1...Bd4なら2.Sg5+ Kf4 3.Sh5#

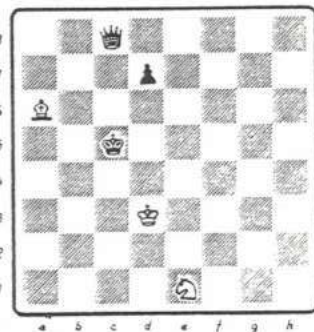
1...Qd5なら2.Sh5+ Ke4 3.Sg5#

1...Qe4なら2.Sd7+ Kd5 3.Sc7#

1...f4 なら2.Sc7+ Kd4 3.Sd7#

いずれも、黒の受けが、自ら退路を塞ぐ手(セルフ・ブロック)になっていることに注意して下さい。

☆ A. Sobey (1994)



H#3 2解

アダム・ソビイ氏は、「プロブレミスト」誌で長くスタディ(エンドゲーム・スタディの略で、一種の終盤問題)の欄を担当しています。作品はオーソドックスもフェアリーもあり、氏の関心の旺盛さを示すところ。

協力詰では、複数解を設定するのが現代の主流になっています。この作品では

解が二つあります。さて、すぐにそれが見えますか？

1.d6 Kc3 2.Qe6 Sd3+ 3.Kd5 Bb7#

1.d5 Kd2 2.Kd4 Bd3 3.Qc5 Sf3#

どちらの解も、駒が盤のへりに接しない中央での詰め上がりです。最終形では、白の駒はすべて詰め形に参加していますが、これをモデル・メイトと呼びます。いくつになっても若々しい、ソビイ氏の最新作でした。

【今月の宿題】

1は千葉氏のご要望にお答えして、やさしいオーソドックスの#2。これはセドリック・リットン氏の若かりし頃の作品です。初手のキーだけではなく、主要と思われる変化も書いて下さい。リットン氏の言葉では「このテーマは、それ以前にもそれ以降も見たことがない」との話。さて、その珍しいテーマとは？

2は、わたしの大好きな作家の一人、故ノーマン・マクラウド氏の軽作。手数が長いのですが、ロジカルなので詰将棋マニアには理解しやすいはず。初形で白にやってみよう手がありますが、いきなりそれを実行すると失敗するので、まず準備工作をしてから……というのがヒント。

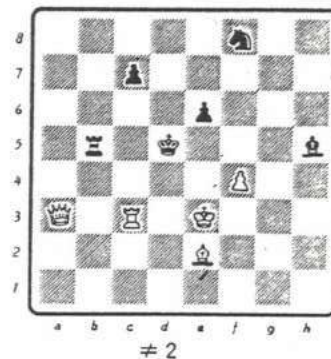
最後の3は、ついに待望の読者からの投稿作品です。「M. Caillaudの作品を紹介されて、自分も作ってみよう」とりかかったのはいいが、やってみてこのテーマがいかに難しいかを実感した」とは作者の感想。こういう作品が現れて、この欄を始めてよかったとつくづく感激しました。完全であることを祈ります。解答は棋譜だけでもかまいません。

解答締切：10月31日

宛先：〒563 池田市畑 1-14-10-A

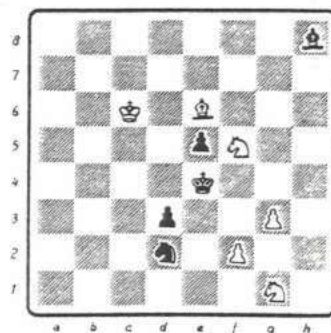
若島正

1 C. Lytton (1958)



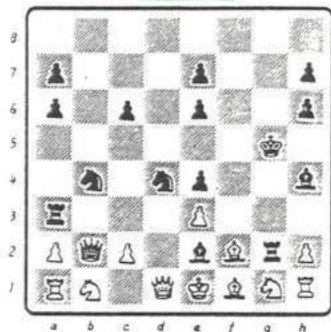
2

2 N. Macleod & T. Lewis (1988)



9

3 広瀬行夫



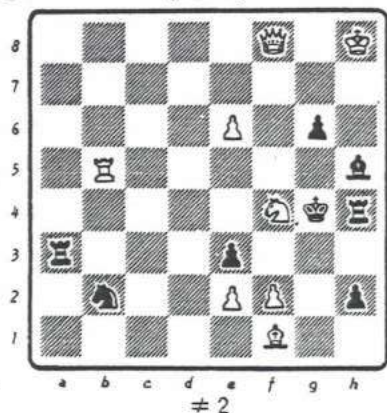
28.5手目(白が29手目を指した後)の局面。棋譜は？

現代チェス・プロブレム入門
第4回 1995/1 若島 正

今年度から、この欄は毎月連載となりま
した。奇数月は作品鑑賞と出題コーナ
ーで、偶数月は結果発表になります。新たな
装いで出発したいと思いますので、初心者
から実力者まで、大勢の方の御参加をお待
ちしています。

再スタートにあたって、しばらくは「現
代の一流プロブレム作家たち」という特集
を組んでみたいと思います。そのトップ
バッターは、旧ソヴィエトの作家Josif
Kricheli (1931-1988)です。

A (1977)



Aは、Kricheliとしては比較的数が少な
いオーソドックスの#2ですが、現代的な
2手問題を理解していただくために取り上
げました。

まず図面を見て気がつくのは、白のSf4
が邪魔駒になっている点です。これをど
かに移動すれば、次にQf3#でメイトにする
手を狙う(これをスレットと呼ぶ)ことが
できます。それでは、どこにSを移動すれ
ばいいのでしょうか?

最初に、1.Sd3?としてみます。これは
2.Qf3#と2.Qf4#の2通りのスレットを見

ています。ちょっと見た目には、これを同
時に防ぐ手はなさそうに思えますが、実は
1...Ra8!とQをピンして逃げる手段がありま
した。結局、1.Sd3?は失敗です。

そこでSの移動場所を訂正して(これを
コレクションと呼ぶ)、1.Sg2?としてみま
しょう。今度はBによるh3への利きが消え
たので、スレットは2.Qf3#だけです。先ほ
どの1...Ra8なら2.Sxe3#で詰まそうとい
うわけです。注目すべきは、スレットを防い
で1...Rh3の受けなら2.Qf4#と、第一の紛れ
のときのメイトの手が復活するところです
(これをメイト移動と呼ぶ)。さらに
1...Kh3なら2.Sxe3#。これで解けたかに見
えますが、黒には1...exf2!の受けが残されて
いました。やはり1.Sg2?も失敗です。

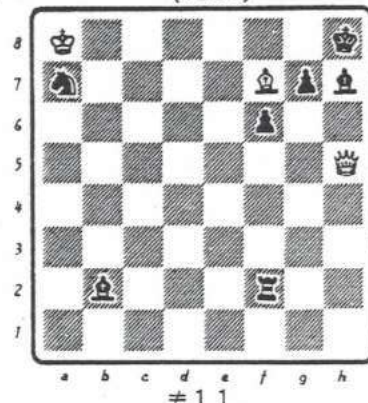
そこで再度白はコレクションで1.Sd5!
とします。実はこれが正解のキー。今度はR
によるg5への利きが消えていますので、ス
レットは2.Qf4#だけです。第二の紛れのと
きと同じで、1...Ra8あるいはRa4やSd3なら
すべて2.Sxe3#ですし、1...g5なら2.Qf3#
が復活します(メイト移動)。最後に、
1...Kg5も2.Sxe3#で大丈夫。これでよう
やく解けました。

もう一度、解をまとめておきます。#2
の解答を書くときの参考にして下さい。

- 1.Sd3? (2.Qf3, Qf4#)
1...Ra8!
1.Sg2? (2.Qf3#)
1...Rh3/Kh3, Ra8 2.Qf4/Sxe3#
1...exf2!
1.Sd5! (2.Qf4#)
1...g5/Kg5, Ra8 2.Qf3/Sxe3#

現代#2のかかなりの部分は、こうした本
手順と紛れ順などとの関連によるパター
ン・プレイを主題としています。このパ
ターン・プレイも、いずれそのうちに少し
ずつ取りあげていくつもりです。

B (1981)



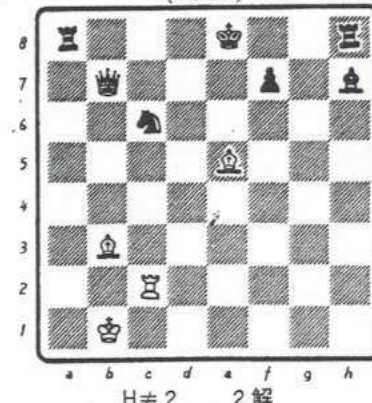
オールラウンド・プレイヤーの Kricheli
は、オーソドックスの長手数を取りわけ得
意な分野の一つにしています。そのほとん
どは論理的な趣向手順を中心にするもの
で、相当複雑な作品もありますが、ここ
では簡素な仕掛けのB図を紹介します。

初形で目につく手は1.Bg8?で、1...Kxg8
なら2.Qe8#と話はうまいのですが、1...Rh2!
という受けがあって、2.Qxh2 Kxg8でいけ
ません。この筋が実現するように、まずは
準備工作です。

1.Bg6!とします。これには1...Rh2なら
2.Qxh2 Kg8 3.Qb8#までなので、1...Kg8の
一手。そこで2.Qd5+ Kh8 3.Qd8+ Bg8と
して、縦横がひっくりかえったところで
4.Bf7! Kh7 5.Qd3+とします。5...f5には
6.Qh3#があるので5...Kh8 6.Qh3+Bh7と
なって、再度7.Bg6!。以下7...Kg8 8.Qe6+
Kh8 9.Qe8+ Bg8の形にしておいて、狙い
の10.Bh7!を放てば、今度は受けがなく
10...Kxh7 11.Qh5#まで。現代詰将棋にも
通じる、洗練された一局です。

Kricheliのもう一つの得意分野は、論理
的な協力詰です。そのC図を例題として、
説明がのびのびになっていたキャスリング
のルールを解説しておくことにします。

C (1964)



キャスリングをするには、次の条件が必
要になります。

- ①KもRもこれまで一度も動いていない。
- ②いまKにチェックがかかっていない。
- ③Kの通過地点に敵の駒が利いていない。

問題図で、KとRがキャスリング可能な
位置にあるときは、①の逆が証明されな
い**かぎりキャスリング可能**であるとします。
たとえば、C図では黒はどちらの側にも
キャスリング可能です。(Kサイドのキャ
スリングは0-0で、Qサイドのキャスリン
グは0-0-0で、それぞれ書き表します。)
そこで二つの解は、この両側のキャスリン
グを実現させます。

- 1.f5 Rc4 2.0-0 Rg4#
1.Sb4 Bc4 2.0-0-0 Be6#

どちらの解も、いったん白のBとRの線
を通して、キャスリング不可能な状態に
しておくとところがパラドキシカルで実に洒落
ているではありませんか。N. Macleod が
「H#2 キャスリング問題の最高傑作の有
力候補」と評している、美しい作品です。

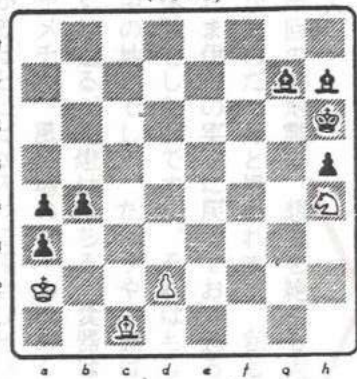
一般に、与えられた図がキャスリング可
能かどうかを検証するのは、興味深いレト
ロのテーマを提供します。それについて
は、また別の機会に。

【出題コーナー】

Kricheliの協力詰2手を、駒数の少ないものばかり5題揃えてみました。黒白黒白と指してメイトの形を作って下さい。いままでオーソドックスしか興味がなかった人でもこのジャンルのおもしろさが味わえる、絶好の入門篇です。多数の解答を期待しています。これを解いてみると、Kricheli好みのテーマがわかると思います。3は、この図を(a)として、指定のように図を変えた(b)もH≠2として解いて下さい。

解答の締切は1月末日。宛先は〒563池田市畑 1-14-10-A 若島正まで。

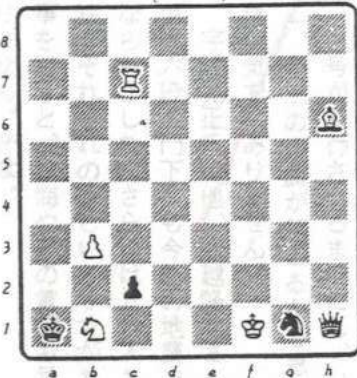
1 (1979)



H≠2 2解

2

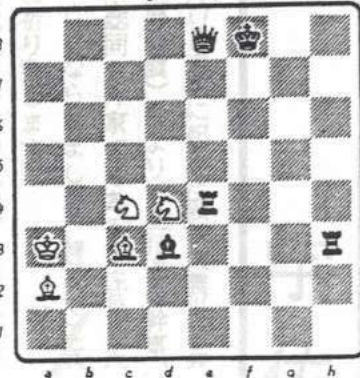
(1967)



H≠2 2解

3

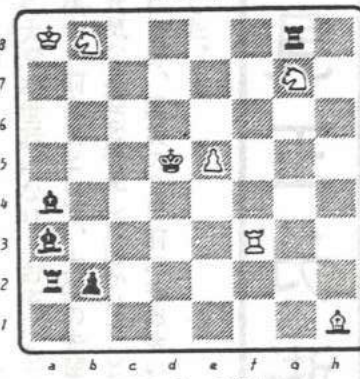
(1979)



H≠2 (b)黒Q→S

4

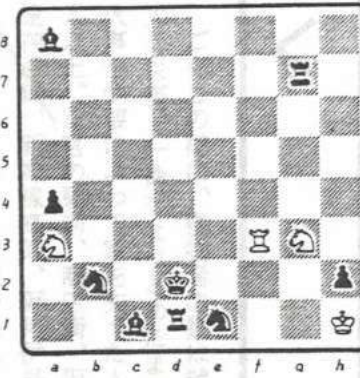
(1965)



H≠2 2解

5

(1979)



H≠2 2解

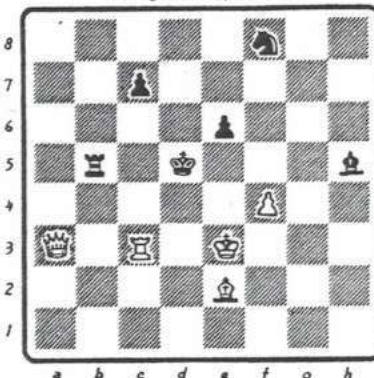
1995/2

現代チェス・プロブレム入門

第3回の結果

若島 正

1 C. Lytton (1958)



≠2

1.Qa6! (2.Qc6≠)

1...Rc5/c5 2.Rd3/Bc4≠

1...Rb6/Be8 2.Qd3/Bf3≠

広瀬行夫：やさしいなんてとんでもない！詰将棋を始めた頃の方がよみがえる。

▼と言ってくれた方は一人だけで、テーマに関しては、ほぼ解答者全員がハテナ？と首をひねりました。実はわたしも、作者自身が教えてくれなかったら、永遠に謎のままだったでしょう。

Lytton: 白の相互干渉が狙い。原因は使用駒数がなんと25枚もあって、推敲の大切さを学んだ。

▼たとえばRとBのように、異なる線駒が配置されているとき、その片方が利き筋の交点に移動すると、もう一方の駒の利きが遮断されます。これを専門用語で干渉（インターフェアランス）と呼びます。一般にオーソドックスでは、黒の相互干渉はよく見かけるテーマなのですが、たしかに白の相互干渉（Rd3/Bc4）は見たことがありません。ですから、

千葉 肇：Rd3でQがc4に利いているのと

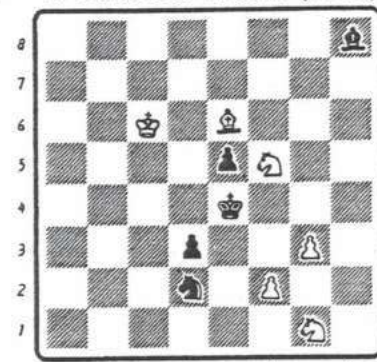
c5がセルフブロックになってBc4とできるのをうっかりしていた。

▼という評が、作者の意図をもっともよくくんでいえます。でもやはり、作品鑑賞って難しいですね。

井上順一：Sf8の配置の意味は？

▼1.Qe7 (2.Qd7≠)の余詰消しです。

2 N. Macleod & T. Lewis (1988)



≠9

1.Sd6+ Kd4 2.Sb5+ Ke4 3.Kc5 Sb3+

4.Kb4 Sd2 5.Sd6+ Kd4 6.Sf5+ Ke4

7.f3+ Sxf3 8.Sh3 Sd2 9.Sg5≠

永野 啓：白のやってみたくい手とは1.f3+Sxf3 2.Sh3 だと思いますが、2...Sd4+!でダメ。白Kを動かさなくても黒のBf6が来てお手上げです。ギリギリまでねばって結局白旗！僕は世界でいちばん長くこの問題を考えた人間ではないでしょうか。

▼という解答が送られてきた後で、即座に第2便が到着。

永野 啓：今日夜8時、入浴中に、もう忘れようと思っていた“あの”プロブレムの変化手順がピシッとひらめいてしまった。

▼この粘り、まったくたいしたもの。あんたはエライ！

永野氏が書いているとおり、まず目につくのは1.f3+? Sxf3 2.Sh3ですが、2...Sd4+!でチェックをかけられて逃れ。そこでまず

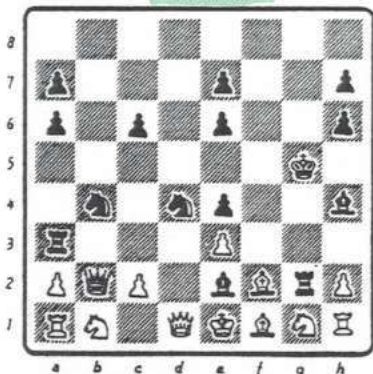
白は準備工作としてKを移動させておくことを考えます。しかし、いきなり1.Kc5?と動かすと、1...Sb3+! 2.Kb4 のとき2...d2! で次にKd3またはd1=Qを見せられて、まったくつかまりません。このプロブレムの狙いは、そこで準備工作のさらに前段の準備工作として、1.Sd6+! Kd4 2.Sb5+ Ke4といったんSをb5に移動しておくところにあります。それから3.Kc5 Sb3+ 4.Kb4とKの移動を実行に移せば、今度は4...d2 でも5.Sc3+ Kd3 6.Bf5+ e4 7.Bxe4+ Kd4 8.Sf3#まで、連続王手で詰ませることができます。この変化は、詰将棋マニアにはそう難しくはないだろうと思っていたのですが……。

橋本 哲：4...d2の変化は、ナイトの動きに慣れていない私には逃れ筋に見えてしかたがなかった。

山田康平：Kを左下隅でうろうろさせる迷路にはまりこんだ。4...d2の変化が難しい。▼この難所さえ過ぎると、後は予定どおりと言いたいところですが、6.Sf3+? Sxf3 7.Sf5+ Ke4 8.Kc3 …… 9.Sd6#の落とし穴にはまった解答が1通。これは残念ながら、8...Sd2で逃れです。

駒井信久：f3+ と捨ててSh3 という手自体が見えず苦勞した。

3 広瀬行夫



28.5手目(白が29手目を指した後)の局面。棋譜は？

1. d4 f5 2.Bh6 gxh6 3.g4 Bg7 4.g5 Bf6 5.g6 Bh4 6.g7 Sf6 7.g8=R+ Kf7
- 8.Rg4 Rg8 9.Re4 Rg3 10.f4 fxe4
- 11.f5 Sd5 12.f6 Kg6 13.f7 Qh8
- 14.f8=S+ Kg5 15.Se6+ dxe6 16.b4 Bd7
- 17.b5 Sb4 18.b6 Bb5 19.d5 Sc6
- 20.d6 Rf8 21.d7 Rf2 22.d8=Q Ra3
- 23.e3 Bc2 24.Qd3 Qb2 25.Qa6 bxa6
- 26.b7 Sd4 27.b8=B c6 28.Bg3 Rg2
- 29.Bf2

作者：M. Caillaudの作品を紹介されて、自分も作ってみようとしてとりかかったのはいいが、やってみてこのテーマがいかにも難しいかを実感した。(ついに完成した!と思ったことは10回くらい。そのたびに、簡単な手順前後やキャスリングなどを見落とし、奈落の底へ突き落とされる思い。)完全な証明を紙の上に書いてみて、初めて完成と言えるのではなかろうか。ということで、その証明を書いてみます。

▼以下、作者はA4用紙4枚にわたって、解が唯一であることの「証明」を試みています。ここではその説明はできませんが、熱意が実って、みごと完全でした!

広瀬氏も書いているとおり、本作は昨年7月号で紹介したCaillaudの傑作のレトロAUW(27.5手)が創作のもとになっています。条件面ではそれを上回るものではありませんが、初形の明らかな成駒がないことや、パズルの要素で、充分に鑑賞に耐える新作と呼べると思います。最初は人まねでかまいませんから、まずとにかく作ってみることが大切なのです。

解き方の手順ですが、初形で黒の駒が1枚も取られていないことに注目して下さい。白の駒はa, e, e, h筋で計4枚取られています。その筋の白のPはすべて残っていますので、取られた駒はすべてP以外であり、結局消えている白のb, d, f, g筋のP

はどれも成ったことになり、それだけで20手を費やしています。

橋本 哲：前回の同趣向のものよりはるかに難しい。作ってみようと思って作れるものなのでしょう。

塩田 洋：Rの入れかえなど、独創的なトリックでパズル作家の面目躍如。世界のレベルに達するのも時間の問題。

永野 啓：実に傑作! 14手目チェックでKの着手を限定したりするあたりもみごとだし、15手目以降=Q(最難関?)をめぐる手順は解いていてしびれました。黒のRの使い方も軽いアクセントで、最初これに気づかず、28手目の局面で頭が真っ白になりました。この作、いま見直してみると、後になればなるほど盛り上がっていますが、これは広瀬氏が作りながらどんどん上達していった跡のようにも思えます。次作が早くも楽しみです。

小林敏樹：至る所で工夫を積み重ねているのがよくわかる。それにしても実際に作ってしまうとは凄い。

山田康平：森流でさんざ苦しんだ末、最後は長島式コンピュータ作戦でようやく解きました。

真鍋 浩：Rf2でg3のRをスイッチするのが盲点だった。「手順前後が許されない手順」を考えるとわりとスラスラ解けた。

井上順一：Pを成る順番を考えさせられた。Rのボタンタッチがうまい。

金子義隆：どう指してもよさそうな序盤が完全に限定されているのには驚きです。中盤まで左辺がまったく捌けないので焦燥感がいっぱい。

上田吉一：佳作! 海外の雑誌に投稿をおすすめ。

▼詰将棋でいうならば、まさしく看寿賞クラス。広瀬氏の労に報いるため、特別に詰バラより賞をさしあげることにしました。(賞品は、創棋会作品集『月下美人』。)

解答成績 (満点：4+9+10=23点)

	持ち点	第3回	計
小林敏樹	59	23	82
塩田 洋	59	23	82
永野 啓	59	23	82
橋本 哲	59	23	82
山田康平	59	23	82
広瀬行夫	59	14	73
井上順一	52	14	66
上田吉一	52	10	62
真鍋 浩	30	23	53
金子義隆	36	14	50
千葉 肇	42	4	46
喜多真一	42	4	46
佐藤善起	42	4	46
西村 詩	42	4	46
駒井信久	30	12	42
小原義孝	26	4	30
吉田 彰	26	4	30
藤井美大		4	4

▼というわけで、難問ぞろいにもかかわらず、小林敏樹・塩田洋・永野啓・橋本哲・山田康平の5氏がみごと94年度出題分の9題を全題正解されました。年間優秀解答賞として、詰バラから棋菱が贈られます。また、真鍋浩・金子義隆の2氏には、50点突破賞として、担当者より専門誌「プロブレミスト・別冊」のコピーをお送りしました。

▼95年度の解答競争は、奇数月の6回、5題ずつの計30題で争われます。問題数を増やすと同時に、なるべく易しいものを多く選ぶのが今年の方針ですので、大勢の方々の解答参加をお待ちしています。

なお、スペースの都合もあり、解答者の得点は詰将棋学校と同じで年度末にのみ発表します。得点の累計が50点きざみを越えると、「プロブレミスト」誌が入門者用に発行している別冊のコピーをお送りするサービスに変更はありません。

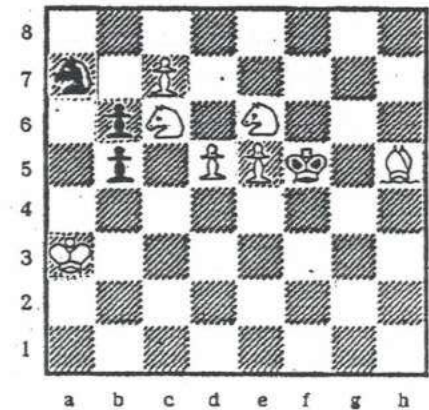
現代チェス・プロブレム入門
第5回 若島 正

今回は協力詰の最高峰 Fadil Abdurahmanovic (1939-)の作品展です。

彼はサラエヴォ在住で、紛争の戦禍で負傷したというニュースが流れてファンを心配させましたが、幸いに命には別状なかったようです。彼の得意は協力詰(それもH≠2)で、不可能と思われるような条件を次々と実現させて、プロブレム界を驚かせました。



A (1983)



H≠2 本文参照

まずこの図を御覧下さい。これは彼が得意とする、特殊なツインの作り方の好見本です。

これを(a)として解くと、1.Ke4 c8=S! 2.Kf5 Sd6≠まで。そこで次の指定は

(b): (a)のキーを指した局面からH≠2。

つまり(a)から1.Ke4 と進んだ形から始めます。解は1.Kxd5 c8=B! 2.Kxc6 Bf3≠。そして次は

(c): (b)のキーを指した局面からH≠2。

そこで(b)から1.Kxd5 と進んだ形から始めると、解は1.Kxe6 c8=R! 2.Kd7 Bg4≠。そして最後は

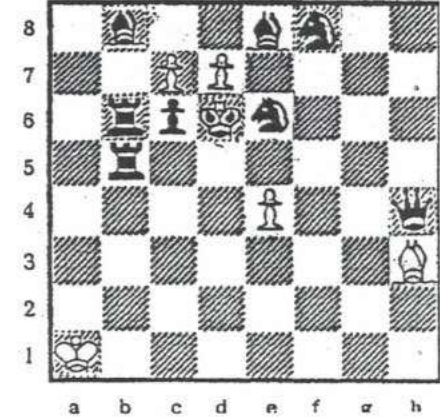
(d): (c)のキーを指した局面からH≠2。

そこで(c)から1.Kxe6 と進んだ形から始めると、解は1.Sxc6 c8=Q+! 2.Ke7 Qe8≠。

この四つの解を合わせると、みごとに四種成(A U W)が出てきました。

この連続ツインによるA U Wは、彼がすでに1960年に実現させていますが、本図はさらに推敲して駒数を2枚減らしたものです。なお、これも超一流作家のHans Peter Rehm が、(d)で1.Kf5としてKの一回転になる改作案を発表しています。

B (1990)



H≠2 4解

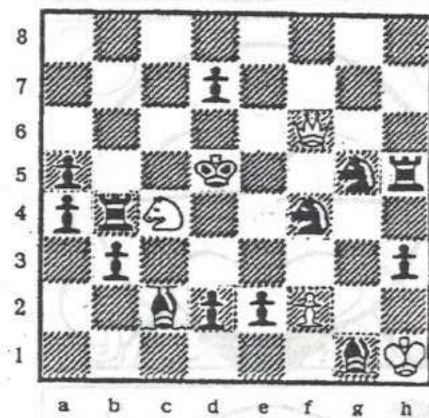
A U Wのテーマをさらに展開したのがB図で、これはAbdurahmanovicの代表作の一つかと思えます。ともかく解を見ていただきましょう。

- 1.Re5 d8=B! 2.Sc5 c8=S!≠
- 1.Sd8 c8=B! 2.Kc7 dxe8=S!≠
- 1.Sg5 cxb8=R! 2.Kc7 d8=Q!≠
- 1.Qd8 dxe8=R! 2.Kd7 cxd8=Q!≠

なんと、ダブルA U Wが出現しました！
図を変えてのツインよりも、こうして一つの図で複数解にしているところが創作難

度が高く、Abdurahmanovicの高度な作図技術に感嘆させられます。3番目の解にh3Bが働かないところが唯一の欠点かと思いますが、これほど美しくできていると気になりません。なお、このダブルA U Wも原型が1979年に発表されていますが、そのときは4解ではなく(a)(b)(c)(d)という形式でした。

C (1981)



H≠2 8解

記録を狙った作品としては、こんな例もあります。8解という多さに驚くかもしれませんが、実はこれが重要なヒントです。とにかく、一つ解を見つけてみましょう。

- 1.Kc5 Qd6+ 2.Kb5 Sa3≠
- 1.Rb6 Qe5+ 2.Kc6 Sxa5≠

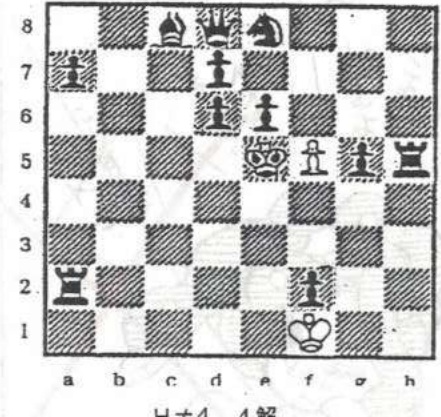
ここまでくると、どうやら作者の狙いが見えてきます。チェスで8という数字に関係するものと言えば、思いつくのはナイトの八方跳び。これはプロブレムでもよくテーマになって、専門用語でナイト・ホイールと呼ばれますが、それを協力詰の2手でしかも白の最終手に実現させようというのです！

そうとわかれば、あとはその線に沿って詰め上がり形を選べばよろしい。残りの解を列挙します。

- 1.Rb5 f3 2.Rc5 Sb6≠
- 1.Ke4 Qc3 2.d5 Sd6≠
- 1.Ke4 Qd4+ 2.Kf3 Se5≠
- 1.Se4 Qb6 2.Re5 Se3≠
- 1.Bf5 Qd6+ 2.Ke4 Sxd2≠
- 1.Ke4 Qe5+ 2.Kd3 Sb2≠

手順のやさしさや、同一手(Ke4)の反復が目につくなど、明らかな欠点ではありますが、とにかくこの難条件を克服した手腕には脱帽の一手です。

D (1978)



H≠4 4解

最後に、ユーモラスな構想作を。これも4解というのがヒントで、黒のKはそれぞれ四隅(a1, a8, h1, h8)で詰みます。

- 1.Kd4 fxe6 2.Kc3 exd7 3.Kb2 dxc8=Q
- 4.Ka1 Qc1≠
- 1.Kd5 fxe6 2.Kc6 e7 3.Kb7 exd8=Q
- 4.Ka8 Qxc8≠
- 1.Kf4 f6 2.Kg3 f7 3.Kh2 fxe8=Q
- 4.Kh1 Qxh5≠
- 1.Kf6 Kg2 2.Kg7 f6+ 3.Kh8 f7
- 4.Rh7 f8=Q≠

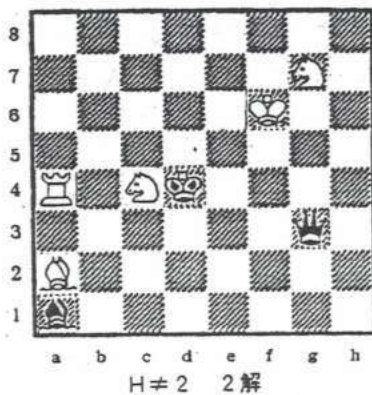
Pの成り場所がそれぞれ違うのがうまい味付け。軽いながらも楽しめる作品です。

【出題コーナー】

Abdurahmanovicの協力詰を、2手4題と3手1題並べてみました。2手はどんなに難しいものでも、多少の根気さえあれば必ず解けるはずですから、ぜひ挑戦してみてください。4番は4解というのがヒントで、ひとつわかれば解けたも同然です。3手の5番は、Abdurahmanovicには珍しくやさしくて楽しい作品です。

解答の締切は3月末日。宛先は〒563池田市畑 1-14-10-A 若島正まで。FAXでの解答も可(0727-53-6557)。

1 M. Mladenovic との合作 (1981)



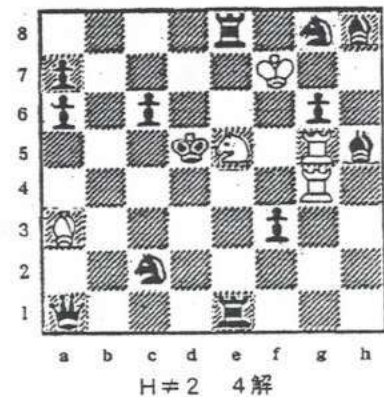
2 (1968)



3 (1990)



4 (1980)



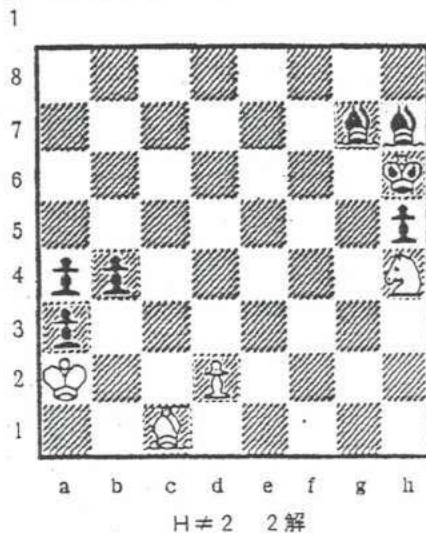
5 O. Catic との合作 (1981)



1995/4

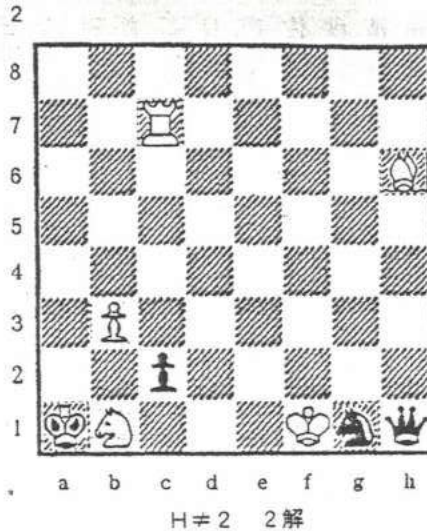
現代チェス・プロブレム入門
第4回結果 若島正

▼ J. Kricheli の作品展は、協力詰2手ばかりの出題が功を奏してか、これまでで最高の29名の解答者が集まりました。とりわけ、稲富享・小畑勉・菊田裕司・小林看空・楳いっとく・則内誠一郎・花田勉・早田雅彦・原岡望の計9名の方々から初解答をいただき、大いに喜んでます。



1.Bg8+Kb1 2.Bh7+d3≠
1.Bf8 Ka1 2.Bg7+d4≠

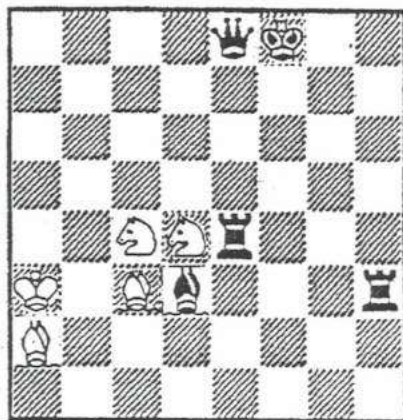
吉田 彰：白からだどと1手で終わるのに、黒からだどどうして回りくどいのだろう。
▼それが不思議なところ。黒はそのままの形でパスしたいのですが、この1手パスのことを、チェスではテンポと呼びます。テンポは Kricheli 好みのテーマで、今回の作品展では3番を除く4題がいずれもそれに関係しています。
佐藤善起：客寄せでも必要な要素は全部入っている。
広瀬行夫：非常に美しい作品。
真鍋 浩：単純だけど好みの作品です。



1.cxb1=B Rc2 2.Qa8 Bg7≠
1.cxb1=R Bc1 2.Qh8 Ra7≠

▼Qが盤の隅から隅へ最遠移動するのは、プロブレムでは昔からよくお目にかかる手筋ですが、これだけ簡潔な表現で、しかも斜めと縦のツインですから、やはり新鮮な驚きがあります。
永野 啓：私の場合どうしてもプロブレムを見ると詰棋と比較して見ている。だから詰棋では実現不能の構想を見るとそれだけで感動するし、逆に詰棋に似ていると「ふう〜ん」と冷たくなったりもする。本作の1手パスは、詰棋ではできない構想の最たるもので、しかもそのパスが最遠移動とくれば、無条件に感動！ 本作でしみじみ2解の良さもわかった。今回のベスト！
▼こういう感想をいただくと、なにも付け加えることはありません。
小林敏樹：これは申し分なくおもしろい。
藤井美大：Qが端から端まで行くのには慣れました。
▼1.c1=S Sa3 2.Sa2 Bg7≠ という解答あり。一瞬、ややっ余詰かとあわてましたが、よく見れば3.Sc3!で逃れです。

3



a b c d e f g h
H≠2 (b) 黒Q→S

(a) 1.Bxc4 Sf5 2.Bd3 Bg7≠

(b) 1.Rxd4 Se5 2.Re4 Sg6≠

稲富 享：駒取りは盲点でした。

駒井信久：邪魔駒消去と気づくまでが大変だった。

小畑 勉：ナイトを取らせるとは思わなかった。てっきり2個のナイトを跳ねて詰ますのかと思った。

▼今回出題の5題のうち、これがいちばん好評でした。これだけはテンポとは異なるテーマで、「白の駒を取る」のが狙いだけです。これは詰将棋派の感覚にはあまりないだけに、盲点になったようです。協力詰の近年の流行の一つであるだけに、ぜひ御記憶下さい。

藤澤秀樹：今回一番の佳作。白Sが1手ずつ動くものと思ひ苦労した。Sを取ったRとBが元の位置に戻るのはお行儀が良い。

小林敏樹：簡潔なスイッチバックの表現。

▼黒2手目は、(a)ではBによるRの遮断(c3Bのピンを外す)、(b)ではその逆にRによるBの遮断(g6への利きを消す)という仕掛けで、うまく元の位置に戻るスイッチバックが表現されています。

4



a b c d e f g h
H≠2 2解

1.Be8 Sd7 2.Rf8 Rf4≠

1.Bf8 Sc6 2.Ra3 Rc3≠

▼初手にg8Rの利きを遮断するのが1.Be8と1.Bf8の2通り、そして白がSを動かすのが1...Sc6と1...Sd7の2通り。従って、この組み合わせは4通りあることになりませんが、1.Be8 Sc6 2.??? Rc3≠ という仮想手順では、この2.???に代入すべき、黒に適当なパスする手が無いのです！ このように、一見2通りの解が存在するように見えて、実は唯一に限定されるというテーマのことを、専門用語でデュアル回避と呼びます。同様に、1.Bf8 Sd7 2.??? Rf4≠ という組み合わせの手順も、2.???のテンポ・ムーヴが存在しないために成立しません。

永野 啓：2手目に黒がパスできるようにSの移動位置を選ぶ。パスの手筋は好きなのでやっぱり好評価A。

千葉 肇：辛うじて動ける黒R。

屋並仁史：どの問題も2組の手順の対比がきれいですが、個人的にはこの4が好きです。

▼美しい手順に完璧な表現。ためいきの出る傑作です。

5



a b c d e f g h

H≠2 2解

1.Rb7 Re3 2.Sc4 Sf1≠

1.Rc7 Kxh2 2.Rc2 Sb1≠

▼実はこれも、4番と同じくデュアル回避がテーマです。すなわち、1.Rb7に対して1...Rd3 2.??? Sb1≠という、正解を左右対称にした順もあるのですが、これだと黒のテンポ2.???が存在しません。(2.Sc4だと、2...Sb1は3.Rxb1!で失敗します。この順に落ちた誤解者がいました。)

藤澤秀樹：ツインらしきがないので不安。

▼この評のように、2解の統一性がわかりにくくて、首をかしげた解答者が大多数。作者の構想はこうです。つまり、もう一つの正解手順を左右対称にひっくり返すと、1.Re7 ??? 2.Re2 Sf1≠ という順も当然考えられるのですが、今度は白の1...???に相当するテンポが存在しないのです！(1...Kxh2だと2.Re2+でチェック。)まとめると、4番ではテンポが2解とも黒にあったのに対して、この5番では黒と白にあります。この黒白の相互テンポによるデュアル回避が、Kricheli好みのネタで、彼はこれで数局作っています。この作者の狙いを指摘したのは、後藤角兵衛氏お一人でした。

【総評】

愉いっとく：詰将棋が中学校レベルの僕ですが、プロブレムの世界では解答王を目指したいとはりきっています。どうぞよろしくお願いします。

西村 詩：どれも巧妙に手が限定されているのに感心しました。中国将棋に「閑着」(手番を渡す手筋)というのがありますが、何となく似ていますね。無意味さに意味を求めると不思議な味わいです。

千葉 肇：3つの指し手がわかってでも残る1手の動かす駒がなかなか見つからない。H≠はオーソドックスより指し手が限定されていて好み。

金子義隆：今回のような出題は大歓迎です。3以外は暗算で解きました。Kricheliは対称性というか、様式美というか、上田吉一氏を思わせるコダワリの持ち主のようです。特に2はやさしいながら凄い！という感じです。

菊田裕司：Kricheliの作品は(5を除いて)テーマがはっきりしている上に無駄な駒がほとんどなく表現に無理がないですね。特に3が好みです。

藤井美大：協力詰を初めて解きました。2つの手順が連動しているようでおもしろいですね。本年は詰将棋よりもチェス・プロブレムに熱中するつもりです。

【成績】(満点：4点ずつ計20点)

20点……22名

小畑 勉・金子義隆・菊田裕司・小林看空
小林敏樹・駒井信久・佐藤善起・塩田 洋
千葉 肇・永野 啓・西村 詩・橋本 哲
早田雅彦・広瀬行夫・藤井美大・藤澤秀樹
真鍋 浩・屋並仁史・山田康平・吉田 彰

愉いっとく・則内誠一郎

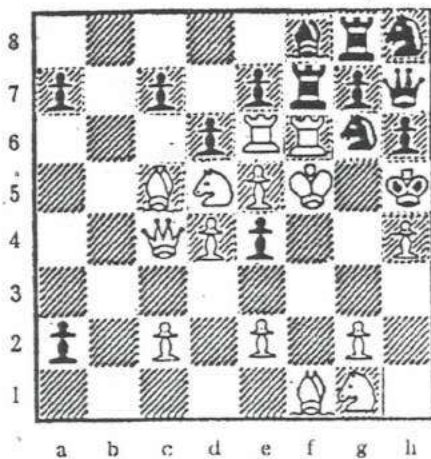
その他の解答者(成績順)

井上順一・喜多真一・後藤角兵衛
稲富 享・花田 勉・原岡 望・小原義孝
▼下線の方々に50点きざみ突破賞進呈。

今回はいよいよ現代を代表するフランスの作家 Michel Caillaud の特集です。

Caillaud は年齢がまだ30代後半と若く、フェアリーやレトロにも強い万能選手で、今やプロブレム界のスーパースターになった感があります。ここでは、彼がとりわけエキスパートとして知られているレトロを2題紹介し、ついでにまだ残っていたアンバッサンのルールも説明しておきます。

A (1979)



H ≠ 1

図で、白が今d2の原位置にあったPをd4に進めた瞬間だとすると、黒はその直後の手で、白のPがd3を通過したと考えて、自分のPe4で相手のPd4をd3の地点で取れます(従って白Pd4は盤面から消え、黒のPd3が残る)。これをアンバッサン(en passant)と呼び、exd3 e.p.と表します。

さてそこで図Aでは、与えられた問題がH ≠ 1ですが、白黒と指して白のKをメイトにする順は存在せず、黒白と指して黒のKをメイトにする順も、1.exd3 e.p. Qg4 ≠ 以外には見つかりません。すなわちこれ

は、図が黒番であり、しかも直前の白の指し手がPd2-d4であったことを証明せよという問題になります。

まず、盤面から消えているのは白がPPで黒がB。黒は白の駒をa筋とe筋で取っています(白はbPがb8で成りました)。消えた黒のBは白マスのBですから、白Pe5をf4に戻すことはできません。

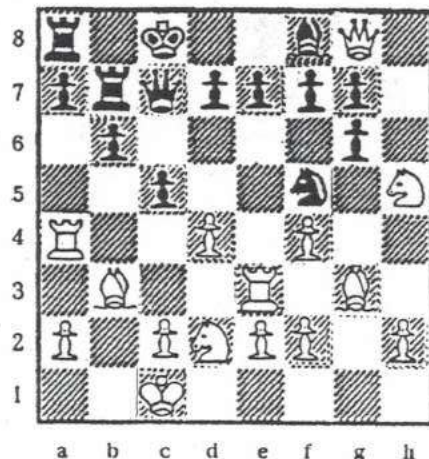
この局面から黒を逆に戻すのは、Pd6をd7に、そしてPa2をa3-a4-a5-a6に、計5手可能です。(Pa2をb6またはb7に戻すには、その前にRをa8に戻す必要があります。)その後は右辺の集団を動かすことになりませんが、そのためには白Kf5をf4に戻さねばなりません。そのとき、Sg6をどこに戻すためには、h4が空いていないとだめで、白はPh4をh3またはh2に戻す必要があります。それにはRがh1に帰っている必要があります。つまり結論として、この図が可能局面であるためには、逆算5手内で白のRをh1に戻す必要があるわけです。その逆算手順は次のとおりです。

- 1.Pd4-d2 Pd6-d7 2.Re6-b6 Pa2-a3
- 3.Rb6-b3 Pa3-a4 4.Rb3-h3 Pa4-a5
- 5.Rh3-h1 Pa5-a6

これでようやく6.Ph4-h2 Kh5-h4が可能となり、後は適当な時期にKf5-f4 Sg6-h4とすれば右辺がほどけます。ここで白の逆算初手をたとえば1.Pd4-d3とすると、4.Rb3-h3ができません。1.Qc4-a6とすると、5...Pa5-a6ができません。同様に、1.Pd4-d2以外の戻し方はすべて白Rの経路(e6-b6-b3-h3-h1)あるいは黒Pa2の経路(a2-a6)の邪魔になり、途中で逆算できなくなるのです! そして、前記の手順を黒から先に戻すと、白が1手足りなくなります。つまり先ほどの逆算手順が絶対となり、図は黒番でしかも1.exd3 e.p.と指せるわけです。

仕掛けは単純ですが、実にうまくできています。Caillaud実力発揮の一局でした。

B (1981)



黒が30手目を指した局面。棋譜は?

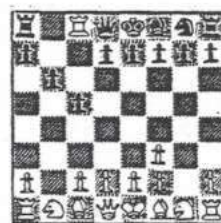
これはCaillaudの数多くのレトロの中でも歴史に残る作品です。まず、盤面から消えている駒は、白がbPのみ、黒がBSです。g6で白の駒が取られていることから、bPはc8で成り、その途中にBまたはSを取ったことになります。

白のそれぞれの駒が初形から問題図の位置まで移動する最短手数を数えてみると、白の指し手にはまったく余裕がなく、30手の範囲では手順がかなり限定されてくるのがわかります。細かい説明は省略して結果だけを述べると次のようになります。
①g6で取られたのはRa1で、a1→d1(0-0-0)→g1→g6と移動した。
②c8で発生した成駒はRで、それはc8→c6→e6→e3と移動した。
③Pg2はf3で駒を取った。
④gxf3の後、KサイドはBh3-Bc6-Sh3-Rg1-Rg4-Ra4という順で動いた。
⑤Rh1がa4に移動した後、QサイドはPd4-Qd2-Qh6-Bf4-Sd2-0-0-0という順で動いた。

ここで最初に戻って、次のような序盤の出だしはすぐに想定できます。

- 1.b4 c5 2.b5 Sc6 3.bxc6 b6 4.b7 Bb7
- 5.c8=R Bf3 6.gxf3 (途中図)

途中図 (6.gxf3)



ここから、先ほどの①~⑤のアウトラインに沿って仮の手順を並べてみます。

- 6...Sh6 7.Bh3 Sg8
- 8.Be6 Sh6 9.Sh3 Sf5
- 10.Rg1 Sh4 11.Rg4
- Sf5 12.Ra4 Sh4 13.d4 Sf5 14.Qd2 Sh4
- 15.Qh6 Sf5 16.Bf4 Sh4 17.Sd2 Sf5 18.0-0-0
- Sh4 19.Rg1 Sf5 20.Rg6 hxc6 21.Qh7 Sh4
- 22.Qg8 Rh5 23.Bg3 Rd5 24.Sf4 Rd6 25.Sh5
- Rc6 26.f4 Rc7 27.Bb3 Rb7 28.Rc6 Qc7
- 29.Re6 Kd8 30.Re3 Kc8

この手順で得られる最終図は、問題図のSf5がSh4になっています。つまり、わずかに1手だけずれているわけです。この1手パス(テンポ)はどこで実現できるのでしょうか。黒がどのようにSを動かしてもそれだけでテンポを失うことは不可能です。また22...Rh5以降は、最終形にするまでに黒は最低8手を必要とするので、その範囲ではテンポを失うことはできません。

さていよいよ、途中図からのCaillaudの大構想をごらんいただきましょう。

- 6...Rb8! 7.Bh3 Rb7! 8.Be6 Rc7! 9.Sh3
- Rc6! 10.Rg1 Rd6! 11.Rg4 Rd3!! 12.Ra4
- Rd5!! 13.d4 Sh6 14.Qd2 Sf5 15.Qh6
- Rd6! 16.Bf4 Rc6! 17.Sd2 Rc7! 18.0-0-0
- Rb7! 19.Rg1 Rb8! 20.Rg6 hxc6
- 21.Qh7 Ra8! 22.Qg8 Rh4 23.Bg3 Re4
- 24.Bb3 Re6 25.Sf4 Rc6 26.Sh5 Rc7
- 27.f4 Rb7 28.Rc6 Qc7 29.Re6 Kd8
- 30.Re3 Kc8

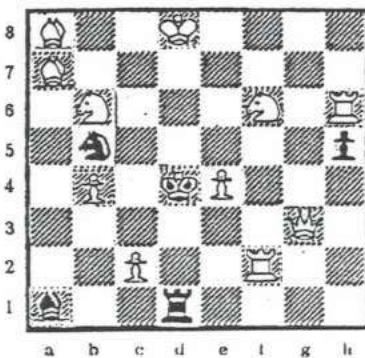
なんと、Ra8によるR鋸が出現しました! ポイントは11手目から12手目で、この場所でテンポを失うためにわざわざRを運んできたのです。この瞬間にしかそれが成立しないのを各自ご確認下さい。上田吉一氏が解けたときに興奮で眠れなかったという、ほとんど伝説的な名作でした。

[出題コーナー]

お待ちかねCaillaudの作品展です。オーソドックス、協力詰、レトロと、比較的駒数の少ないものを各種取り揃えてみました。1は初手のキーだけではなく、主要な変化を必ず書き添えること。3は、通常のH≠3の順だけではなく、白から指しはじめて白黒白黒白で黒のKをメイトにする順（これをSetと呼ぶ）も答えて下さい。

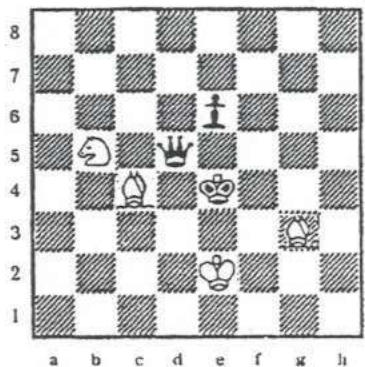
解答の締切は5月末日。宛先は、〒563池田市畑 1-14-10-A 若島正。FAXでの解答も可(0727-53-6557)。

1 (1990)



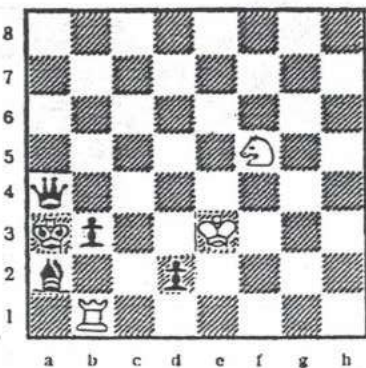
≠2

2 (1990)



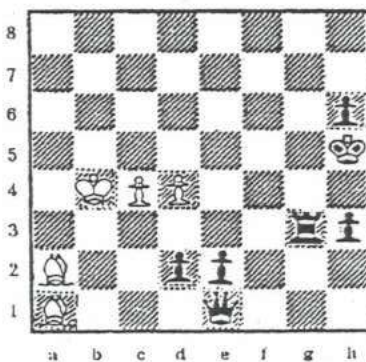
H≠2 2解

3 (1994)



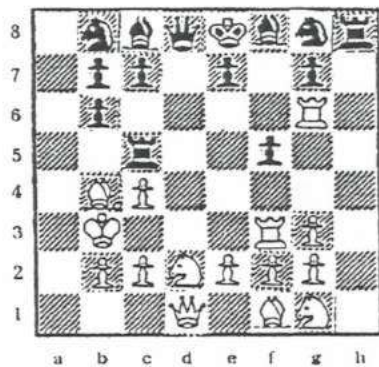
H≠3 Set

4 (1986)



H≠4 2解

5 (1989)



白が2手目を指した局面。棋譜は？

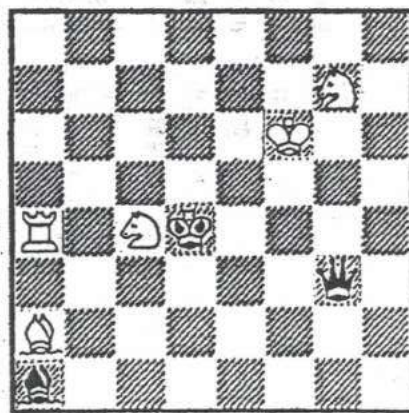
1995/6

現代チェス・プロブレム入門

第5回結果 若島正

▼ Fadil Abdurahmanovic の協力詰作品展には27名の解答者が集まりました。初の解答参加は松田一彦、安川朝哉の2氏。

1 正解21 部分解1 無解5



H≠2 2解

1.Qd6+ Se6+ 2.Kd5+ Se5≠

1.Qf3+ Sf5+ 2.Ke4+ Sb2≠

井上順一：詰め上がりが見当がつかず、最後にやっと解けた。チェックの応酬はおもしろい。

永野 啓：実は今回最後まで残ったのがこれです。まさかここで連続チェックにお会いするとは。おそれ入りました。

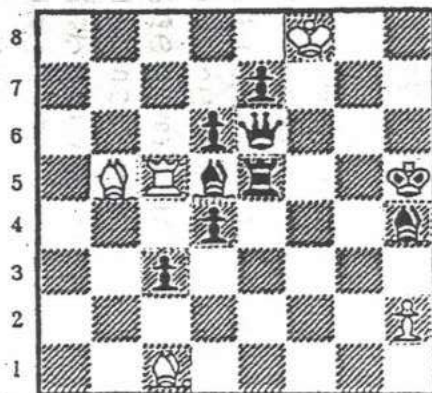
▼黒の2手目がチェックになっていることに気づかなかった方が多かったようです。楡いっとく：大仕掛に見えて、実はとっても繊細な表現。

小林敏樹：余分な駒がなく実に美しい。

広瀬行夫：よく考えるとこの枚数でこの表現はすごい。名作と言えるのでは？

▼1.Qf3+ Sf5+ 2.Ke4+ Se5≠という解答が1通。これは3.Bd4!で詰んでいません。

2 正解26 無解1



H≠2 2解

1.Ba2 Kg7 2.Qb3 Be2≠

1.Re1 h3 2.Qe2 Be8≠

千葉 肇：B・Rを無能にするこの手筋は何のテーマ？

後藤角兵衛：黒の線駒の動きの名称は？

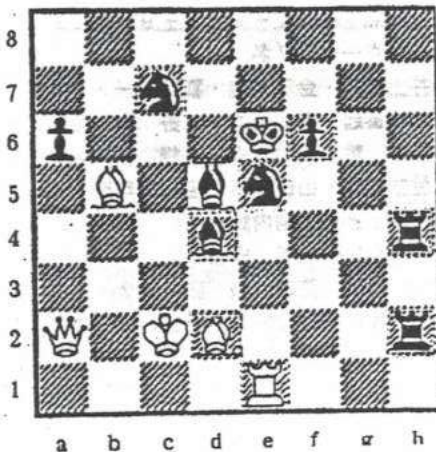
▼白Rと黒Kのあいだに黒の駒が2枚(B・R)はさまっています。その2枚のうち1枚が移動すれば、残りの1枚は自動的にピンされた状態になります。これを専門用語でハーフ・ピンと呼びます。このハーフ・ピンは、オーソドックスの≠2でも協力詰でもよく用いられるテーマですが、この作品ではさらに別のテーマが組み合わせてあります。B+Q/R+Qが同一線上を移動するのがそれで、このテーマをプリストルと言います。

安川朝哉：2月FLの上田氏作を解いていたのでなんとなくわかった。

西村 詩：黒Qをへき地へ移動するとは！井上順一：キングが狭いのでわかりやすい。手順の対称性ではいちばん。

▼すでに1月号でKricheliのQ最遠移動の問題を出題したこともあって、きっと解きやすいのではないかと考えて選んだのですが、期待どおりにほぼ全員が正解でした。

3 正解18 無解9



H≠2 2解

1.Kd6 Rd1 2.Bg2 Bb4≠
1.Kf5 Qa5 2.Sg4 Bd3≠

金子義隆：5日間悩みました。稲富豊氏の短篇を思い出しました。

佐藤善起：超難解で、一つわかってもう一つが解けない。

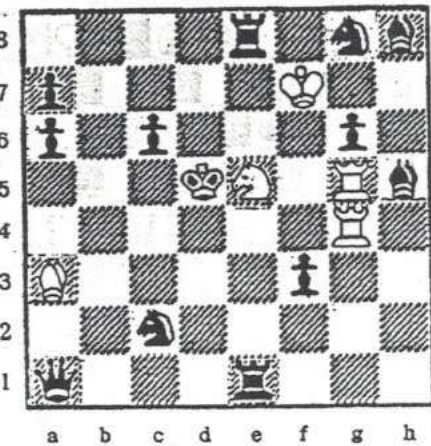
永野 啓：2番目の解がなかなかわからず、Rxe5?やQxd5?などを喧嘩腰で調べたりしたときに見つけたQa5!!はとても印象的。

▼今回の出題では、これがいちばん難物だったようです。その原因は、詰め上がりを構成するバッテリー (R+B/Q+B) が初形には現れていない点で、しかもそのR/Qが初形では黒の駒 (S/B) をピンしていますから、その筋でなんとかしようと思うと泥沼にはまります。最終にR/Qが別の筋で違う駒 (Bd4/Bd5) をピンして詰めるのは、相当見えにくかったはず。このバッテリー編成は作者得意のテーマの一つです。

後藤角兵衛：協力詰ならでは用意周到さ。連砲 (battery) の威力まざまざ。

西村 詩：2解の対比がいちばんおもしろく、今回のNo.1と思う。

4 正解20 無解7



H≠2 4解

1.Se7 Sd7+ 2.Be5 Sf6≠
1.Sf6 Sxc6+ 2.R8e5 Se7≠
1.Sd4 Sc4+ 2.R1e5 Se3≠
1.Se3 Sxf3+ 2.Qe5 Rd4≠

小原義孝：たしかに、ひとつわかったらあとの3つもすぐにわかりました。4種類の合駒がテーマですね。それと1手目黒と白のSが同じ段に跳ねるのも面白いです。

▼e5の地点に黒の駒が4枚利いているのを発見すれば、4解が自然に出てきます。複数解の作り方・解き方のサンプルですね。

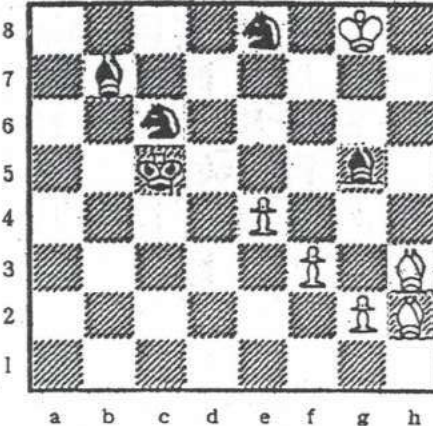
金子義隆：Pa6の配置の意味がわかりません。詰将棋ならPg6とBh5の代わりに白Pg6と置くところですが……。

▼Pa6がないと1.a6 Sd7+ 2... Sb6の順が成立します。Pg6の方はよくわかりません。則内誠一郎：ナイトの練習には最適！

山田康平：芸術！

▼第4解の2...Rd4がSの手に統一できなかったことを残念がる評多し (井上・小林・後藤・永野)。みなさん目がこえてきました。Qをb8に移せば原理的には可能かと思いますが、それだと図式的になって、適切な表現が得られなかったのでしょうか。

5 正解19 無解8



H≠3 3解

1.Kb6 e5 2.Kc7 e6+ 3.Kc8 e7≠
1.Bd8 f4 2.Kd6 f5+ 3.Kd7 f6≠
1.Be7 g3 2.Kd6 g4+ 3.Ke6 g5≠

小林敏樹：詰め上がり判らずしばらく悩みましたが、テーマに気づいて3解が同時に浮かんだ瞬間は感激しました。

真鍋 浩：「やさしく楽しく」そして「笑える」作品。

吉田 彰：白Pの3歩前進3解はなかなか笑える。解いてみて実際やさしかった。

▼思わずニッコリさせられる、とびきりのユーモア作品。なお、この3解のように、Kが同じ色の升目で似た詰め上がりになるのをモノクローム・エコと呼びます。

[総評]

喜多真一：協力詰の最高峰といわれる作品の紹介ありがとうございます。例題Aなどは感動そのもの、目からウロコが……。

佐藤善起：Abdurahmanovicはすばらしい。小林敏樹：最高の作品群でした。作者の他の作品を見たいものです。

塩田 洋：5などに見られる笑いの感覚は詰将棋では省みられない要素だと思う。

松田一彦：答がひとつ見つかると、対になる手順を探していけるのが楽しい。特に5番など。

[成績]

(満点：4+4+4+8+9=29点)

29点……17名

井上順一・金子義隆・喜多真一・小林敏樹

佐藤善起・塩田 洋・永野 啓・西村 詩

橋本 哲・広瀬行夫・真鍋 浩・松田一彦

屋並仁史・山田康平・後藤角兵衛

楢いっとく・則内誠一郎

その他の解答者 (成績順)

駒井信久・花田 勉・藤井美大・吉田 彰

小原義孝・菊田裕司・稲富 享・千葉 肇

藤澤秀樹・安川朝哉

▼下線の方々には50点きざみ突破賞進呈。

[最新情報]

▼英国の専門誌「プロブレミスト」95年1月号に、詰パラの紹介記事が載り、広瀬行夫氏のレトロAUWが解付きで引用されました！詰パラおよび本欄を海外で紹介する道が開けたということで、たいへん喜んでます。

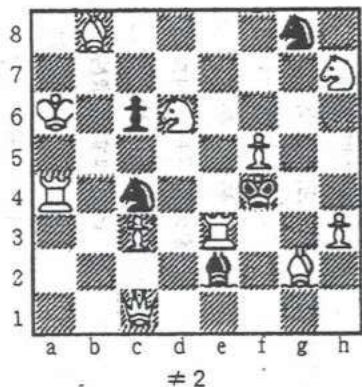
▼その記事の中で「新作投稿歓迎」の旨を書いておいたところ、さっそくオーストリアのAlois Johandi氏からやさしい≠5の投稿があり、大感激しました。同氏はオーソドックスの長手数物を得意とする、一流作家の一人です。これをきっかけに、詰パラに世界各地からの投稿が寄せられ、盤上パズルの国際交流がさかんになればいいなあと夢見ています。

▼他にもほろほちと投稿があり、7月号ではJohandi氏の新作をメインに、とうとうオリジナルばかりの展覧会が開けそうです。お楽しみに。

▼ここで紹介したFadil Abdurahmanovicの協力詰ばかり72題を集めて解説した作品集を独自にこしらえました。50部しか作っていませんので、当分は本欄の賞品として使用します。希望者はぜひ解答にご参加を。これをはじめてとして、いろいろな小冊子をシリーズとして作成する予定です。ご要望があればお聞かせ下さい。

今回は、作家特集をお休みにして、5月に開かれた全国大会の席上で名局鑑賞として解説したものを、6題のうち3題ここでふたたび紹介し、さらに新作を寄せていただいた Alois Johandl 氏の代表作を1局お見せすることにします。

A C. Mansfield (1917)

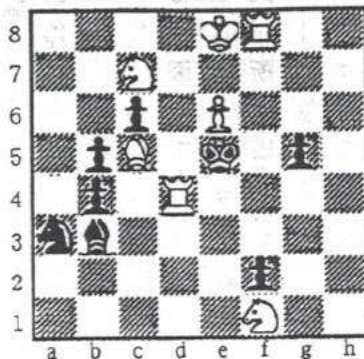


最初は古典的な2手問題を。作者の Mansfield 氏は英国の代表的な2手作家ですが、この作品はその中でもとりわけ有名なものです。白にはB+SとQ+Rの2種類、黒にはB+Sのバッテリーがすでに組まれています。さらに黒のSはRによってピンされていて、この4方向の筋がどう関連するか。

初手のキーは1.Be4!。この手はf5のPにヒモをつけ、次に2.Sxc4#を狙っていますが、その代わりに黒のSが自由になりました(アンピン)。このSが動くとチェックになりますか、それで大丈夫なのでしょうか?

1...Sxd6+/Se5+/Sxe3+/Sd2+
2.Bd3/Rf3/Sb5/Sc4#
どの変化も、チェックに対してチェックで応じるクロスチェックのあざやかなメイト。

B L. Losinski (1962)



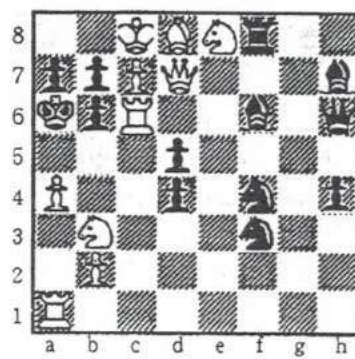
オーソドックスも3手になると、途端にぐんと難しくなります。作者の Losinski はその3手をもっとも得意とする超一流作家で、拙書『華麗な詰将棋』(光文社文庫)で彼の作品をもう一局詳しく紹介していますので、興味のある方はぜひそちらもごらんになって下さい。

本作は、紛れ順と作意の対比が主眼になっています。まず誰でも考えるのは、遊んでいる Sf1 を参加させる手でしょう。その方法は4通りありますが……

1.Sd2? (2.Re4 or Sf3#) 1...Bd5!
1.Se3? (2.Rf5 or Sg4#) 1...Bxe6!
1.Sg3? (2.Re4 or Rf5#) 1...Bc2!
1.Sh2? (2.Sf3 or Sg4#) 1...Bd1!
というわけで、すべて黒のBによってうまくしのがれてしまいます。

そこで初手は1.Ke7!。ほんやりしているようですが、これは次に2.Rg4として、3.Bd4と3.Bd6のメイトの両狙いを秘めています。これを受けるのは、実は紛れに出てきたBによる4通りの手しかありません。
1...Bd5 2.Sh2! (3.Sg4#) Bxe6 3.Sf3#
1...Bxe6 2.Sg3! (3.Re4#) Bd5 3.Rf5#
1...Bc2 2.Se3! (3.Sg4#) Bd1 3.Re4#
1...Bd1 2.Sd2! (3.Re4#) Bc2 3.Sf3#
古典派の作者にしてはモダンな感覚の傑作。

C G. Anderson (1975)



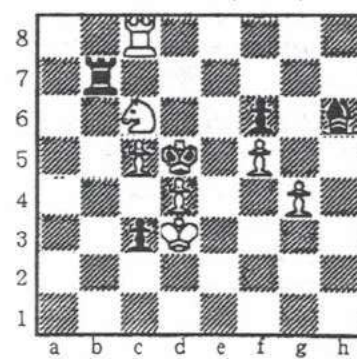
これが3手だ!というお手本のような作品を。初形の駒配置を見ると、短篇詰将棋を見慣れたわれわれなら震え上がりそうな暑苦しい形をしています。たいていの3手はこれくらいの駒数を使用しています。

まず目につくのは、Rc6が邪魔駒であること。そうは言っても、いきなり1.Rxb6+?と直接手段に訴えるのは1...axb6 2.Qb5+ Ka7でいけません。この筋を狙いに1.Kb8?としても、1...Bxd8で次に2...Bxc7+などの手を見られて後続手段なし。有力なのは1.Rc4? 1...Bf5!
1.Rd6? 1...Bd3!
この筋が作意に関係してくるだろうと想像がつかます。

実は初手に絶妙手あり。1.Rb1!がそれです。まったく影響のなさそうな手ですが、放置しておくと2.Sc5+ Ka5 3.b4#までのメイトを狙っているのです。しかもこのキーは黒のBでただ取りになる手ですから、余計に意外感があります。この筋を受ける手は4つ。
1...Bxb1 2.Rc2! --- 3.Qb5#
1...Se6 2.Rc4! Sxc7 3.Sxc7#
1...Sd3 2.Rd6! --- 3.Qb5#
1...Be7 2.Rg6! --- 3.Qb5#

驚いたことに、対角線を軸にしたみごとに対称形の手順が出現しました。3手らしいヴォリュームのある、完璧な構成の傑作。

D A. Johandl (1968)



作者の Alois Johandl 氏は、オーストリアのウィーン近郊に在住で、オーソドックスの長手数を得意とするヴェテラン作家です。しばらく作図からは遠ざかっていましたが、最近また復活して、独特のユーモアに満ちた佳作を次々と発表しています。

D図は氏が1968年にMain-Post紙に発表したもので、First Prizeを獲得しました。

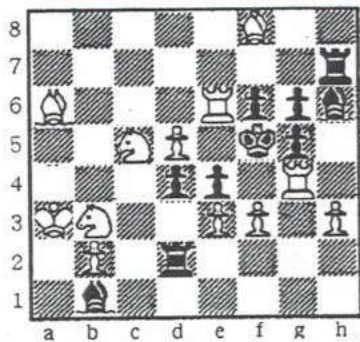
長手数物の解き方の定跡としては、まず白のKの安全度を調べます。この図の場合、黒からc2とこられると次にc1=S+のチェックで追い立てられますから、白にはほとんど余裕がなく、いわば詰めろの連続で手を続けるしかありません。まず初手は1.Sa5!です。これは2.Rd8+ Rd7 3.Rxd7#を狙いで、受けは1...Rd7が絶対。続いて2.Sc4とすれば、3.Sb6#の防ぎには2...Rb7もこの一手(2...Rd6は3.cxd6 ... 4.Rc5#)。そこで3.g5!がポイントの手です。この意味は最後にわかる仕掛け。4.Se3#を見られているので3...Bxg5と取るしかありませんが、4.Sa5 Rd7 5.Sc6 (6.Sb4#) Rb7 と原形に戻して、6.Rc7!が目覚めるような捨駒。ここでBをg5に呼んでおいた効果が現れます。すなわち、初形からいきなり1.Rc7?とすると、Se7#の筋を1...Bf8!で受けられて失敗するのです。結局6...Rxc7 7.Sb4#まで。ナイトの旅による伏線手段の佳作でした。

【出題コーナー】

いよいよ待望の新作コンテストです。1は主要変化が2×2の4通り。2のヒントは、作者の言葉によれば、「Sf4がなければ1手でメイトだが、それをどう消すか？」本筋のみの解答で可。4と5はいずれもプロブレム処女作だとか。5は世界記録を狙ったものですが、さてその記録とは？

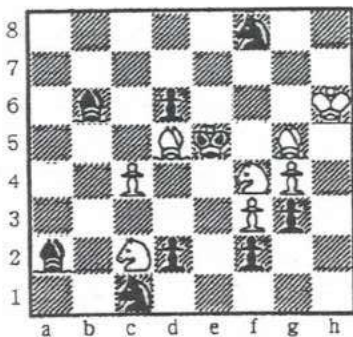
解答の締切は7月末日。参考までに、それぞれ5点満点の評価を付けて下さい。宛先は〒563 池田市畑 1-14-10-A 若島 正 (FAX: 0727-53-6557)。

1 Henryk Grudzinski (Poland)



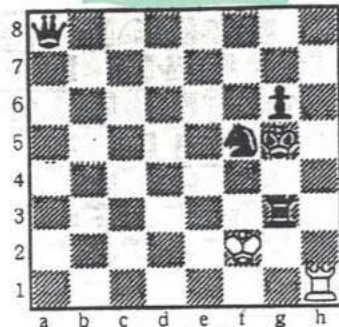
≠ 3

2 Alois Johandl (Austria)



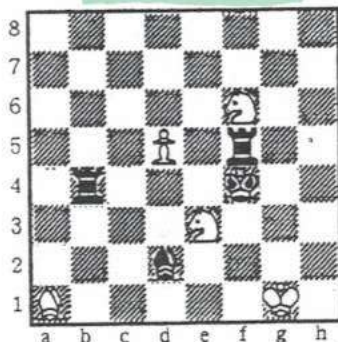
≠ 5

3 上田 吉一 (京都)



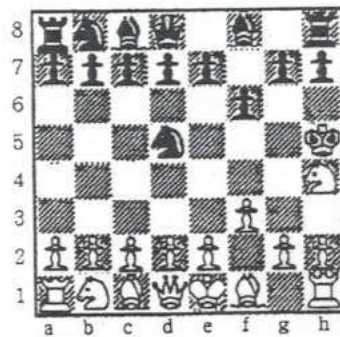
H≠ 3 2解

4 小林 敏樹 (東京)



H≠ 3 3解

5 永野 啓 (広島)



白が11手目を指した局面。棋譜は？

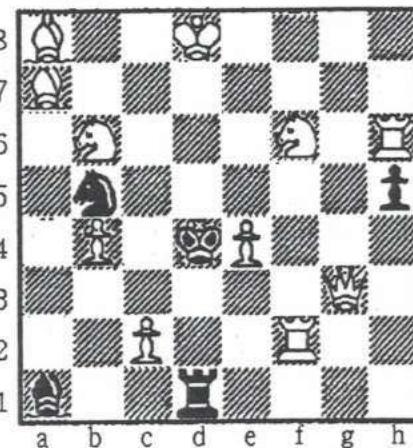
★Rh1→Rg1が正解

1995/8 現代チェス・プロブレム入門

第6回結果 若島 正

▼ Michel Caillaud の作品展は、比較的やさしいものばかりを並べたせいか、24名とまずまずの解答者数でした。

1 正解20 部分解2 無解2



≠ 2

1.Qg7!(2.Sg4≠)
1...Kc3+/Ke3+/Ke5+
2.Sf4/Sbd5/Sfd7≠

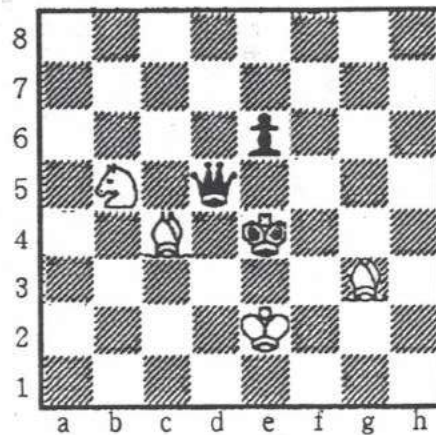
花田 勉：すごい狙いの問題。黒Kの3つの逃げ場を押さえている白Qをわざわざ動かし、黒Kが3カ所のどこに逃げても白Kにチェックがかかるが、どれも白Sによる逆チェックでメイトになるなんて。

千葉 肇：逆手手がないので安心と思っていたが、発想の転換。

広瀬行夫：初手のキーは直感。プロブレムにも筋がある？

▼1...Ke5の変化で2.Sd7と書いた方が1名。まだ表記法に不慣れたためだと思いますが、ここは主眼部分だけに減点とします。

2 正解24



H≠ 2 2解

1.e5 Sd4 2.exd4 Bd3≠
1.Qd4 Bd5+ 2.exd5 Sd6≠

小原義孝：Qの利きをうまく遮断すればいいんですね。

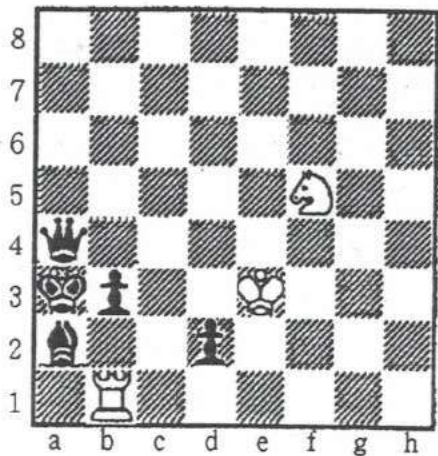
▼そのQの遮断を、Pでやるところがミソです。そのために両解とも捨駒が入るところが、詰将棋マニアとしては感激ものではありませんか。

小林敏樹：駒数が少なく可愛い作品。▼これが解答者の大多数の意見でした。

永野 啓：たった7枚なのに、H≠2なのに、ストーリーがある。私が偶然見つけても何の不都合もないはずなのに、そうはならない。当然か。今回のベストはこれでしょう。誰かを啓蒙するときに使わせてもらおう。

▼まったくの小品ですが、やはりCaillaudはうまいと感心させられます。何を作っても芸になっていますね。最近の彼の関心はもっぱらレトロとフェアリーにあるようですが、これからもときどきこういう作品を見せてほしいものです。

3 正解 2 4



H≠3 Set

Set: 1...Re1 2.dxe1=B Sd6 3.Bb4 Sc4≠
1.b2 Rc1 2.dxc1=S Sd4 3.Sb3 Sc2 ≠

▼ツインの作り方はいろいろありますが、その中でもポピュラーな形式が、頭の0.5手を削った手順(セット・プレイ)と対にするやり方です。この問題は、そういったセット付きのツインという形式を知っていただくために出題しました。

花田 勉：1番と同様、解くのに手間取り、解けたときに感動した。黒の守り駒が強力で、全然詰み筋が見えてこなかったのだが、Rを黒Pにただ取りさせる手に気づいたときには、まさかこんな手があるとは、と思った。さらに第2の解で、Rをそっぽに取らせる手には驚かされた。

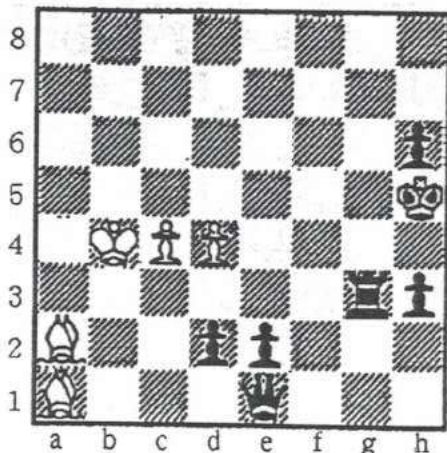
藤澤秀樹：わざとRを取らせるのが面白い。

山田康平：ただ2通りというだけではない。凄い。

楳いっとく：今回のベストはこれ。攻め駒1枚のメイトは本当に驚きでした。

▼白Kの絶好の配置に作者の腕を見ます。

4 正解 2 2 無解 2



H≠4 2解

1.Rg4 Bb2 2.Qh4 Bc1 3.dxc1=B c4
4.Bg5 Bf7≠
1.Kh4 Bb3 2.h5 Bd1 3.exd1=B d5
4.Bg4 Bf6≠

井上順一：Kをh筋に置いたままでBを2つ繰り出す方法や、Kを最下段に落とす方法を考えてしまった。Bを1つ捨てて、残りの1個だけで詰めるとは意外性充分。

駒井信久：一方のBを捨てることになかなか思い至らず……。

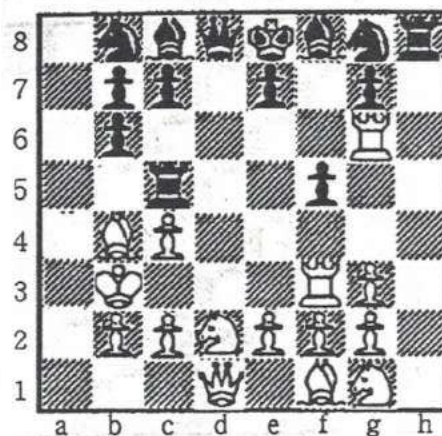
▼よく見てみれば、今回出題の2・3番と雰囲気似ていて、そのせいかわざわざかたという感想もそこそこありました。
佐藤善起：難解で、2解のコントラストも良い。

▼棋目の色違いによる、2解のエコー。これをカメレオン・エコーと呼びます。

屋並仁史：私はこういうのが好きです。構造がはっきりして、訴えるものがある。

▼捨てた白Bが黒Bに化けるところが作者のセンスの良さ。1986年のPhenix誌H≠(3手以上)部門で1位に輝いた佳作です。

5 正解 1 7 無解 7



白が2手目を指した局面。棋譜は？

1.a4 d5 2.Ra3 Qd6 3.Rf3 Qg3
4.hxg3 f6! 5.Rh6 f5 6.Rg6 h5
7.d3 h4 8.Kd2 h3 9.Kc3 Rh4
10.Kb3 Rc4 11.dxc4 h2 12.Qd4 h1=R
13.Qb6 axb6 14.Bd2 Ra5 15.Bb4 Rc5
16.a5 d4 17.a6 d3 18.a7 d2
19.a8=Q d1=Q 20.Qa1 Qd8 21.Sd2 Rh8
22.Qd1 ≠

真鍋 浩：初形から動いていないように見えるQQRがすべて「ニセモノ」であることがわかれば、あとは簡単。

▼これが棋譜問題ではよくあるテーマですが、さすがにCaillaudぐらになるとそれだけでは満足せずに……。

上田吉一：4...f6!をf5と指して、手数が合わなくなって考えこんでしまった。

▼この序盤でのテンポがうまい味付け。

則内誠一郎：最後の最後に黒f6のテンポに気づくまで、何度も駒を並べ直しました。棋譜問題が初めて解けて感激です。

▼佐藤・西村の両氏からも、レトロが初めて解けた！と喜びの感想を頂戴しました。

【総評】

小畑 勉：これをプリントアウトして読んで思ったんですが、電子メールでの解答を受け付けただろうでしょうか？ 少しは解答が増えるのではないのでしょうか？

▼実はFAXによる解答者がかなりいます。将来的には、たしかに電子メールというのなかなかの妙手かもしれません。

後藤角兵衛：5月号上田吉一氏の随筆は大変面白かった。上田氏譯注のBoyer氏の作品集を読んでみたいものです。

▼という意見あり。上田さん、どうですか？

吉田 彰：このコーナーでの得点はどのように算出しているのでしょうか？

▼手数を元に設定し、複数解の場合はそれだけ倍。オーソドックスは主要変化を1点ずつ加算。レトロは手数÷2で計算し、最大10点としております。得点制は各誌で採用されていますが、統一的なシステムはありません。

【成績】

(満点：5+4+6+8+10=33点)

33点……16名

井上順一・小畑 勉・喜多真一・小林敏樹
駒井信久・佐藤善起・塩田 洋・永野 啓
西村 詩・橋本 哲・広瀬行夫・真鍋 浩
屋並仁史・山田康平・後藤角兵衛
則内誠一郎

その他の解答者(成績順)

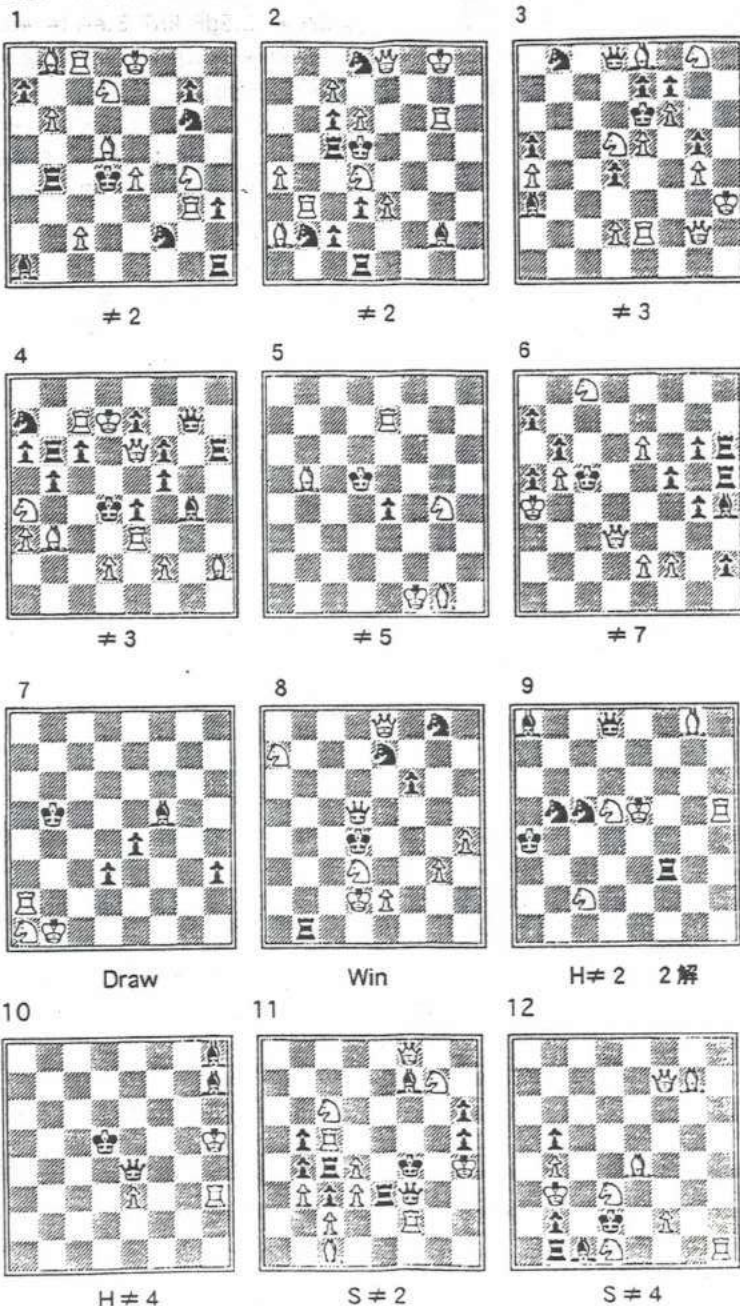
上田吉一・千葉 肇・松田一彦
楳いっとく・吉田 彰・藤澤秀樹
花田 勉・小原義孝

▼下線の方々には5.0点きざみ突破賞進呈。

(現在、賞品としてCaillaudの作品集を製作中。今年中にはなんとかかと思っておりますので、首を長くしてお待ち下さい。)

▼この夏に、フィンランドで行われるプロプレムの世界大会に遊びに行ってきます。詳細はバラ誌上でレポートする予定です。

大会のオープン競技で出題された全12題です。制限時間3時間で解いてみて下さい。
7は白先ドロー、8は白先白勝になる手順を求めよという終盤問題。正解は裏の頁に。



【正解】

1 Herbert Ahues, 1965

1.Sge5/Sde5/Se3/Sc5?
1...Se7/Sh4/Sxe4/Rxb6!
1.Sf8! (2.Se6≠)
1...Sxf8/Sxe4/Rxb6 2.Be5/Rc4/Rd3≠
2 Tapani Tikkanen, 1972
1.Sb5?
1...Kc4/Rc4/Sc4 2.Rxb2/Rg5/Sc3≠
but 1...Rc3!
1.Sxc6?
1...Kc4/Rc4/Sc4 2.Ra3/Rb5/Sb4≠
but 1...Se6!
1.Sf3! (2.Rxd3≠)

1...Kc4/Rc4/Sc4 2.Qe4/Qe5/e4≠
3x3のZagoruykoと呼ばれるテーマで佳作。
私は1.Sxc6?の紛れに落ちて×を頂戴した。

3 Milan Vukcevic, 1971, 改作

1.Qf3! zw. (zw=zugzwang. 手待ち)
1...Bb4 2.Sb6 Qxb6 3.Qb3≠
1...Bc5 2.Sc7+ Qxc7 3.Qb3≠
1...Bd6/Sd7 2.Sf4 gxf4 3.Qb3≠
1...Bb2/Qd6 2.Sdx7 Qxe7 3.Qb3≠
1...Qc8 2.Qb3 Qc4 3.Sc7≠
1...Sa6 2.Bc6 --- 3.Qf5≠
1...exf6 2.Sdxf6 --- 3.Qf5≠
1...d3 2.Sc3 --- 3.Qf5≠

4 Uri Avner, 1955, 改作

1.Sc5! (2.Rd3+ exd3 3.Qe3≠)
1...Rh3 2.Qe5+ fxe5 3.Se6≠
1...Be2 2.Qxe4+ fxe4 3.Se6≠
1...Qg5 2.Qd6+ exd6 3.Se6≠
1...Rb7 2.Qd5+ cxd5 3.Se6≠
1...f4 2.Rxe4+ Kxc5 3.d4≠

5 W. A. Shinkman, 1903, 改作

1.Bb6! zw.
1...e3 2.Sxe3+ Kd6 3.Sf5+ Kd5
4.Ba5! Kc5 5.Re5≠
1...Kd6 2.Rxe4 Kd5 3.Sf6+ Kd6
4.Ba6! Kc6 5.Re6≠

私は4手目が見えずに無解。情けない。

6 H. Lepuschtz, 1967

1.f4! (2.Qc3+ Kd5 3.Qe5+ Kc4 4.Sd6≠)
1...gxf3 e.p. (1...Bf6 2.e3 h1=Q 3.Qc2+ Kd5
4.Qc6≠) 2.Sd6 Rh7 3.e4 f4 4.e7! Rxe7
5.e5! Rhxe5 6.Qc4+ Kxd6 7.Qc6≠

7 M. G. Kljackin, 1922

1.Sc2! h2 (1...dxc2+ 2.Kxc2 draw)
2.Sa3+ (2.Sd4+? Kc4 3.Rxh2 Kxd4) Kb4
3.Rxh2 Kxa3 4.Kcl e3 5.Re2! dxe2
stalemate

私には解けなかった。

8 Zoltan Laszlo, 1968

1.Qa4+ Qc4 2.e3+ Kd5 3.Sf4+ Kc5
4.Se6+! Kd5 (4...Qxe6 5.Qd4≠)
5.e4+! Qxe4 6.Sf4+ Ke5 7.Sd3+ Kf5
(7...Kd5 8.Qa5+ Kc4 9.Qc5+ Kb3 10.Qc3+
Ka2 11.Qa5+ Kb3 12.Sc5+) 8.g4+ Qxg4
9.Qd7+ win

私が答えた解は2.Qd7+ Ke4 3.Sf2+ Ke5
4.Sc6+! Sxc6 5.Sd3+ Ke4 6.Qg4+ Kd5
7.Qxg8+ Kd4 8.e3+ win だが、これでも満
点がもらえたので、結局この作品は不完全
だったようだ。

9 Gyorgy Bakcsi, 1964

1.Sd6 Kd4 2.Sd3 Sc3≠
1.Sb7 Ke4 2.Sc7 Sb6≠

私は第2解の黒の指し手を手順前後してし
まった。今から考えれば嘘みたいな話だ。

10 Neal Turner, original

1.Qe6 Kg5 2.Be4 Rh7 3.Bd4 Rd7+
4.Ke5 exd4≠

11 Baruch Lender, 1978

Set: 1...Rxc5/Rxd4 2.dxc5/Sxd4
1.Se7! zw.

1...Rxc5/Rxd4 2.Sxh5+/Bxe3+

12 Ilja Mikan, 1971

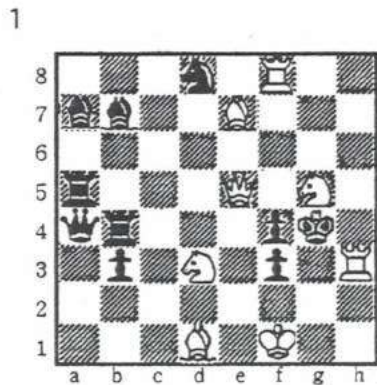
1.Se5! zw.
1...Ral 2.Sf3+ Ke2 3.Bd3+ Kxd3
4.Qc4+ bxc4≠
1...Ke2 2.Sc3+ Kd2 3.Sc4+ bxc4+
4.Ka2 Ra1≠

【出題コーナー】

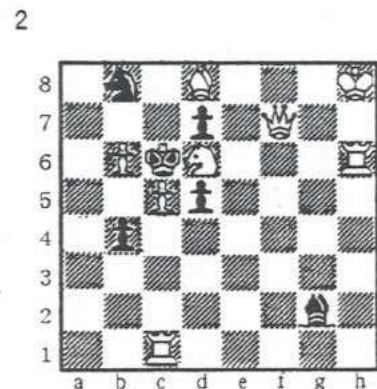
PCCC大会からの出題です。

- ①紛れに気をつけて。キーのみで可。
- ②変化6通りを答えて下さい。
- ③本筋のみで可。手数割に簡単です。
- ④今回最大の難問。この図を(a)として、指定どおりに変えた図(b)(c)も解いて下さい。
- ⑤Fairy Solvingから出題。最後は黒をステールメイトの形にします。

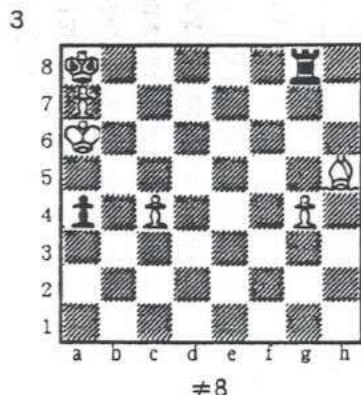
解答の締切は9月末日。宛先は
〒563 池田市畑 1-14-10-A 若島 正
(FAX: 0727-53-6557)。



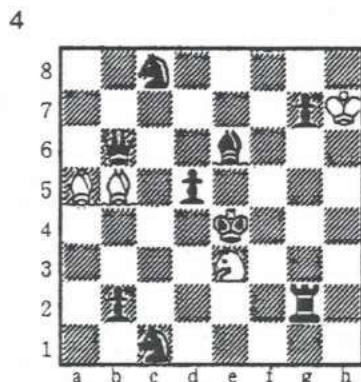
≠ 2



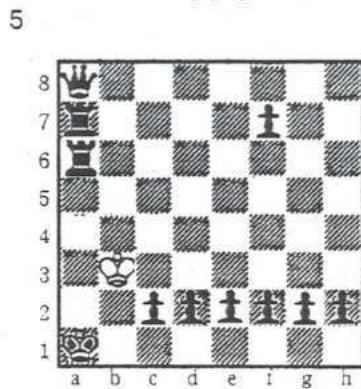
≠ 3



≠ 8



H≠ 3 (b) Qb6→b3
(c) Qb6→b1



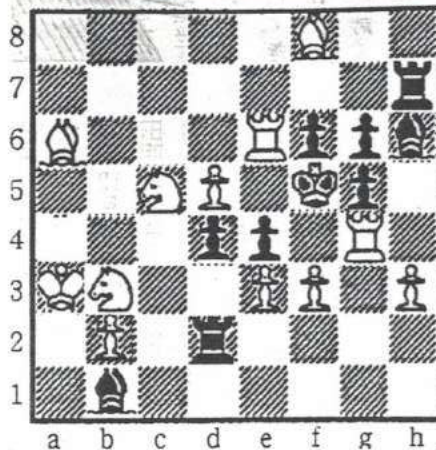
H=10

1995/10

現代チェス・プロブレム入門
第7回結果 若島 正

▼新作展覧会は2題潰れに1題誤図と、悲惨な結果になりました。解答者は26名、初の解答参加は橋本孝治、古山伸夫の2氏。

Henryk Grudzinski (Poland)



≠ 3

1.Bg7!

1...Rxc7/Bxc7 2.Sd3/Bd3!

以下、どちらの場合も

2...Rxd3/Bxd3 3.fxe4/Sxd4≠

▼黒のR Bペアが2組あり、その焦点への捨駒(専門用語でNovotnyと呼ぶ)が見えています。いきなり1.Bd3/Sd3??とすると1...Ra7+/Bxf8+!!とチェックがかかるので、まず1.Bg7!とこちらのNovotnyから入るのが作意でしたが……。

余詰①(これをCookと呼びます)

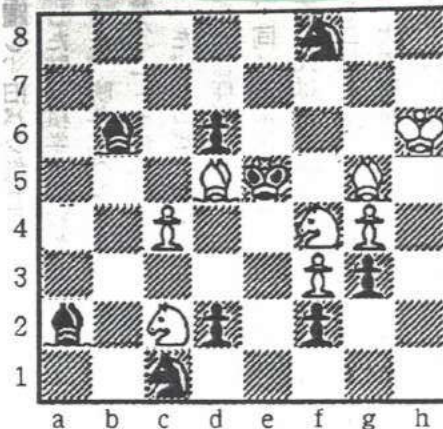
1.Sd3! Bxf8+ 2.Ka4! で受けなし。

▼作者の構想は根本から瓦解しました。さらにひどいことに……。

余詰②1.Be7!も成立(以下作意同様)

キズ 作意順で1...Bxc7のとき2.Bc8!も成立。これはmajor dualと呼ぶ、ほとんど不完全に近い大欠陥。粗選をお詫びします。

Alois Johandl (Austria)



≠ 5

1.Sb4 Kd4 2.Bf6+ Ke3 3.Sc2+ Kxf4

4.Bg5+ Ke5 5.f4≠

▼Sf4が邪魔駒ですが、直接に消去しようと思うと、1.Sd3+/Sg6+??は1...Sxd3/Sxg6!!と取り返されてf4の地点にそのSが利いてきます。そこで、黒Kをe5→d4→e3→f4→e5とぐるりと一周させて還元し(専門用語でRundlauf [ルントラウフ=回転ランコ])、その途中でSf4を掃除してもらうという構想。ドイツ論理派の大御所だけあって、主題が実に鮮明に表現されています。

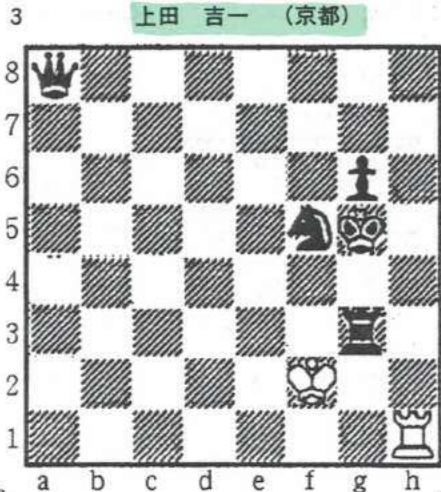
真鍋 浩: 素晴らしい。伊藤正さんの看寿賞作品(先打突歩詰)を思い出した。5点
▼後藤氏も同意見でした。

則内誠一郎: 魔法のような手順! 5点
千葉 肇: Sf4の原形消去。キーだけ非王手で後は連続チェックと詰棋っぽい。

上田吉一: 日本人向けに易しい作を投稿してくれたのでしよう。

永野 啓: さすがの一局ですね。まさしく物が違うダントツのNo.1。Johandl氏の作風が詰バラ向きなのでしようか。また見せていただきたいものです。5点

▼私信によれば、また新作を送っていたか。ご期待下さい。



H≠3 2解

1.Rg4 Rg1 2.Kh4 Rg2 3.g5 Rh2≠
1.Sg7 Ra1 2.Kh6 Rxa8 3.Rg4 Rh8≠

橋本孝治：最小のスピンの最大のスピンの対比ですね。処女作という感じはしません。手慣れた作りで一局仕上げたという雰囲気。4点

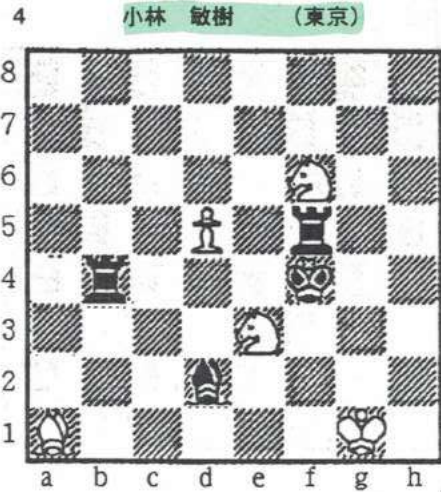
後藤角兵衛：大小の方形を鮮やかに描く。(波が広がってゆく様にもみえる。) 将来の作品集を飾るべき珠玉。5点

吉田 彰：電車の中で解いたのですが、解けたとたんに大爆笑してしまいました。白Rの動きはなんとも言えません。5点

西村 詩：こんなテーマを思いつくこと自体凄いなと思うが、それをいとも簡単に実現しているのはもっと凄い。今更ながら作者の万能ぶりには驚かされる。5点

小林敏樹：配置・手順とも完璧。氏は世界を舞台に活躍するべきです。5点

▼「フィンランド日記」にも書いたように、PCCCの前会長であるKlaus Wenda氏が上田氏の作品を高く評価し、その御好意で、ドイツで出ているフェアリー専門誌のfeenschachに近々数局掲載される予定になりました。



H≠3 3解

1.Rb2 Sd1 2.Ke5 Sxb2 3.Bf4 Sc4≠
1.Bc3 Sd1 2.Ke5 Sxc3 3.Rbf4 Sce4≠
1.Rd4 Sc2 2.Ke5 Sxd4 3.Bf4 Sb5≠

▼作者の言によれば、赤羽守氏作の例の7手詰から着想を得たとか(これは後藤氏の想像がぴったり)。私はすぐに作意の3解が見えたので、まさかこれが余詰の山とは思ひもありませんでした。

余詰

- ①1.Rd4 Sd1 2.Ke5 Sb2 3.Rdf4 Sc4≠
- ②1.Rb6 Sc4 2.Rd6 Sb2 3.Ke5 Sd3≠
- ③1.Kf3 Se4 2.Ke2 Sc3+ 3.Ke1 Sg2≠
- ④1.Kf3 Be5 2.Rb3 Sxf5 3.Re3 Sd4≠
- ⑤1.Kf3 Se4 2.Ke2 Sc3+ 3.Ke1 Sc2≠
- ⑥1.Kg3 Sxf5+ 2.Kh3 Se4 3.Rb6 Sf2≠
- ⑦1.Bxe3 Kg2 2.Bd4 Bc3 3.Be5 Bd2≠
- ⑧1.Rh5 Sd7 2.Ke4 Kf2 3.Kd3 Sc5≠
- ⑨1.Rg5+ Sg2+ 2.Kf5 Kh1 3.Bh4 Sh4≠

▼作者は The Problemist誌にも作品を投稿中と聞きますので、きっとこれを帳消しにする好作を発表してくれるでしょう。
永野 啓：構成上仕方ないとはいえ、黒の2、3手目がゆるみ。なにせ詰棋界のエースですから期待大もやむなし。3点



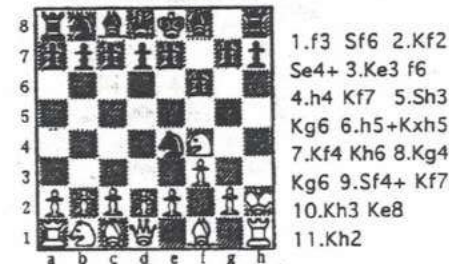
白が11手目を指した局面。棋譜は？

1.Sf3 Sf6 2.Sh4 Sd5 3.f3 f6
4.Kf2 Kf7 5.Kg3 Ke6 6.Kg4 Ke5
7.Kh3 Kf4 8.Rg1 Kg5 9.Kg3 Kh6
10.Kf2 Kh5 11.Ke1

▼7月号出題図では、白Rg1がh1にあり、誤図でした。責任はすべて私にあります。どうも申し訳ありませんでした。(常連解答者の方々には、葉書でその旨連絡し、締切を延長するという措置を取りました。) 広瀬行夫：本来なら6.0手で到達する局面。差引き4.5手！これ以上は不可能？ 5点
▼さすがにレトロの実力者広瀬氏だけに、作者の狙いを鋭く見破りました。この作品の成立事情をここで説明しておきます。レトロの棋譜問題で、問題図に最短手数で到達する手順を求めよという形式をShortest Proof Game (SPG)、設定された手数で到達する手順を求めよという形式をUnique Proof Game (UPG) と呼びます。手数だけで考えると、ある図面が与えられれば当然ながらUPG-SPG≧0が成り立ちますが、G. WiltsとA. Frokinというレトロの専門家二人がSPGの作品を網羅した書物(1991)では、「その差はおそらく単独5手〔つまり

2.5手分]を超えることはないだろう」と書かれています。それに反例を与えたのが、次の作品です。

John Beasley (1993)



1.f3 Sf6 2.Kf2
Se4+ 3.Ke3 f6
4.h4 Kf7 5.Sh3
Kg6 6.h5+Kxh5
7.Kf4 Kh6 8.Kg4
Kg6 9.Sf4+ Kf7
10.Kh3 Ke8
11.Kh2

白が11手目を指した局面。棋譜は？

このBeasleyの図は、SPGなら7.0手で到達可能です。すなわちその差3.5手。この世界記録をさらに1手分更新したのが永野氏の図というわけです。作者からはレトロの新作が届いていますので楽しみに。

【平均点】(作意解答者のみ集計)

- | | | |
|---|------------|-----|
| 1 | Grudzinski | 2.7 |
| 2 | Johandl | 4.3 |
| 3 | 上田 | 4.2 |
| 4 | 小林 | 3.2 |
| 5 | 永野 | 3.7 |

【作意余詰双方解答者】

- | | |
|---|----------------|
| 1 | 上田・後藤・小林・永野・西村 |
| | 真鍋・屋並 |
| 4 | 喜多・真鍋 |

【成績】(満点:3+5+6+9+6=29点)

29点……16名

井上順一・上田吉一・喜多真一・小林敏樹
駒井信久・佐藤善起・永野 啓・西村 詩
橋本孝治・橋本 哲・広瀬行夫・真鍋 浩
屋並仁史・山田康平・
後藤角兵衛・則内誠一郎
その他の解答者(成績順)
塩田 洋・吉田 彰・筒井浩実・小畑 勉
藤澤秀樹・花田 勉・千葉 肇・原岡 望
古川伸夫・小原義孝

▼下線の方々に50点きざみ突破賞進呈。

今年も講座の方はこれで最後になりましたので、今回は趣向を変えて、プロブレム関係の雑誌・書籍とその購入方法を紹介してみたいと思います。

まず専門誌から。世界で最大の会員数を誇るのが、イギリスのThe Problemist (英語)。隔月刊でB5版24頁と小柄に見えますが、活字と図面が小さいので情報はぎっしり詰め込まれています。最近では初心者向けの別冊が付録として付くようになりました。オーソドックス、エンドゲーム、ヘルプ、セルフ、フェアリー(レトロを含む)の各セクションに分かれ、計70題ほどが新作として掲載されています。初めて専門誌を読むならやはりこれがいいでしょう。購読の問い合わせは R. T. Lewis (16 Cranford Close, Woodmancote, Cheltenham, GL52 4QA, Great Britain) 氏へ。年会費は18ポンドです(エアメール希望なら3.50ポンド追加)。

次いで老舗は、ドイツで出ているDie Schwalbe (ドイツ語)。これも隔月刊で、B5版よりほんの少し小さいサイズで40頁。最近誌面を刷新して、ずいぶん読みやすくなりました。内容はThe Problemistとほぼ同じ作りで、新作は60題ほど。年会費40ドイツマルク、購読問い合わせ先はAchim Schöneberg (Paul-Hindemith-Str. 58, 37574 Einbeck, Germany) 氏。

純粋なフェアリー専門誌として有名なのはドイツの feenschach (ドイツ語)。A5版56頁で年4回発行ということになっていますが、実際には4冊同時に送られてきます。昔は活版印刷ではなかった時代もあったとのことで、今でもその手作りの味を残し、いかにもマニア向きの雑誌という感じがします。

ここではオーソドックスとエンドゲームは扱いません(ヘルプとセルフは含まれます)。フェアリー駒やフェアリー・ルールの説明が新案のものを除いて乏しいので、新しい読者なら最初は少しとまどうかもしれませんが、そのうちに慣れてきます。年会費は40ドイツマルク。購読問い合わせ先はBernd Schwarzkopf (Hauptstr. 137, D-41352 Korschenbroich, Germany) 氏。

このところ総合雑誌としてめっきり実力をつけたのが、フランスのPhenix (フランス語)。A5版で、これもかつては年4回発行でしたが、最近はこの姉妹誌であったフェアリー専門誌とオーソドックス専門誌(いずれも解答募集のない研究専門)をPhenixと合体させましたので、やや変則的な発行になっています。新作は100題前後。誌面がもっとも綺麗で読みやすく、しかも使われている駒・ルールの定義が毎号必ず載るという親切さで、絶対のお薦め。わたしはここで近い将来、詰将棋の連載をする約束をしています。年会費280フラン。購読問い合わせは編集長のDenis Blondel (19 rue de Rome, 94510 La Queue en Brie, France) 氏へ。

他にもまだまだ専門誌はたくさんありますが、後ひとつだけとりあげるといことになれば、昨年に創刊されたばかりの、ユーゴスラヴィアのMat Plus (英語)。過去にユーゴスラヴィアで出ているMat誌が自国語で書かれていたために広い読者層を獲得できなかったという反省に立ち、英語にしたところに意気込みが感じられます。解答募集付きの新作はありませんが、有名作家インタビューや研究論文などが盛りだくさんで、読める雑誌としてはこれがいちばん。新雑誌なので、読者の支持を必要としています。ぜひあなたも会員に。B5版32頁で年4回発行。年会費30ドイツマルク。購読問い合わせはBernd Ellinghoven (Königstr. 3 D-52064 Aachen, Germany) 氏へ。

さて次は、プロブレム関係の書籍についてですが、残念ながら、簡単に洋書店経由で入手できるわけではありません。こうした事情はべつに日本だけではなく、世界中のどこでもそうです。丸善などに置いてあるプロブレム書はたいていDover社から出ているものですが、悲しいかな決定的に古く、入門用にしか役立たないでしょう。

大手出版社から出ている総合解説書としては、Michael Lipton, R.C.O. Matthews, John M. Rice, Chess Problems: Introduction to an Art (Faber, 1963) と John M. Rice, An ABC of Chess Problems (Faber, 1970) の2冊が古典的な名著でしたが、いずれも絶版となっています。Rice氏の話では、後者の改訂版を出すべく準備中とのことですが、Faberから出すのはもう無理だそうです。比較的最近のものとしては、John Nunn, Solving in Style (George Allen & Unwin, 1985) がとてもいい本なのですが、これも絶版という未確認情報あり。洋書店で一度訊ねてみて下さい。

洋書代理店経由で入手できないとすれば、プロブレム書はどうやって流通しているのか。伝統あるプロブレム専門誌は、それぞれ書籍販売の部門を持っていて、そこで雑誌のバックナンバーや単行本を売っています。これを利用するのです。

まず、プロブレム年鑑に相当するものとしては、PCCC活動の一環として出ているFIDE Album があります。これは数年ごとに出版されるもので、つい先頃出たばかりの最新刊は1986-1988年度の分(ドイツ語+フランス語)です。収録作品数は1114題で568頁。発行元は feenschach + Phenix で、前記のD. Blondel氏またはB. Ellinghoven氏にお問い合わせを。このアルバムは、作家が自己申告した作品をセクションごとの審査員が採点して採否を決定するというシステムですので、中にはこのアルバムに一度も応募

したことがない有名作家もいたりするのが難点ですが、年鑑としてはこんなところでしょう。フェアリー部門の拡充(または独立)が検討されていると聞きます。なお、専門誌では世界の各誌での受賞作を相互に紹介しあっていますので、それに目を通せば傑作と思われるものはだいたいもれなく見ることが出来ます。

個人作品集は多数ありますが、最近の話題本はなんといっても Hans Peter Rehm の HANS+PETER+REHM=SCHACH です。541頁もあるこの大著は、ドイツ論理派の大御所である作者の全貌を余すところなく伝えています。テキストはドイツ語+フランス語。この本も feenschach + Phenix の発行によるもので、たいへん造本が立派なシリーズ本の1冊。このシリーズは、今後おそらくプロブレム愛好者にとってはいつまでも保存しておく貴重な財産になるでしょう。

Blondel + Ellinghoven 組の出版活動と並んで、このところ精力的な仕事をしているのがオーストラリアの Friedrich Chlubna 氏です。Schach-Echo という専門誌を出すかわらで、単行本の出版にも力を入れ、そこから先頃出た C. J. Feather, Black to Play はヘルプメイトの批評的研究書としてすばらしい出来映え。ヘルプメイトの超一流作家の一人である著者の鋭い鑑識眼で、このジャンルのさまざまなテーマや表現方法が豊富な事例を通して批評的に解説されています。ヘルプメイトに関心を持たれた方には必読書。テキストは英語+ドイツ語。購入の問い合わせは Friedrich Chlubna (A-1120 Wien, Wilhelmstr. 37/4, Austria) 氏まで。

通信販売で、内容を見ないで注文するのは不安だとおっしゃる方には、年1回開催されるPCCC世界大会に参加されることをぜひお薦めします。大会の期間中にブックセールが行われ、古書から新刊書まで幅広く入手できるからです。

【出題コーナー】

今年最後の出題です。

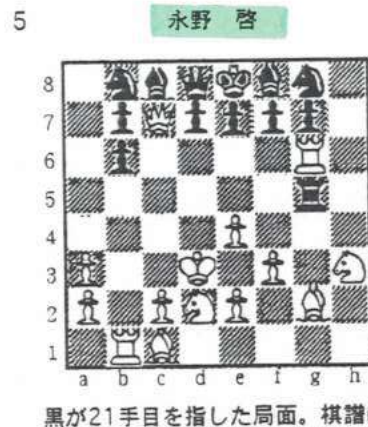
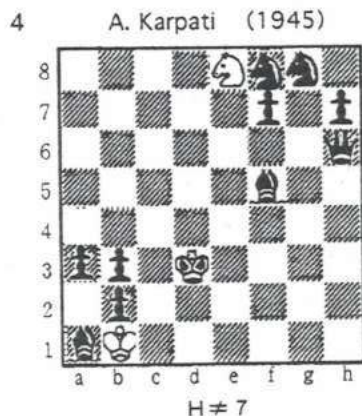
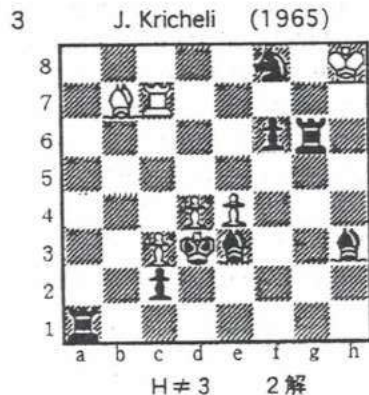
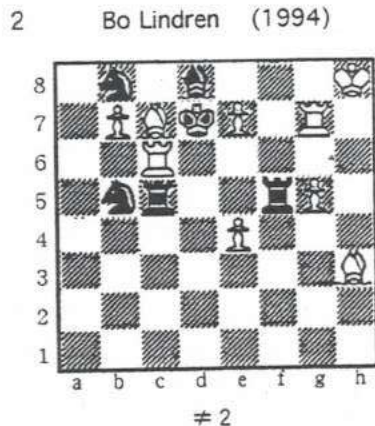
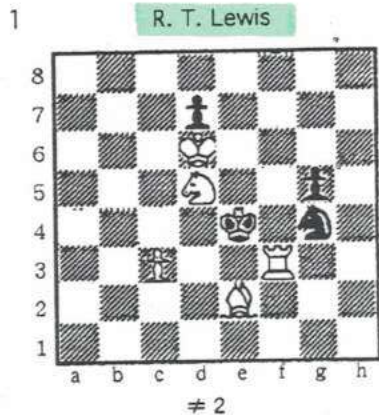
① Tony Lewis氏からやさしい新作の投稿をいただきました。初手のキーのみで可。

② Mat Plus 誌から引用。キーだけでなく、主要変化5通りを答えて下さい。

③④はBlack to Play より引用。

なお、①と⑤は新作ですので、5点満点での評価をお願いします。

解答の締切は11月末日。宛先は〒563 池田市畑 1-14-10-A 若島 正 (FAX: 0727-53-6557)。

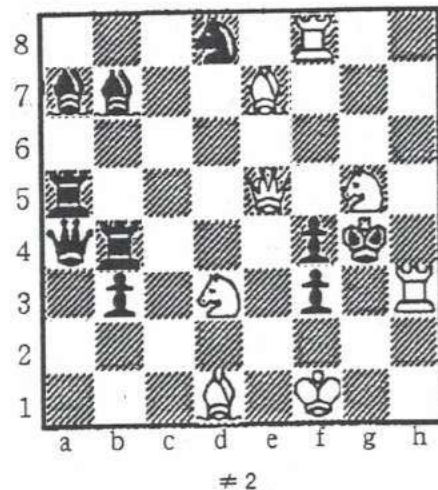


1995/12

現代チェス・プロブレム入門
第8回結果 若島 正

▼ PCCC大会で出題された作品に挑戦していただきましたが、どうも難しかったようで、解答者21名のうち全題正解者はわずか5名。初の解答参加は斉藤吉雄氏。

1 正解10 誤解10 無解1



1.Bc5! (2.Qf5/Sf2≠)

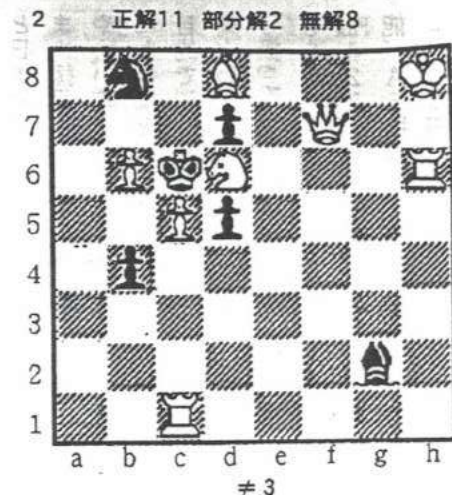
1...Bxc5/Rxc5 2.Qf5/Sf2≠

▼黒のRBが2つずつあり、その焦点が4箇所。そこへ捨駒するNovotnyがキーだというのはすぐわかりますが、正解は一つだけ。紛れに対する正しい受けを探すのが厄介です。大量の誤解者10名の内訳は

- ① 1.Qd5? Qa1! 4名
- ② 1.Qc5? Qb5! 2名
- ③ 1.Qe4? Rxc5! 2名
- ④ 1.Qd4? Rxc5! 1名
- ⑤ 1.Qh8? Sf7! 1名

永野 啓：いかにも解答競技向きの問題でしょうか。短時間だと見事にハマりそうです。今もハマってる？

▼WCSの競技でも、参加者59名中正解者34名と、正答率は6割を切っていましたから相当なものです。



1.Bh4!

1...b3 2.Qg8! d4 3.Qxg2≠

1...d4 2.Qa2! Sa6 3.Qxg2≠

1...Bf3 2.Qf8! d4 3.Qxf3≠

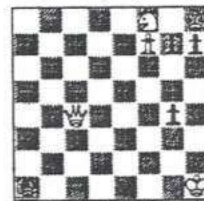
1...Be4 2.Qe8! d4 3.Qxe4≠

1...Bh1 2.Qf1! d4 3.Qxh1≠

1...Sa6 2.Qxd7+! Kxd7 3.c6≠

▼QでBをつかまえる、いわゆる grab themeというテーマ。これはSam Loydの次の有名な作品が下敷きになっていると想像されます。

Sam Loyd (1869)



1.Qf1!

1...Bb2/h6 2.Qb1!

1...Bc3/Bd4 2.Qd3!

1...Be5/Bf6 2.Qf5!

1...g3 2.Sg6+!

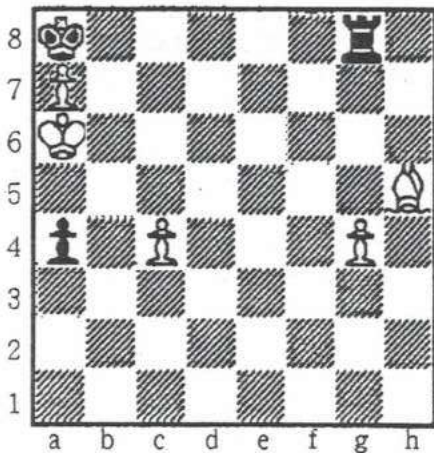
≠ 3

斉藤吉雄：Qxd7+の変化が見えなかったので苦労しました。

喜多真一：少ない駒数でしっかりした構成。

小林敏樹：当然ながらうまく作ってあるなあと感心した。

3 正解10 部分解1 誤解8 無解2



≠8

1.g5 Rf8 2.Bg6 Rf4 3.c5 Rc4
4.Bd3! Rb4 5.Be2! Rb3 6.Bc4! Rb7
7.Bd5 a3 8.Bxb7≠

▼手数が長いわりにはやさしいと思ったのですが、誤答が多かったのは驚き。WCSCの採点基準に従い、4.Bd3!を発見すれば部分点を計上しました。誤答例は

3.Be8? Rxc4 4.g6 a3? 5.g7 a2 6.g8=Q
a1=Q+ 7.Ba4+ Rc8 8.Qxc8≠ (3名)

[4...Rc7! 5.g7 Rxa7+で逃れ]

4.Bh5? Rc3 5.g6 Rg3/a3? ... (2名)

[5...Re3! 6.g7 Re6+で逃れ]

4.Bh5? Rc3 5.Bg4 Rb3/Re3?... (2名)

[5...a3! 6.Bc8 Rb3で逃れ]

4.Bf5? Rd4? 5.Bc8 Rb4 6.Bd7... (1名)

[4...a3! 5.Bc8 Ra4+で逃れ]

5.Bf5? a3? 6.Bd7 ... (1名)

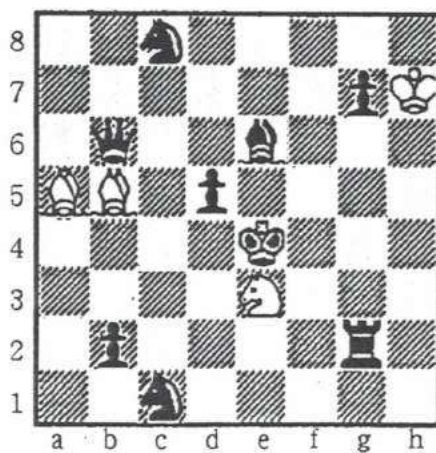
[5...Rd4! 6.Bc8 Rb4で逃れ]

小原義孝：Rの守りが強力でかなり悩みました。

井上順一：Bでチェックできる形にもっていくという狙いが明確で解きやすい。

真鍋 浩：非常にパズル性が強く、一番よかった。後半の尾分かれは致し方なし。

4 正解10 部分解1 無解10



H≠3 (b)Qb6→b3 (c)Qb6→b1

(a)1.Kd4 Bxb6+ 2.Kc3 Bc4 3.d4 Ba5≠
(b)1.Kf3 Sc4 2.Ke2 Bc3 3.Kd1 Se3≠
(c)1.Ke5+ Bd3 2.Kd6 Sf5+ 3.Kd7 Bb5≠

屋並仁史：この手の問題は(a)を解くという楽しさと、(a)の手順から(b)(c)はこうなっていたらいいなあという理想を描き、実際にそれが現実になるという喜び+驚きを味わうことができ非常に気持ちが良い。この問題、Ba5→b6→a5のように3つの駒がそれぞれどこかへ行って帰ってくるのだけれど、残りの1手も3つの駒で分担しているんですね。駒の役割がcyclicになっていてすばらしい。

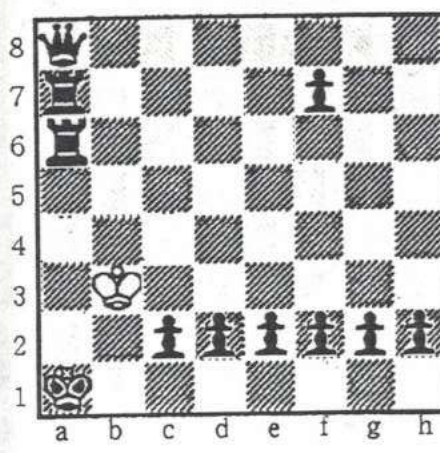
則内誠一郎：考えやすい(b)(c)から解いているうちに3種スイッチバックに気がつきました。

▼(b)(c)(a)の順に解けたという評多し(真鍋・佐藤)。これはおそらく、

橋本 哲：(a)でQを取る俗手が見えず手間取った。

▼というのが原因でしょう。とにかくわたしはWCSCではこの作品に降参しましたので、正解者10名とは、さすがバラの猛者たちだと感心しました。脱帽の一手です。

5 正解17 無解4



H=10

1.h1=B Kc4 2.Kb2 Kd4 3.Ra1 Ke5
4.Rg1 Kf6 5.Raa1 Kxf7 6.Rae1 Ke6
7.Qa1 Kd5 8.Qd1 Kc4 9.Kc1 Kb3
10.f1=B Kb2 =

▼手数は長くてもいちばんやさしい問題。このようにPが2段目に並んだ形では、RとBを交互に埋めるのがステールメイトの定跡形です。手順のポイントは、f1=Bを最終手に残して、先にa筋のRRQを1段目に格納するところ。

佐藤善起：簡単そうでも、いくつもテクニクがある。

藤澤秀樹：これが解けたとき、なぜかとても嬉しかった。

塩田 洋：こういう罪もなく楽しめるものがある。

西村 詩：Bへのプロモーションが黒の初手と最終手というのが面白いですね。

後藤角兵衛：驚異の捨入詰!!

▼なお、このWCSCで出題された全18局を、『チェックメイト』という新しいチェス雑誌における連載で解説しております。購読希望の方は、湯川博士氏(〒351-01和光市新倉2184-7)までご連絡を。

【総評】

喜多真一：あの傑作の作者Caillaudさんに会えるなんて素晴らしいですね!

▼あなたも世界大会に参加すれば会えますよ。来年10/12-19にテルアビブで開かれる大会に参加してみたいな……と思われる方は、ご遠慮なくわたしにご連絡下さい。大会への招待状のコピーをお送りします。

小原義孝：「フィンランド日記」読みました。今まで日本人でPCCC大会に参加した人はいないとのことですが、プロブレムを解く人が増えれば日本が強豪になる日も遠くないような気がします。

則内誠一郎：Open Solvingの制限時間3時間は30時間の間違いでしょ。

小林敏樹：Open Solvingの12題中、暗算で解けたのは1, 2, 4, 9, 11の5題だけでした。

(5番などは古典なのでしょうが良い作品ですね。)

▼それだけ暗算で解ければたいしたもの。実際の競技では、盤駒を使用してもかまいません。

【成績】(満点:5x5=25点)

今回の配点および採点はすべてWCSCの方式によりました。

25点……5名

小林敏樹・橋本 哲・真鍋 浩・屋並仁史
後藤角兵衛

その他の解答者(成績順)

永野 啓・佐藤善起・駒井信久・喜多真一
斎藤吉雄・則内誠一郎・広瀬行夫

山田康平・井上順一・塩田 洋・西村 詩
小原義孝・藤澤秀樹・吉田 彰・千葉 肇

松田一彦

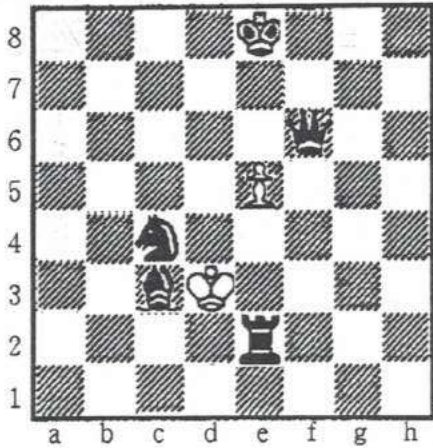
▼下線の方々には50点きざみ突破賞進呈。

▼来年の1月号から、いよいよフェアリー駒やフェアリー・ルールを少しずつ紹介していきます。終盤問題(エンドゲーム)は「出題しないでくれ」という声が多いのですが、ご意見があればお聞かせ下さい。

現代チェス・プロブレム入門

第10回 若島 正

▼あけましておめでとうございます。今年からは、少しずつフェアリー・ルールやフェアリー駒の紹介をしていきます。まずその最初は、フェアリー・ルールでも最もポピュラーなものの一つ Circe です。

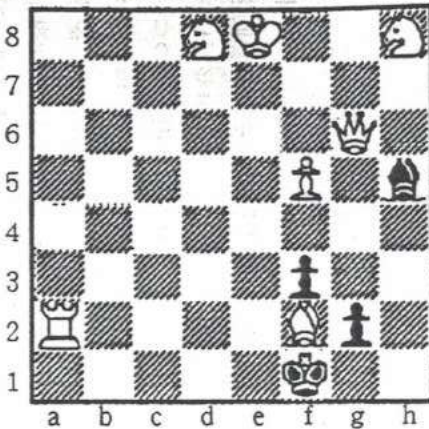


(説明図)

Circe (英語読み「サージー」)は、ギリシャ神話に出てくる魔女の名前で、「キルケー」と呼びます。1968年にフランスのP. Monrealが創案したそのルールは、次のとおり。「取られた駒は並べはじめの原位置に再生する。その位置に別の駒があれば、再生せずに盤上から消える。」

上の図を使って説明します。白の手番として、1.Kxe2/Kxc3/Kxc4と黒のR/B/Sを取れば、その瞬間に、それぞれRa8/Bf8/Sg8と同じ色の原位置に再生します。これをたとえばKxe2(Ra8)という風に表記します。再生したRは、次に1...0-0-0とキャスリングをする能力があります。また、1.exf6(Qd8)は自分のKにチェックをかけて禁手。逆に黒の手番なら、1.Rxe5(Pe2)でPは同じ筋の原位置で再生しますが、1.Qxe5ではe2にRがいますのでPは再生しません。

1 J. P. Boyer (1968)



Circe ≠2

それでは实例を見てみましょう。第1図は、Circeルールが誕生したばかりの頃に作られたものです。

図で白のQはピンされていますが、黒からBxg6+とされる手は、Qd1が再生するので禁手ですから、心配しなくてすみます。そこで、このピンをはずせば、Qa6≠の狙いが生じることになります。さて、ピンをはずし方は5通り。そのうちのどれが正解でしょうか。

まず1.Sdf7?は、1...g1=Q!とされると、このQを取り返せません(2.Qxg1+???はQd8が再生するので禁手!)

これでもうこの作品の構想は見えたと思えます。以下同様の理由で、

1.Shf7?なら1...g1=R!

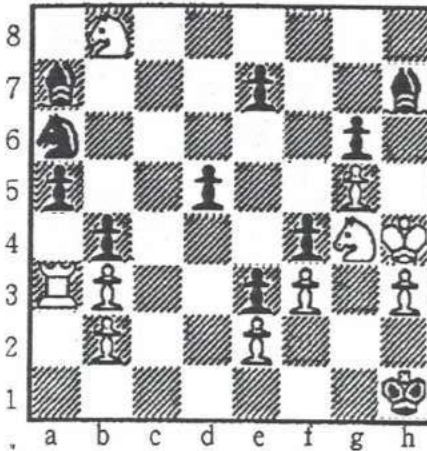
1.Ke7?なら1...g1=B!

1.Kd7?なら1...g1=S!

と、いずれも限定のプロモーションで逃れとなります。すなわち、紛れ4通りにおいて4種成(A U W)の受けで逃れというのがテーマでした。

従って、正解となるキーは残る1.Kf8!です。これに対して1...g1=Q/R/B/Sはすべて2.Qxg1≠まで。

2 H. P. Rehm (1986)



Circe ≠12

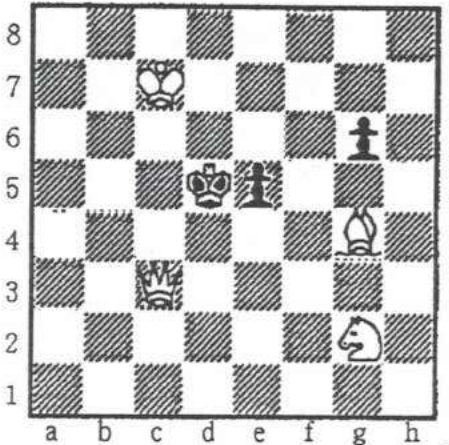
次の例題は、ドイツ論理派の巨匠であるH. P. Rehmの楽しい趣向作品を御覧いただきます。

まず目につく手段は、単純に1.Ra1+?とチェックをかけて1...Kg2 2.Rg1!≠までというもの(Ra1が再生するので、2...Kxg1とは取り返せない)。たしかにこれは狙い筋なのですが、黒には1...Sxb8(Sg1)!とSを取って合駒に使うという奥の手があって失敗します。Sを1段目に発生させられると、絶対に詰みません。1.Sxa6(Sg8)?も1...Sf6!で包囲網が破れてしまいます。つまり、白はSb8を取られないように逃げまわるのですが、黒もそのSを狙ってSa6で追いかけることになり、白はどこかでそのSを再生しないように取らねばなりません。すなわちその地点はb8ですが、その前にBa7を取っておく必要があります。

以上の理由から、作意は

1.Sc6! Sb8 2.Sxa7(Bf8) Sc6 3.Sc8 Sa7
4.Sb6 Sc8 5.Sa8 Sb6 6.Sc7 Sa8 7.Sa6
Sc7 8.Sb8 Sa6 9.Sc6 Sb8 10.Sxb8! ---
11.Ra1+ Kg2 12.Rg1≠
愉快なSの追いかけてこでした。

3 A. Slesarenko (1986)



≠2

さて、最後の例題は、今月の出題1番を鑑賞するための予備知識を提供します。

現代の≠2の主流を占める傾向は、パターン・プレイです。パターン・プレイとは、作意手順/紛れ手順/セット・プレイの3者においてその手順があるパターンになるというものです。もちろん、そのパターンは多種多様ですが、今回はその中でもいちばん簡単で、作例が非常に多い Le Grand Theme と呼ばれるパターンを紹介します。

図で1.Be2?とすると、狙い(スレット)は2.Qc4≠で、1...Ke4なら2.Qd3≠です。しかし、これは1...Ke6!で逃れます。

そこで作意は1.Kb6!です。今度は狙いが2.Qd3≠で、1...Ke4なら逆に2.Qc4≠となります。1...Kd6/e4はいずれも2.Qc5≠。

図式的にまとめると、

1.X? (2.A≠) 1...x 2.B≠ but 1...y!

1.Y! (2.B≠) 1...x 2.A≠

これが Le Grand のテーマです。

出題の1番でも、これと同じ形式になっていますので、キーを見つけた人は上にあてはまる紛れ1.X?も探してみてください。採点はキーのみでも正解扱いとします。

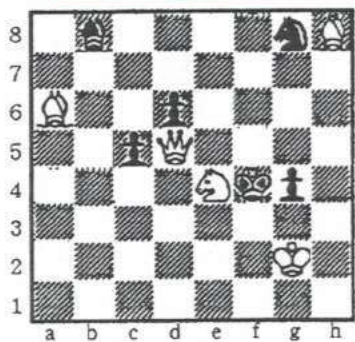
【出題コーナー】

新年のスタートですので、2手を中心に揃えました。ぜひ多数の御解答を！

- ①本文参照。キーのみでも可。
- ②客寄せ。黒白黒白と協力してメイトの形を4通りこしらえてください。
- ③④本文参照。③はキーだけではなく、必ず変化2通りを答えてください。
- ⑤作意解が1人だったため、修正再出題。

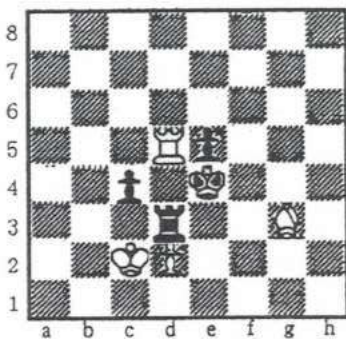
①②⑤には5点満点の採点を添えること。
締切 1月末日。宛先〒563池田市畑1-14-10-A 若島正 (FAX: 0727-53-6557)。

1 Henryk Gruzinski (Poland)



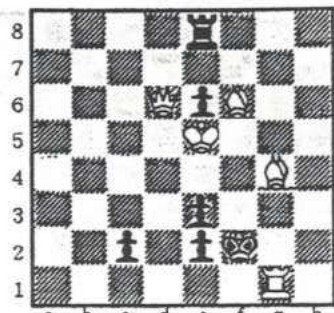
≠ 2

2 若島正 (大阪)



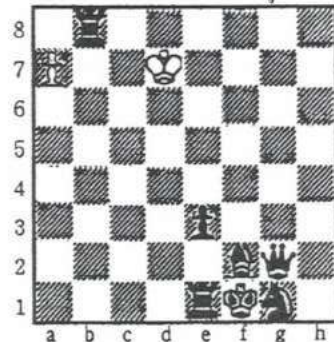
H≠2 4解

3 J. P. Boyer (1968)



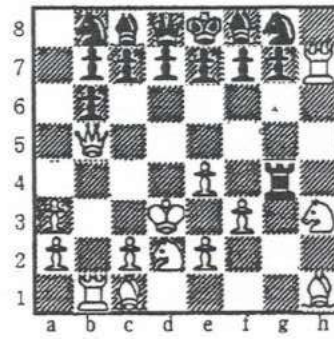
Circe ≠2

4 Klaus Wenda (1984)



Circe H≠2 4解

5 永野 啓 (広島)



黒が21手目を指した局面。棋譜は？

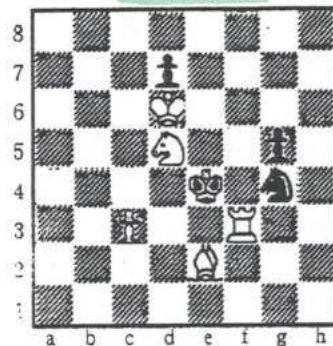
1996/2

現代チェスプロブレム入門

第9回結果 若島正

★95年度最後の出題は、28名の解答者が集まりました。初の参加は赤木誉幸・草薙登志夫・新藤孝敏・塚越良美の4氏。

① R. T. Lewis



≠2

1.Rf5! waiting.

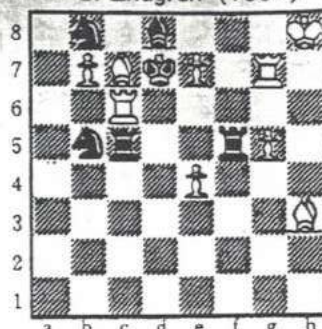
1...S~/Kxf5 2.Re5/Bd3≠

★初形の set play (黒の手番だと仮定した手順) を考えると、1...S~には2.Sf6≠。すなわち、この局面は黒から動く手に対してすべて1手詰が用意されているわけで、これを complete block と呼びます。この形式の2手問題では、キーが次に放置すれば詰めるぞという順 (threat) を持つかどうかによって、3種類に分類されます。

- (a) threat なし……set play が変化しない
- (b) threat なし……set play が変化する
- (c) threat あり

(a)のタイプはいちばん解きやすく、古くからよくあります。(b)のタイプは mutate と呼び、(c)のタイプは block threat と呼びます。実は、本図の作者 T. R. Lewis 氏は、簡潔形での mutate を専門にする作家なのです。軽妙なキー 1.Rf5! の後、1...S~に対する set play が変化する点に御注目下さい。則内誠一郎：普及のための心優しさに感動。山田康平：「ヨチヨチルーム」のレベルなんでしょうが、それでも一目とはいきません。1.Bd1? の紛れにはまってしまいました。★1.Bd1? は 1...Se3! で逃れます。

② B. Lindgren (1994)



≠2

1.Re6! (2.e8=Q≠)

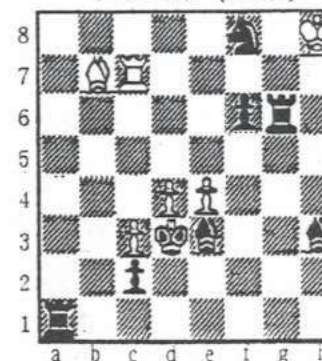
1...Kxe6/Rf7/Kxc7/Rf8+

2.exd8=S/exd8=Q/e8=S/xf8=S≠

広瀬行夫：見た瞬間2.exf8=Sの順ができればいいなと思った。それをさせてやるキーはただ一つ。

★これが「筋」の解き方です。一つのPが5通りの異なる成り方 (地点+駒種類) で詰むというのは、2手問題としては最大値でしょう (理屈だけだと6通りですが)。ある条件を最大に表現するようなこうした作品を task と呼びます。作者 Lindgren らしく、set play で 1...Kxc6 2.exd8=S≠ というおまけまで付いているのが巧妙な設定。★採点はこの5通りの成りが明示できているかどうかを基準にしましたが、1...Kxe6の変化を2.Bxf5≠とウツカリやった解答を中心に、減点になった人はかなりの数にのほりました。

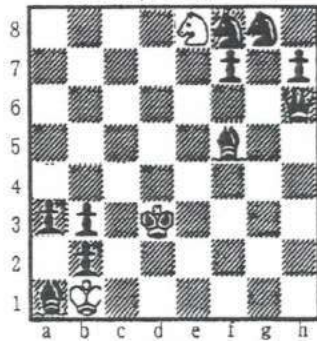
③ J. Kricheli (1965)



H≠3 2解

1.Bf1 Bc6 2.Kc4 Rc8 3.Bd3 Ba4≠
 1.Rd1 Rc6 2.Kxe4 Ba8 3.Rd3 Rxf6≠
 ★C. J. Feather氏の評では「完璧」という、
 本欄ではおなじみKricheliの佳作を鑑賞し
 ていただきます。
 小林敏樹：白のテンポ・ムーヴと黒RBの
 選択との関連がいい感じ。
 ★白RBの配置から、c6の地点で相互干渉
 して2種類のバッテリーを構成するのはす
 ぐ見えます。もちろん、それが直接のテ
 マではありません。すなわち、d3を塞ぐ
 ことになる黒RBの選択を入れ替えて、
 1.Rd1 Bc6 2.Kc4 ??? 3.Rd3 Ba4≠
 1.Bf1 Rc6 2.Kxe4 ??? 3.Bd3 Rxf6≠
 という2つの手順を考えると、そのどちら
 も白の2手目???に代入すべき有効なテ
 ポ(手待ち)が存在しないのです！ この
 Kricheli 得意のテーマをdual avoidance
 と呼ぶことは、彼の特集を組んだときにす
 でに説明しましたので、もう一度復習して
 して下さい(95年4月号参照)。

④ A. Karpati (1945)



H≠7

1.Be4 Sd6 2.Bg6 Sc4 3.Ke4 Sxb2
 4.Kf5 Sc4 5.Bh8 Sd6+ 6.Kf6+ Ka1
 7.Kg7 Se8≠
 喜多真一：双方テンポの扱いがうまい。古
 典名作の一つ！
 ★こちらもそういうつもりで出題したの
 ですが、まさかこれが潰れていたとは夢にも
 思いませんでした。発表されてから50年
 間も完全に通用してきたとはいえ、やはり
 当時はコンピュータ検討をやっていなかつ
 たからでしょうか。穴はあるものですね。

余詰1

1.Se6 Sd6 2.Sd4 Sc4 3.Sc2 Sa5
 4.Bg4 Sxb3 5.Bd1 Sa5 6.Kd2 Ka2
 7.Kd1 Sb3≠

余詰2

1.Bh3 Sd6 2.Bf1 Sc4 3.Ke2 Sa5
 4.Ke1 Sxb3 5.Se6 Sc5 6.Sf4 Kc2
 7.Se2 Sd3≠

余詰3

1.Sf6 Sd6 2.Se4 Sc4 3.Ke2 Sxb2
 4.Kf1 Sc4 5.Qh1 Kc1 6.Sf2 Kd2
 7.Qg1 Se3≠

★余詰指摘は上田吉一・駒井信久・塩田洋
 の3氏。さすが詰バラの解答強豪！
 ★この作品を引用したBlack to Playの著者
 であるC. J. Feather氏の修正案では、Bf5
 →g6, Kd3→e4としてH≠6.5とか。

⑤ 永野 啓

★このレトロ問題はとんでもない余詰が発
 生し、作意解答者は作者を除いて屋並仁史
 氏ただ1人！ 新年号で修正再出題の措置
 を取りましたので、ここでは省略します。

[結果]

	正解	部分解	誤解	無解	平均点
①	26	0	1	1	3.4
②	19	8	0	1	...
③	24	1	0	3	...
④	23	0	0	5	...
⑤	18	0	0	10	4.5

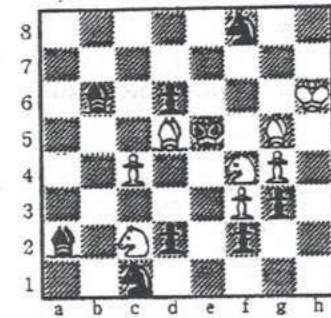
[成績] (満点: 2+5+6+7+10=30)

30点……10名
 井上順一・小林看空・新藤孝敏・塚越良美
 橋本 哲・花田 勉・真鍋 浩・屋並仁史
 後藤角兵衛・則内誠一郎
 その他の解答者(成績順)
 小林敏樹・佐藤善起・永野 啓・山田康平
 喜多真一・広瀬行夫・赤木誉幸・駒井信久
 塩田 洋・小畑 勉・上田吉一・齊藤吉雄
 千葉 肇・吉田 彰・藤澤秀樹
 草薙登志夫・原岡 望・小原義孝
 ▼下線の方々には50点きざみ突破賞を進呈。
 なお、賞品としては、F. Abdurahmanovic
 およびA. Johandi 両氏の作品集を用意して
 います。ほしい方はぜひ解答に御参加を！

95年度作品成績

●入賞作

Alois Johandi
 Tsume-Shogi Paradise 1995
 Prize

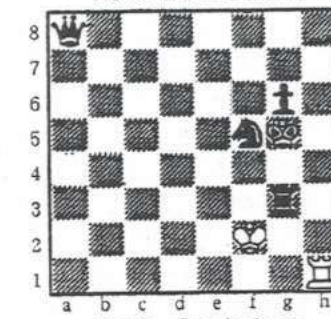


1.Sb4! Kd4 2.Bf6+ Ke3 3.Sc2+ Kxf4
 4.Bg5+ Ke5 5.f4≠
 黒KのRundlaufで原型の
 まま邪魔駒を消去する構
 想。氏の作品らしく、解
 いて楽しい論理作です。
 作者からは新作をいた
 だいでいますのでご期待を。



●佳作

Yoshikazu Ueda
 Tsume-Shogi Paradise 1995
 Honorable Mention



H≠3 2 solutions

1.Rg4 Rg1 2.Kh4 Rg2 3.g5 Rh2≠
 1.Sg7 Ra1 2.Kh6 Rxa8 3.Rg5 Rh8≠
 白Rの最小と最大の矩形。かわいい作。

95年度解答成績

氏名	1月	3月	5月	7月	9月	11月	計	通算
橋本 哲	20	29	33	29	25	30	166	248
真鍋 浩	20	29	33	29	25	30	166	219
屋並仁史	20	29	33	29	25	30	166	196
小林敏樹	20	29	33	29	25	29	165	247
後藤角兵衛	18	29	33	29	25	30	164	198
永野 啓	20	29	33	29	22	29	162	244
佐藤善起	20	29	33	29	20	29	160	226
則内誠一郎	20	29	33	29	15	30	156	156
山田康平	20	29	33	29	14	29	154	236
広瀬行夫	20	29	33	29	15	28	154	227
喜多真一	18	29	33	29	15	28	152	198
井上順一	18	29	33	29	10	30	149	215
駒井信久	20	20	33	29	18	20	140	182
塩田 洋	20	29	33	24	10	20	136	218
西村 詩	20	29	33	29	10		121	167
吉田 彰	20	13	23	24	5	13	98	128
小畑 勉	20		33	15		19	87	87
花田 勉	13	16	14	9		30	82	82
上田吉一			32	29		17	78	140
楡いっとく	20	29	23				72	72
藤沢秀樹	20	4	18	12	5	11	70	100
千葉 肇	20	4	23	8	0	13	69	115
松田一彦			29	23		0	52	52
小林看空	20					30	50	50
金子義隆	20	29					49	99
小原義孝	2	8	10	3	5	6	36	66
藤井美大	20	13					33	37
齊藤吉雄					15	17	32	32
新藤孝敏						30	30	30
塚越良美						30	30	30
橋本孝治				29			29	29
菊田裕司	20	8					28	28
原岡 望	8			6		7	21	21
筒井浩実				20			20	49
早田雅彦	20						20	20
稲富 享	14	6					20	20
赤木誉幸						20	20	20
草薙登志夫						7	7	7
古山伸夫					6		6	6
安川朝哉			4				4	4

(右端の通算は94年度分との合計)

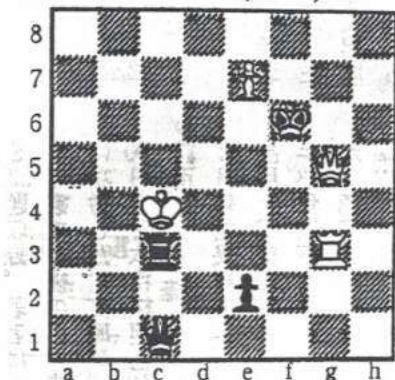
★以上のような結果で、橋本哲、真鍋浩、
 屋並仁史の3氏が満点を獲得されました。
 おめでとうございます。詰バラ編集部から
 年間解答優秀賞を贈呈します。

現代チェスプロブレム入門

第11回 若島 正

★今年から、比較的有名なフェアリー・ルールの紹介を始めています。今回はすでにフェアリー詰将棋にも導入されているMadrasiルールを勉強しましょう。

① K. Wenda (1986)



H≠2 Duplex Madrasi

★まず、Madrasi (「マドラシ」と発音)の定義から。「ある駒は、それと同じ種類の敵の駒によって取りをかけられている場合に、動けなくなる。」この奇妙なルールは1979年にインドのA. J. Karwatkarによって創案されました。

★さっそく例を眺めることにしましょう。Duplexという指定は、協力詰の場合に「黒から指し始めて黒Kを詰める」通常の手順と、「白から指し始めて白Kを詰める」手順の双方を求めよというものです。第1図では、どちらにもチェックがかかっているように見えますが、実はQおよびRのようにMadrasiがかかっているチェックではありません。ここで、Madrasiの利きの焦点(つまりe3)が急所になります。

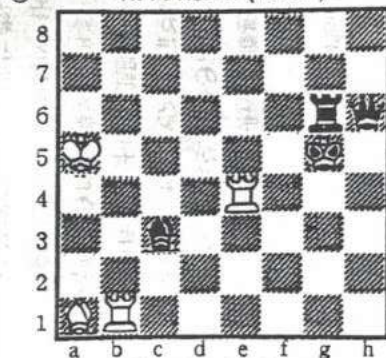
★黒Kを詰める解は

1. Kf5 e8=R! 2. Kg4 Re3! ≠

これでQでは取り返せず(白Rが生き返る)メイトです。なお1...e8=Q? は2...Qe3???がRc3のMadrasiを解消して白Kにチェックをかける禁手であることに注意してください。同様にして、白Kを詰める解は

1. Kd3 e1=Q! 2. Kc2 Qe3! ≠

② H. P. Rehm (1987)



SH≠11 Madrasi

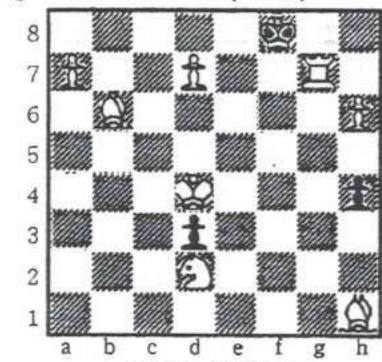
★さらにMadrasiルールに慣れるための問題を。第2図は、前回に紹介したドイツの超一流作家 H. P. Rehm の軽作で、SH≠とは連続協力詰を表す記号です。黒が連続してまず11手指し、その後白が1手だけ指して黒Kを詰めるような手順を求めます。★考え方の基本としては、まず黒の駒を自由に移動して、最終形を想像すること。この場合、黒のBc3がf6に移動すれば、Rb5まで詰み(Bf6はMadrasiがかかっている動けない)。これが目標です。それならべつにBg7の形にしても同じではないかと思われるかもしれませんが、それだと白Rb5に対して黒がRb6!とMadrasiで受ける手があるためなのです。この筋はよく出てきますのでご記憶を。

★今のままではBc3はMadrasiで動けないので、それを解消するためにb2の地点に駒をはさむことを考えます。ところが、その瞬間に白Kにチェックをかけてはいけません。b4にも駒を入れる必要があり、つまりQb2/Rb4の形を作るのが絶対になります。Rb4を指す前は、縦も横もMadrasiがかかる形ですから、それを遮断する意味でQをいったんb3に置くのが正解。Qb2/Rb4の形を作った後は、Bd4とするとMadrasiが解消してRb4も自由に動けます。★以上のようなプランに従えば、正解手順は次のとおり。

1. Rb6 2. Qe6 3. Qb3 4. Rb4 5. Qb2 6. Bd4
7. Rb6 8. Rg6 9. Bf6 10. Qh2 11. Qh6
Rb5 ≠

手順が完全限定なのをご確認下さい。

③ P. Petkov (1985)



S≠11 Madrasi

★Madrasiルールで何ができるかという好見本を一つ御覧に入れましょう。第3図の作者P. Petkovは自殺詰の押しも押されぬ第一人者ですが、フェアリーでも器用なところを見せます。まず盤面を眺めてみれば、黒の駒はKを除いてPが2枚しかなく、はたしてこんなものが自殺できるのかと解答者は途方に暮れるでしょう。実際、詰め上がりが見定できないと、この問題は永久に解けそうにありません。ここは駒を並べて手順を追い、じっくりと鑑賞して下さい。

★まず

1. Bb7! h3 2. Ba6! h2

と進めます。もちろん、この白の指し手の意味は今すぐにはわかりません。

3. a8=Q+ h1=Q

黒の受けは白QにMadrasiをかけて絶対の一手です。

4. Sf3+! Qxf3

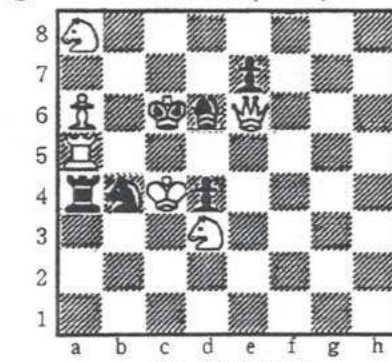
このときに、最初のBの移動の意味が現れます。すなわち、1. Bd5? h3 2. Bc4 h2以下同様に進めると、4...Qa1! とこちらで受けられて、自殺する形を作れないのです。

5. Ke3! d2 6. d8=Q+ d1=Q

最後の黒の受けも、先ほどと同様白Qe8にMadrasiをかけて絶対。さてこれで準備が完了しました。白Kの周囲だけを見れば、これで詰んでいる形です。後は白Qを2枚とも掃除して、Madrasiを解消してやればよい。その手順は次のとおり。

7. Bc5+ Ke8 8. Bb5+ Kxd8 9. Bb6+ Kc8
10. Ba6+ Kb8 11. Ba7+ Kxa8 ≠
趣向手順が現れるとは驚きですね。

④ N. Macleod (1989)



#2 K Madrasi

★Madrasiは他のいろいろなルールと組み合わせられて用いられることが多く、その最もポピュラーなものはCirceと複合させるいわゆるCirce Madrasiです。しかし、二つもフェアリー・ルールが重なると混乱する読者も多いでしょうから、ここではいちばん簡単な変形Madrasiルールについて説明しておきます。それは俗にK Madrasiと呼ばれるものです。

★K Madrasiとは、MadrasiルールをKにまで拡大して適用するものです。すなわち、Kどうしが衝突することも可能になりますが、その瞬間にどちらのKも動けなくなり、永遠にそのままです。

★第4図を例題として説明します。作者はMadrasiルールを愛好した故N. Macleodで、独特のユーモアにあふれた作風がここにもよく現れています。盤面を見ると、黒の駒はピンされているかMadrasi状態にあり、動けるのはKだけです。そこでSet Playは1...Kb5/Kc5 2. Qd7/Qd5 ≠ どちらもKが動けないのに注意。つまり、この初形はいわゆるcomplete blockの状態になっています。オーソドックス・ルールなら1. Qc8+ Bc7 2. Qxc7でメイトなのですが、Madrasiだと2...Kd5!で逃れ。一見すると有効な手待ちもないようですが、キーは1. Kb3!。わざとMadrasiを避けるかに見えるパラドキシカルなこの手によって、Set Playが変化します(いわゆるmutate)。

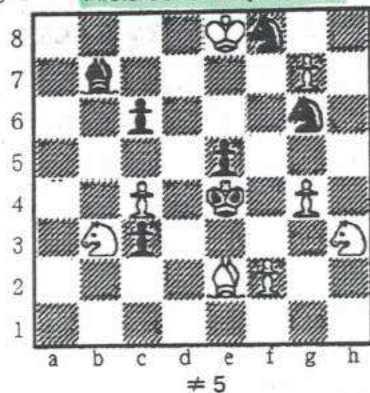
1...Kb5/Kc5 2. Kxa4!/Kxb4! ≠

思わずほほえみがもれてしまう愉快な作品ではありませんか。

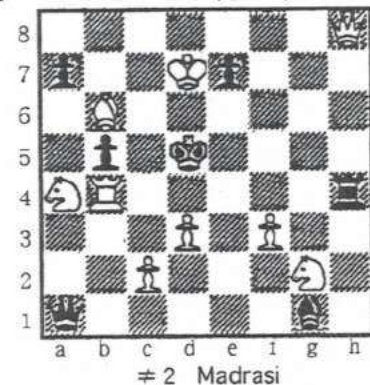
[出題コーナー]

- ①お待ちかね、Johandl氏の新作です。
 ②～⑤は解説欄を参照のこと。
 ②必ず変化3通りを答えて下さい。
 ③この図を(a)として、指定のように変えた図(b)も同じようにH≠2で解いて下さい。
 ④The Problemist 誌に既発表作。この図を(a)として、盤面からSg4を取り除いた図(b)も同じようにH≠3で解くこと。
 ⑤これだけはK Madrasi であることに注意すること。自殺詰ですが、難しくはありません。すでにこの連載で勉強したテーマが出てきます。変化4通りを答えて下さい。
 ①は新作なので、5点満点の評価をお忘れなく。解答締切は3月末日。送り先は、〒563 池田市畑 1-14-10-A 若島 正宛。
 (Fax: 0727-53-6557)

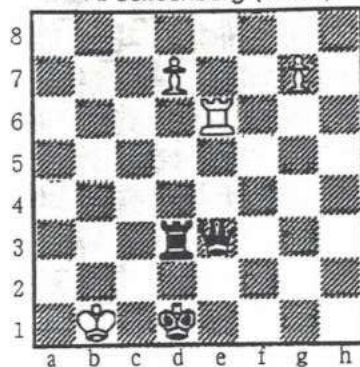
① Alois Johandl (Austria)



② O. Faria (1989)

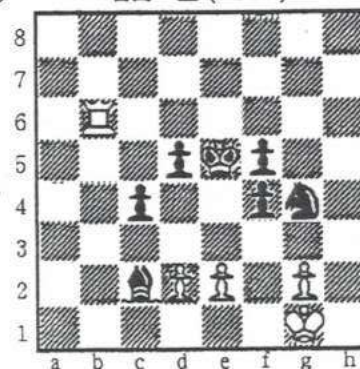


③ M. Rittirsch
A. Schönberg (1987)



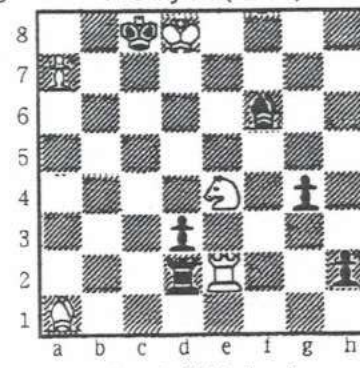
H≠2 Madrasi
 (b) Re6→e5
 若島 正 (1991)

④



H≠3 Madrasi
 (b) -Sg4

⑤ Y. Cheylan (1985)



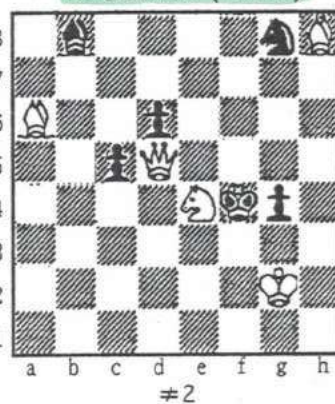
S≠2 K Madrasi

1996/4

現代チェスプロブレム入門
 第10回結果 若島 正

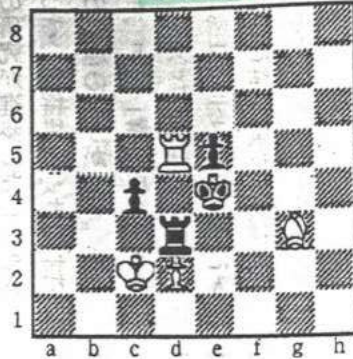
★初めてフェアリー・ルールCirceの出題で、はたしてどれくらい解答者が集まるのか心配でしたが、34名と過去最高を記録しました。初の解答参加は川崎紀夫氏。この人の名前は、わたしの『華麗な詰将棋』の読者ならご記憶のはず。川崎くん、期待してまよ!

① H. Gruzinski (Poland)



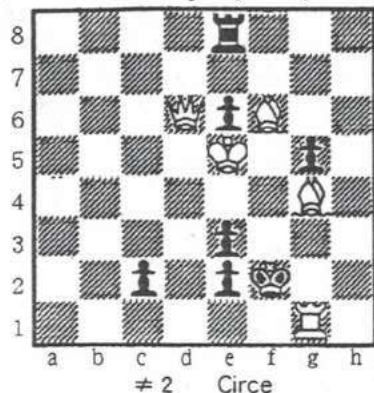
- 1.Sg3? (2.Qd2≠)
 1...Ke3 2.Qg5≠ but 1...Sf6!
 1.Bb7! (2.Qg5≠)
 1...Ke3 2.Qd2≠
 ★すでに解説したとおり、紛れと本手順で
 1.X? (2.A≠) 1...x 2.B≠ but 1...y!
 1.Y! (2.B≠) 1...x 2.A≠
 というパターンになっているのを専門用語でLe Grand Themeと呼び、2手のパターン・プレイではよく試みられるテーマです。
 川崎紀夫: Sf6で逃れとは! これが見えずに苦戦した。5点
 ★という評がある一方で
 筒井浩実: 詰将棋の感覚だとBh8が紛れでしか働かないというのは大きなキズに見えてしかたがない。2点
 ★という意見も多く見受けられました。実は作意だけなら、白Bh8と黒5枚のなんと計6枚が不要駒です! いかにもパターン・プレイとは言え、これはやはり作り方に問題があると思えません。

② 若島 正



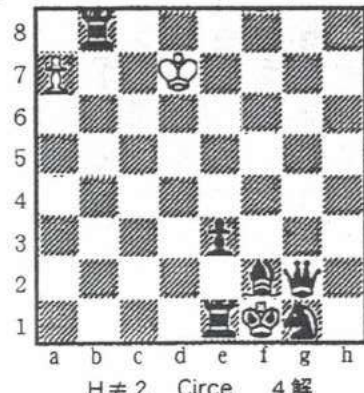
- H≠2 4解
 1.c3 dxc3 2.Rf3 Rxe5≠
 1.Re3 Rxe5+ 2.Kd4 dxe3≠
 1.Rxd5 d3+ 2.Kd4 Bf2≠
 1.Rf3 d4 2.exd4 Re5≠
 ★「4解」という設定を見て、本欄の愛読者ならまず思い浮かべるのがA U Wでしょうが、他にも4解用のテーマがいくつかあり、この作品はその一つである2段目のPによる4通りの動き(白Pの場合はAlbinoで黒PならPickaninnyと呼ぶ)を知っていただくための例題です。
 小林看空: 畏がいっぱい。幻の5解。
 1.Rc3 Rxe5+ 2.Kd4 dxc3≠
 どこが客寄せなんでしょうか。4点
 ★この幻の5解目を答えてしまった方が1名。途中白Kにチェックがかかっています。
 菊田裕司: 個々の手順は味気ないものもあるが、このテーマにしては駒数が少ない。4点
 千葉 肇: 4解とPd2でアルビノが見え見え。2解のRf3によるセルフブロックと詰上がりと同じなのが残念。2点
 ★おっしゃるとおり、どれくらい駒数少なくできるかを試しただけなので、あちこちに拙いところがあり、特に白Pの動きが1手目と2手目に散らばっているのが致命傷。
 最近C. J. Feather氏は、「白はQd1/KelとP1枚だけの配置で2手目にAlbinoが現れるH≠2を使用駒何枚で作れるか」というコンテストを行っています。15枚でできれば上出来とか。あなたも一度トライしてみして下さい。できたら本欄に投稿してね。

③ J. P. Boyer (1968)



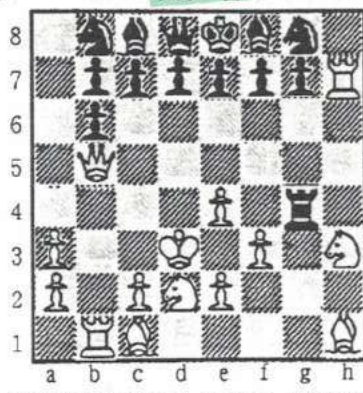
1.Kxe6(Pe7)!! (2.Qg3≠)
 1...exd6(Qd1)+ 2.Qxe2(Pe7)≠
 1..:exf6(Bc1)+ 2.Bxe3(Pe7)≠
 ★出題時には黒Pg5が脱落し、1.Bh4≠の1手詰になってしまいました。またしても誤植で申しわけありません。常連解答者の方々にはただちに葉書で連絡しました。
 ★この図は見た目よりも紛れがあり、1.Ke4? e5!
 1.Qc6? e1=S!
 1.Qd2? c1=Q! [2.Qxe2(Pe7)+ Kxg1(Ra1)]という筋にはまると初手の驚くべきキーを発見するのに時間がかかるかもしれません。
 原岡 望：チェックになりそうで初手が分らなかつた。この筋は解説してはしなかつた。
 ★どうしようかと迷ったのですが、自力で見つけてもらおうという結論になりました。悩んだ末に白旗をあげた方々、すみません。
 塚越良美：Kxe6とは詰将棋では考えられない手。
 屋並仁史：なるほど、こういうことができるんですか、という感じ。初手黒Rに突っ込んでいく白Kの動きがユーモラス。
 橋本孝治：王手放置に見える手と、本当の王手の応酬。
 ★黒にチェックをかけさせる、cross check物です。二つの変化で、どちらも詰め上がりはオーソドックスなら詰んでいないが、Circeルールなら詰んでいる(2.Bxe3に対してKxe3はBc1が再生して禁手)という、いわゆるフェアリー・メイトなのも、いかにもフェアリー独特の味ですね。

④ K. Wenda (1984)



1.Bg3 axb8=Q(Rh8)
 2.Bxb8(Qd1) Qxe1≠
 1.Re2 a8=R 2.Qxa8(Rh1) Rxg1≠
 1.Qf3 a8=B 2.Qe2 Bg2≠
 1.e2 a8=S 2.Rxa8(Sb1) Sd2≠
 橋本 哲：4種成はいつでも楽しい。大好き。
 駒井信久：こんな簡素形でAUWができるとは！
 ★フェアリーならAUWもこんなに簡単にできるという好見本で、Circeのおもしろさを体験してもらおうという出題でしたが、易しそうに見えてもこれはこれで刺があり、10名もの大量誤解者が出ました。油断大敵です。
 ★誤答で最も多かったのは
 1.Re2 a8=R 2.Rxa8(Rh1) Rxg1≠という順(6名)。これはb8が空いているので、2...Rxg1のときにSb8が再生してセルフ・チェックの禁手になります。また
 1.Re2 axb8=R(Rh8) 2.Rxb8(Rh1)? --という解も2通ありましたが、これは2手目のときにRが再生する場所がh1ではなくa1です。さらに
 1.e2 a8=B 2.Re8 Bxg2≠という順も、最後にQがd8に再生してセルフ・チェック。つまり
 真鍋 浩：実はKd7の配置で着手が限定されていることをウツカリしそう。
 永野 啓：ポツンとあるように見える白Kが実はこじかかない良い配置なんですね。
 ★というのが事の真相だったのです。

⑤ 永野 啓



黒が21手目を指した局面。棋譜は？
 1.d3 Sf6 2.Kd2 Se4+ 3.dxe4 h5 4.Kd3 h4 5.Sd2 h3 6.Rb1 hxg2 7.h4 Rh6 8.h5 Rg6 9.h6 Sc6 10.h7 Sd4 11.h8=Q Sf5 12.Qh5 Sh6 13.Qb5 Sg8 14.Rh7 Rg4 15.Sh3 g1=S 16.Bg2 Sf3 17.Qg1 Sd4 18.f3 Sc6 19.Qgb6 axb6 20.Bh1 Ra3 21.bxa3 Sb8
 ★大好評でした。広瀬氏のレトロAUWに次ぐ佳作を本欄で発表できて、嬉しいかぎりです。日本のプロブレム界の未来は明るいぞ！ 絶賛をずらりと並べましょう。
 井上順一：考えるところが多く大変楽しめた。Sの入れ替えに思い至ったときは「やった！」と叫びたい気持ちであった。しかも序盤に動かしたKがさりげなくSの道筋を限定している。素晴らしい作品。5点
 則内誠一郎：前回まったく気がつかなかった意外かつ見事なテーマ。ポーカーフエイスの両S！ 掃達までの軌道計算は世界に通用する超一流のテクニックだと思います。5点
 小林敏樹：白Q→g1→b6のルートと黒Sの入れ替えにまったく気がつかず、不詰と思っていた。誤図ではないと教えられ再度取り組んだら簡単に解けましたが傑作だと思います。5点
 吉田 彰：黒は結構遊んでますねえ。タイミングを計りながらSを2枚とも違うSにすりかえてしまったところはなかなか笑えます。こんな本格的なレトロが解けたのは初めてです。すっごく嬉しい一っ!! 5点

広瀬行夫：動いていないように見えるSが実は2枚とも別のところから来ているとは！こんな順を成立させる作者の技術は実にすばらしい。5点
 花田 勉：黒のSが動ける形なのでもしかしたらと思ったが、うまくSの入れ替えトリックを実現させたものだ。5点
 佐藤善起：QとSの入れ換え、一手も緩められない必然手順。これぞレトロ。5点
 上田吉一：3時間くらいで解けた。易しいがよくできている。佳作！ 5点

【総評】

広瀬行夫：③を解いているとき、Kも取られたら元の位置に再生させたら？(題してK Circe)などとふと思いついた。
 ★そのとおり。K Circe はすでに公認ルールとして作例がたくさんあります。
 後藤角兵衛：H. P. Rehm作を見ていると詰蘭棋にも持駒が工夫できそう。キルケーにもまだまだ面白いものがありそうですね。
 塩田 洋：フェアリーになると急に楽しくなるのはどうしてだろうか？
 ★やっぱりあなたはフェアリスト。

【結果】

	○	△	×	5	4	3	2	平均点
①	33	0	1	1	4	19	3	3.11
②	30	3	1	4	18	2	1	4.00
③	25	0	9				
④	21	10	3				
⑤	17	0	16	12	4	1	0	4.65

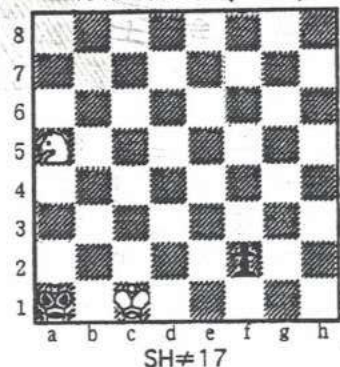
【解答成績】

今年から、すべて1問5点とします。また、50点きざみ到達賞は事務簡略化のためにいったん廃止しますが、賞品用の冊子は別の形で配布できるように考慮中です。
 満点.....12名
 橋本 哲・永野 啓・山田康平・広瀬行夫
 真鍋浩・喜多真一・後藤角兵衛・屋並仁史
 駒井信久・上田吉一・新藤孝敏・塚越良美
 24~20点.....11名
 小林敏樹・佐藤善起・花田 勉・塩田 洋
 吉田 彰・千葉 肇・藤沢秀樹・筒井浩美
 齊藤吉雄・橋本孝治・菊田裕司
 19点~.....11名
 井上順一・小林看空・則内誠一郎・原岡望
 小畑勉・赤木誉幸・草壁登志夫・川崎紀夫
 松田一彦・小原孝義・藤井美大

現代チェスプロブレム入門
第12回 若島 正

★今回はフェアリー・ルールの中で最も基本的な条件の一つである、片方が連続して何手が指すいわゆるSeriesの仲間をまとめて眺めてみることにします。

① T. R. Dawson (1947)



★Seriesのファミリーでもいちばん親しまれているSeries Helpmate(SH≠)は、次のような定義です。「黒が連続して指定された手数だけ指し、その後で白が1手指して黒をメイトにする手順を求めるもの。途中、最終手を除いて、黒は白にチェックをかけてはならない」

★そこで、フェアリーの王様 T. R. Dawson による、絶好の例題を。盤面を見ればすぐにわかるとおり、黒が適当な駒でa2を埋めてから白Sb3でメイトというのが筋書き。ところが、その駒はSなら白Kにチェックがかかるので、Rが正解……とここまでは簡単でしょう。しかし、いきなり1.f1=R+はチェックでだめ。さあどうするか。

★まず1.Ka2 2.Ka3 3.Kb4 4.Kc3 5.Kd3 6.Ke2 7.Ke1 とKを移動しておく、狙いの8.f1=Rがチェックにならずに実現します。今度はKを原形の位置に戻す番。9.Rf2といったんしておいてから(9.Ke2+はチェックになります) 10.Ke2 11.Kd3 12.Kc4 13.Kb4 14.Ka3 15.Ka2 16.Ka1 で準備完了。17.Ra2 Sb3≠までです。Kの軌跡が限定になっている点や、手順前後が許されない点をご確認下さい。

② J. Kricheli (1966)



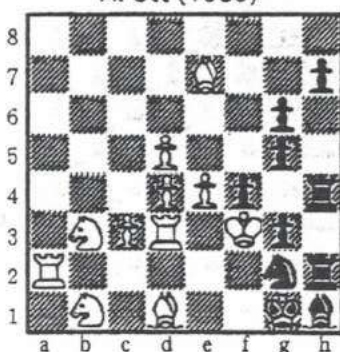
★先ほどのDawsonの例題よりはかなり難しいのですが、本欄ではおなじみの一流作家Kricheliの洗練された技巧をお楽しみいただきましょう。

★まず図を眺めて、白が1手で詰めるにはどういう形があるかを考えます。すると、黒のKが右サイドにいてはどのようにやっても1手では詰まないことがわかります。Sb8の配置からすると、Kを左サイドに移動することになるのですが、そのためにはf7に何か駒を埋めなくてはなりません。黒の右ブロックはまったく動けないので、Pc7を成って使うことになりませんが、Sにすると手数が相当にかかります。しかし、Bに成るとそれはf7と色違いのマス目です。はて？

★1.c5 2.c4 3.c3 4.c2 5.c1=Bとします。ここからが主眼で、6.Be3 7.Bg1 8. Bh2 どちらに移動。なんのために？ そうです、Bh3を動かすためなのです！ 9.Bf1 10.Bc4 11.Bf7 で予定の狙いが達成されました。これで12.Kf8 13.Ke8 として、ここまでが第一段階。

★次には、Kをd8に動かすことを考えます。そのためには、違う色のマス目にいるBh2をe7にもってあげればいいのです。14.Bc4 15.Bf1 16.Bh3 とBを戻して、17.Bg1 18.Bc5 19.Be7。これで正解に近づきました。後は詰み形がどこか探すだけです。20.Ke8 21.Kc7 22.Bd6 23.Kb6 24.Ka5 25.Bb4 Qa6≠、初形からはすぐに想像しがたい、意外な場所で詰みました。それにしても、実にシンプルでエレガントなメカニズムではありませんか！

③ M. Ott (1980)

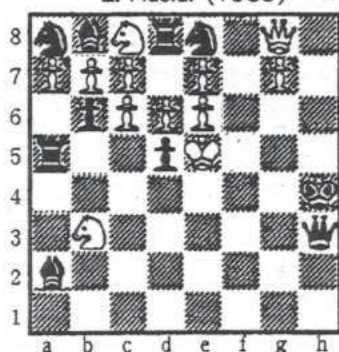


★このSeriesで長手数記録物をお見せします。この図はSeries Helpstalemateで、最後は白が1手指して黒をステールメイトにします。ステールメイトにするには、Sg2を動けなくする必要がありますから、Rでピンする意味で、最終形の黒Kの位置はh2であることが確定します。そのとき白はg1に何か利かさねばなりません。黒の駒は、右の艦から出られるのはKだけですから、白の駒の群れをKで掃除することになりますが、Rd3を残してBd1を取ることはできません。残る可能性は、Pd4を取って、最終白がBc5とする形です。

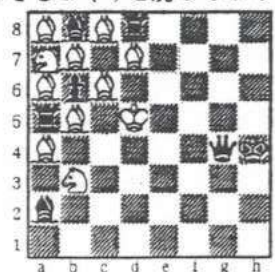
★黒のKを艦から出す手順は1.Rg4 2.Rh6 3.Kh2 4.Kh3 5.Kh4 6.Kh5 7.Rh4 8.Rh2 9.Kh4 10.Kh3 11.Rh4 12.Rg4 13.Kh4 14.Kh5 15.Kh6 16.Kg7 です。これはいわゆる列車の入れ替えパズルの応用編。そこで、17.Kf7 18.Ke8 19.Kd7 20.Kc7 21.Kb6 22.Kb5 23.Kc4 24.Kxd3とまずRを取ります(Be7を取らないのに注意)。このコースの逆をたどって32.Kg7。今度は最初とは逆に33.Kh6 34.Kh5 35.Kh4 36.Kh3 37.Rh4 38.Rh6 39.Kh4 40.Kh5 41.Rh4 42.Rg4 43.Kh4 44.Kh3 45.Kh2 46.Kg1でg1まで抜いて、47.Kf1 48.Ke1 49.Kxd1でBを取ります。

★後はこの往復運動を繰り返して(手順途中省略) 74.Kxb3 101.Kxb1 128.Kxc3 129.Kxd4 150.Kh2 151.Rh3 152.h5 153.h4 Bc5=。よくぞここまで手数をはしたものですな。

④ Z. Maslar (1989)



★最後にはウルトラC級の超難度の技を。この問題はSeries Self (SS) と呼ばれるジャンルで、その定義は「白が連続して指定の手数だけ指し、その後黒がどのように1手指しても白をメイト(またはステールメイト)になるよう強制できるような手順を求める。途中、最終手を除いて、黒にチェックをかけてはならない」というもの。この形式では、以前、B. LindgrenのダブルAUWという歴史的な傑作を紹介済みです。★さてこの作品、白をステールメイトにするわけですが、連続着手のあいだ白の駒は減りませんから、最終手で1枚消えるとしても、まだ11枚も残るはず。そんな形がどうやってステールメイトになるのでしょうか？ さっそく正解を並べましょう。1.bxa8=B 2.Bb7 3.a8=B 4.Sa7 5.c8=B 6.c7 7.d7 8.dxe8=B 9.Ba4 10.e8=B 11.e7 12.Qe6 13.g8=B 14.Bh7 15.Bd3 16.Bda6 17.Beb5 18.e8=B 19.Bec6 20.B8d7 21.Kxd5 22.c8=B 23.Qg4+ Qxg4=。なんとPが8枚Bに成りました！最終形をじっくりと眺めてみて下さい。

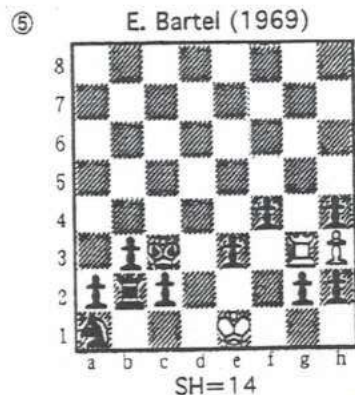
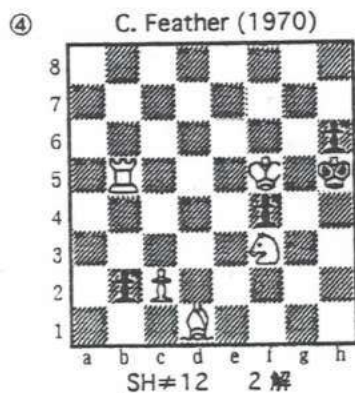
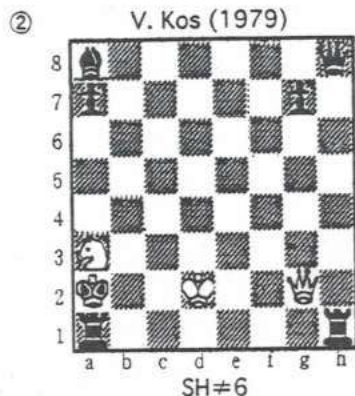


【新作コーナー】

特集の Series Help を4題そろえてみました。このジャンルは、要領さえわかると解きやすいと言えますので、ぜひ大勢の方々からの解答をお待ちしています。
 ①注目株永野氏の新作。この作品だけは5点満点での評価をお忘れなく。
 ②同じ色のマス目にBが2枚ありますが、誤植ではありません。
 ③これだけは、最終目標がステールメイトなのに注意して下さい。

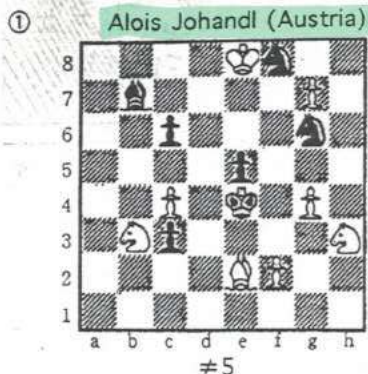
締切は5月末日。

宛先は⑤563 池田市畑1-14-10-A
 若島 正 (Fax: 0727-53-6557)



1996/6
 現代チェスプロブレム入門
 第11回結果 若島 正

★Madrasi特集に、解答者は29名集まりました。初の解答参加は船山進氏。

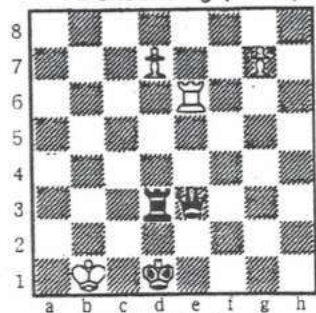


1.g8=S! (2.Sf6≠)
 1...Sd7 2.Sg5+ Kf4 3.Se6+ Ke4
 4.Sc5+ Sxc5 5.Sf6≠
 1...Sh7 2.Sc5+ Kd4 3.Se6+ Ke4
 4.Sg5+ Sxg5 5.Sf6≠
 ★日本の読者にもすっかりおなじみになったJohandl氏の第2作は、Sの対称的な動きをフィーチャーした軽作です。
 ★まず1g8=Q?とするとどうなるか。それは1...Bc8! 2.Qf7 Bd7+ 3.Kd8 Se6+ 4.Kxd7 Sgf8+で逃れ。こういう筋にあまり目をくれなければ、作意に入るのは容易でしょう。小林敏樹：易しいけれどSの揺り動かしは楽しめる。4点
 駒井信久：変化が左右対称なのはちょっとおもしろい。4点
 ★実は、出題時に「変化2通りを答えて下さい」という但し書きを付け忘れたために、詰将棋式にその片方だけを答えた解答が多かったです（今回はそれでも○として採点）。作者の狙いは、明らかに変化2通りの対称性にありますので、両方も答えるのが解答者としての好意でしょう。この辺は、作意手順を1本のみを設定する詰将棋の習慣とは根本的に異なっています。
 ★最後うっかり4.Sf6+から詰ました解答あり。これは4...Sxf6+と白Kにチェックがかかってしまいます。



1.d4! (2.Qa8≠)
 1...Qxd4/Rxd4/Bxd4
 2.Sc3/Sf4/Se3≠
 屋並仁史：いかにもMadrasiという感じの初形。
 ★そのとおりで、よく見るとQQ、RR、BBとMadrasi関係になっており、動きません。従って、白のキーは見かけよりはるかに可能性が少なく、考えやすかったはずです。
 ★その3つのMadrasi関係のa1-a8、b4-h4、b6-g1が交差するd4の地点が急所。ここに1.d4!と焦点捨てで、Madrasi関係を一举に解消してやるのが、いかにも筋のいい快感の一手ではありませんか。
 吉田 彰：まさに急所の一撃！ Sでの決め方もなかなか。
 ★ところで、1.d4!を放置した場合のスレットは2.Qa8≠です。これを2.Qe5≠と勘違いした解答も結構ありましたが、それだと2...Qxd4!で逃れます。本来なら減点対象になるところですが、スレットを書かなかった解答も多く、今回は甘く採点してすべて○扱いにしました。ご注意ありまし。
 筒井浩実：QRBを移動させて、その裏側にSが動くという手順になっている。
 ★これが作者の意図を正しくみ取った評です。つまり、いきなり1.Sc3+/Sf4+/Se3+?といくと、1...Qxc3/Rxf4/Bxe3と取られて無効になるので、まずQ/R/Bをd4に引き寄せて、Madrasi関係の半直線を縮めておいてから、その外側にSを跳んでやれば取られないのでメイトになるという仕掛けです。Madrasiの基本的例題でした。

③ M. Rittirsch
A. Shoenberg (1987)



H≠2 Madrasi
b) Re6→e5

a) 1.Qh3 g8=R 2.Rg3 d8=R≠
b) 1.Ra3 g8=Q 2.Qb3 d8=Q≠

★今回の目玉商品。この形なら、d8=Q/Rとしてメイトにするしかないのは目に見えています。ところで、これがもしオーソドックスなら、d8=Q/Rの成りは限定になりません。しかし、Madrasiだと、その成りを限定にすることが可能なのです。

★仕掛けはいたって単純で、黒のQRのうち1枚をMadrasiで縛り、残りの1枚とは違う駒にd8で成ることによって、Madrasiに寄る受けも回避してメイトにするというのですが、それをこのような美しい表現で見せられると、やはり感心せずにはいられません。

船山 進：私にとっては難問。結晶のような完成度と思う。感動した。

川崎紀夫：大傑作!! すばらしいとしかいいようがない。僕の好みです、こういうタイプ。

広瀬行夫：すばらしい!の一言。

赤木誉幸：Rの1マス違いだけでこれだけのものが表現できるなんてすばらしい。

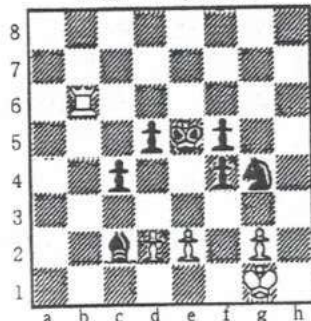
原岡 望：右と左に分かれるのがおもしろい。ずいぶん考えました。

佐藤善起：対称形なのにb)が難解だった。

後藤角兵衛：地味ながらプリストルの手筋。

★誤解としては、1.Rd2 Rc6 2.Qd2 Rc1≠または1.Rd2 g8=R 2.Qg1 Rxf1≠という解答がありました。これはそれぞれ3.Rc2! および3.Rg2!というMadrasiの受けがあったメイトではありません。

④ 若島 正 (1991)



H≠3 Madrasi
b) -Sg4

a) 1.Se3 g4 2.fxf3 e.p. dxe3
3.Ke4 Re6≠

b) 1.Kd4 e4 2.fxe3 e.p. Kf2
3.Kc3 Kxe3≠

★自作です。通常の駒では、Madrasi関係は双方向的であり、どちらも相手の駒を取れずに麻痺してしまいます。ところが、その唯一の例外がPで、アンパッサンならPがPを取れる……というのが作図の動機。なにしろ当時はほとんどプロブレムを作った経験がなく、作っても作っても余詰の連続で、この完成図に到達するのに約100枚くらいの図面用紙をゴミ箱行きにしたことを記憶しています。

山田康平：マドラシだからP突きが限定なのだけけど、普通の手順でマドラシらしくない。

★おっしゃるとおり、この作品でMadrasiに関係するのはPだけなのが、いかにもフェアリーに不慣れなのを露呈しています。だから当然やさしいはずだと思ったのですが、実際に出题してみるとそうでもなく、特にb)はかなりの無解者が出ました。

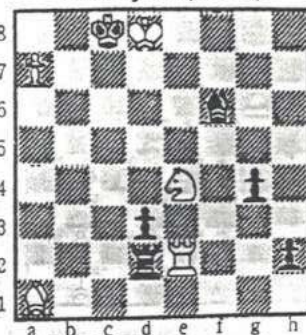
真鍋 浩：アンパッサンがテーマであることはすぐわかったが、b)の詰め上がりが見えず、大苦戦。

★その原因は、Pd2が原形のまま動かさず黒Kをメイトにする駒になるからでしょう。C. Lytton氏によれば、この詰め上がりは初めてではないがやはり気持ちいいとか。

則内誠一郎：既発表作は何作ですか？

★海外では、Problemist誌で9作、Phenix誌で6作の、計15作です。

⑤ Y. Cheylan (1985)



S≠2 K Madrasi

1.Sg3! waiting

1...h1=Q 2.a8=Q dxe2≠

1...h1=R 2.a8=R Rxa1≠

1...h1=B 2.a8=B dxe2≠

1...h1=S 2.a8=S dxe2≠

★こちらがQに成れば相手もQに成り、Rに成れば相手もRに成り……という四種成(AUW)の対抗をBabsonと呼びます。オーソドックスでこれを実現するのは至難の技で、詰将棋で言えば煙詰第2号局の出現に相当するような多数のプロブレム作家たちの長年にわたる努力の結果、ようやく誕生した≠4のBabsonはすでに本欄で紹介したことがあるのはご記憶でしょう。

★ところが、いったんオーソドックスを離れてしまうと、AUWやBabsonなんてのは楽なもので、フェアリー駒を混ぜるとPがそのフェアリー駒にも成れるので、それをさらに拡張したスーパーAUWやらスーパーBabsonまで可能になります。そこで、K Madrasiというルールなら、どれくらい簡単にBabsonが作れるかを見ていただくというのがこの出題の狙いでした。もちろん、やさしすぎるのは承知のうえです。千葉 肇：変化4つとあればBabson! Rのときだけcross checkなのは意表を衝くがややアンバランスな感じ。

小畑 勉：Rに成る変化がいちばん良かった。

則内誠一郎：こんな楽しい趣向であれば、フェアリー大歓迎です。

塩田 洋：Kマドラシは王手(回避できない)即詰で応用範囲が広い。

【総評】

船山 進：初心者です。今までやさしいオーソドックスしか解いたことがなかったので、フェアリーもおもしろいものですね。

★これだけ解く実力があれば、もう初心者なんかではありません。これからもよろしくね。

【結果】

	○	△	×	5	4	3	2	平均点
①	23	1	5	3	6	11	2	3.45
②	28	0	1
③	25	0	4
④	14	7	8
⑤	27	0	2

【解答成績】

満点(25点)……13名

橋本 哲・永野 啓・山田康平・真鍋 浩

後藤角兵衛・屋並仁史・駒井信久

新藤孝敏・小林敏樹・筒井浩実・斎藤吉雄

小林香空・赤木誉幸

24~20点……8名

広瀬行夫・佐藤善起・塩田 洋・小畑 勉

金子義隆・船山 進・喜多真一・藤沢秀樹

19点~……8名

則内誠一郎・川崎紀夫・千葉肇・井上順一

原岡 望・草薙登志夫・吉田彰・小原義孝

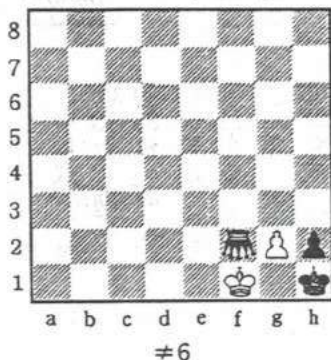
【お知らせ】

すでに5月号でお伝えしたとおり、日本チェス・プロブレム協会(略称JCP S)の機関誌「プロブレム・パラダイス」(年4回発行)の創刊号ができあがりました。B5版24ページで、世界のプロブレム専門誌の最新号から選んだ問題を一挙100題、さらに日本人作家のオリジナルを9題掲載しています。担当者は永野浩(オーソドックス)、小林敏樹(ヘルプメイト)、屋並仁史(セルフメイト)、菊田裕司・山田康平・山田嘉則(フェアリー)、橋本哲(レトロ)の各氏。チェスおよびプロブレムをこれから始めようという方々のために、やさしい手引きも別冊として付いています。お申し込みは、年会費3000円(4号分、送料込み。学生・女性会員2000円、賛助会員5000円)を、郵便振替で小林敏樹(00190-9-162538)まで。

1996/7
現代チェスプロブレム入門
第13回 若島 正

★いよいよ今回から、よく使われるフェアリー駒のいくつかを順に紹介します。まず最初はGrasshopperです。

① V. Onitiu (1929)



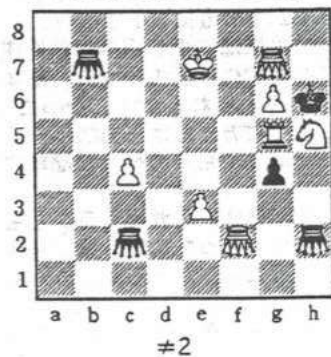
★Grasshopper (すなわちバッタ) とは、いわゆるhopper系の駒の中でも最もポピュラーなものです。hopper系の駒は、何かの駒を跳び越して動くことを基本とします。そこでGrasshopperの定義は次のとおり。

「Qの利きの線上で、白または黒の駒を1枚跳び越して、その直後のマス目に着地する駒。そのマス目に敵の駒がいる場合は、その駒を取れる。」これはフェアリーの王様 T. R. Dawson によって1912年に創案されました。

★それではやさしい例題を。上の①図では、f2にいる駒がGrasshopperを表します。このように、図では通常Qを180°回転させた図柄で表し、また手順中ではGと略記します。問題図では、Gf2にはどこも跳ぶ場所がありません。従って、1.g4?とするとステールメイトになってしまいます。

★そこでGを跳ばす意味で1.g3!とします。1...Gh4 2.g4 Gf4 3.g5 Gh6 4.g6 Gf6 5.g7 Gh8 まで進んだとき、6.gxh8=Q?とするとステールメイト。ここで大切な情報を。フェアリー駒が盤上に出ていると、Pはそのフェアリー駒に成れるのです。それを利用して、6.gxh8=G!#までのメイト!

② T. R. Dawson (1927)



★さてそれでは、このフェアリー駒の創案者であるT. R. Dawson自身の作品を見てみることにしましょう。彼はGrasshopper入りの作品をかなり大量に創作しており、この駒でできることはほとんどすべてやり尽くしているといった感があります。上の②は、その中でも代表作のひとつであり、Dawsonの才能を充分に発揮しています。

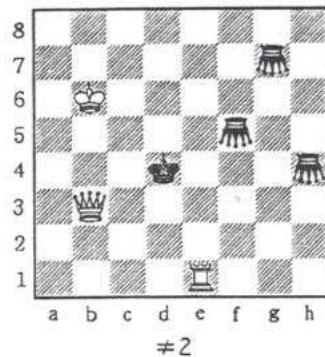
★右上の黒Kの周囲は妙な形になっていますが、要するにKが動けないと思えばよろしい(Rg5はGg7によってヒモがついているのに注意)。ということは、Gf2によってメイトにすることになりますが、今いきなり動かそうとすると、1.Gb2?または1.Gd4?ととんでもない方向に行ってしまう。そこで、何か有効な手待ちを考えるのがポイント。

★キーは1.e4!です。黒の応手は、Gb7を跳ぶのが2通り、Gc2を跳ぶのが3通り、Gh2を跳ぶのが1通り、Pg4を動かすのが1通りの計7通りありますが、そのすべてに対して、Gf2の移動によるメイトが用意されています。次の手順をご覧ください。

- 1...Gf3 2.Gf4#
- 1...Gf7 2.Gf8#
- 1...Gc5 2.Gb6#
- 1...Gf5 2.Gf6#
- 1...Gg2 2.Gxh2#
- 1...Ge2 2.Gd2#
- 1...g3 2.Gh4#

★1枚のGによる7通りの異なる詰めあがり、理論的に最大数です。さすがですね。

③ P. Petkov (1975)



★次は、フェアリー駒を利用して、モダンなテーマを表現している例を。作者は、セルフメイトの権威である、本欄でもおなじみのPetkovですが、フェアリー駒を扱っても実に器用なところを見せてくれます。★現代のオーソドックス#2では最も主要なテーマに、changed mateというのがあります。これは、作意順だけではなく、いわゆるSet Playと、いくつかのTry(紛れ)にわたって、黒の同一の応手に対して白の詰め方が変わるというテーマです。

★Petkovの③図では、紛れ順2通りと作意順の3段階にわたって、黒の応手2通りに対する白の詰め方がそれぞれ変わります。これを専門用語で、3×2のZagoruikoと呼び、#2ではよくお目にかかるテーマです(Zagoruikoとはソ連の作家の名前)。

★まず第一の紛れは1.Kb5?です。1...Gc3/Gc4なら2.Qd1/Qxc4#ですが、1...Ga5!で逃れ。次に第二の紛れは1.Qc2?です。これも1...Gc3/Gc4なら2.Qe4/Qd2#ですが、1...Gb1!で逃れ。そこでキーは1.Kc6!。今度は1...Gc3/Gc4なら2.Qd5/Qe3#で、黒には他の応手はありません。もう一度まとめて書くと次のようになります。同一応手に対して詰め方が変わるのを再確認下さい。

- 1.Kb5?
- 1...Gc3/Gc4 2.Qd1/Qxc4# but 1...Ga5!
- 1.Qc2?
- 1...Gc3/Gc4 2.Qe4/Qd2# but 1...Gb1!
- 1.Kc6! waiting
- 1...Gc3/Gc4 2.Qd5/Qe3#

④ M. Caillaud (1986)



★最後に、泣く子も黙るCaillaudの妙技を堪能していただきます。④図の条件のうち、SS#(Series Selfmate)の方は、白が連続して19手指し、その局面で黒がどう指しても白Kをメイトにしてしまうような手順を求めます。連続着手のあいだ、白は最終手を除いて黒Kにチェックをかけることはできません。次にK Madrasiの方ですが、これは今年の3月号で紹介済みなのでご記憶と思います。「同種類の相手の駒によって取りをかけられている場合、その駒は動けなくなる」というMadrasiルールをKにも拡大適用したものです。図では、白も黒もKは動けません。注意すべきなのは、白Gd2と黒Gd5のMadrasi関係。よく見れば、白からGxd5と取れますが、黒からはGxd2と取れない位置関係になっています。このとき、白Gd2は動けますが、黒Gd5は動けません。通常の駒だとMadrasi関係は双方向的なのですが、フェアリー駒では片方向的であることも起こりうるのです。従って、現在白Kにはチェックがかかっていません。★方針としては、白Kにセルフ・チェックをかける反則を犯さないように、黒Gd5にMadrasiをかけたまま、黒の最終手でそのMadrasi関係を断ち切るようにすればいいこととなります。作意順を並べます。

- 1.Bh4 2.Be7 3.Bb4 4.Gc5 5.Ga5! 6.Be1 7.Bg3 8.Bc7 9.Gd6 10.Gd8! 11.Ba5 12.Bc3 13.Bf6 14.Ge5 15.Gg5! 16.Bd8 17.Ba5 18.Be1 19.Bf2 hxg5#

唾然とするしかないお手並みですね。

【出題コーナー】

特集の Grasshopper を5題並べます。手強いのは1題だけです。恐れずに取り組んでみましょう。

- ①キーのみでも正解としますが、できれば紛れ7通りも答えて下さい。
- ②この図を(a)として、指定のように変化させた(b)(c)もH≠2として解くこと。e3の駒はQであることを注意。
- ③白から指しはじめる(つまり4.5手になる) Set Playも答えること。
- ④連続協力詰。黒が連続して8手指し、そこで白が1手指してメイトにします。締切は7月末日。

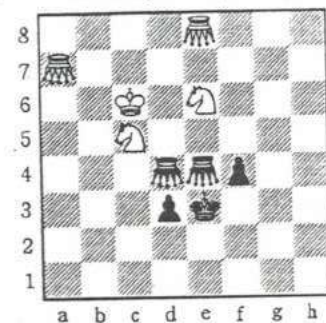
宛先は〒563 池田市畑1-14-10-A
若島 正 (Fax: 0727-53-6557)

① K. Hannemann (1957)



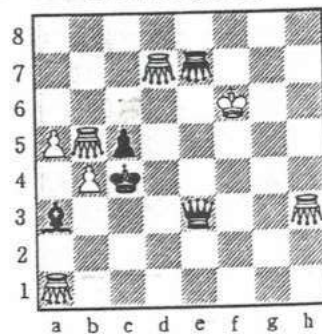
H=2

② H. Fougiaxis (1988)



H=2 2解

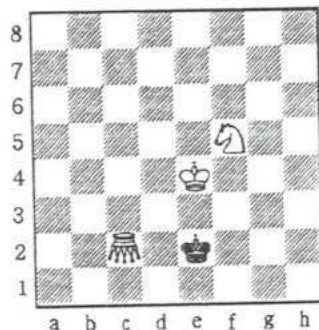
③ G. Smits (1989)



H=2

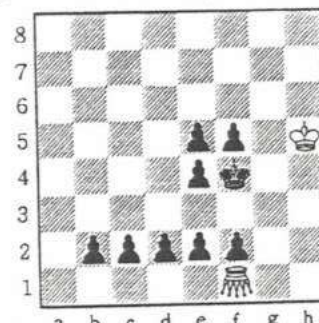
(b)/(c) Kf6→d6/b6

④ M. Caillaud (1986)



H=5 (Set Play)

⑤ C. Poisson (1994)



SH=8

1996/8
現代チェスプロブレム入門
第12回結果 若島 正

★やさしい Series Help ばかりで楽しんでいただくつもりでしたが、どういうわけか2題つぶれてしまい、後味の悪いことになりました。解答者数は27名。

① 永野 浩



H=2 3解

- 1.Bb2 Bc3 2.Sf3 Sg2≠
- 1.Bc3 Bd4+ 2.Kxd4 Shf5≠
- 1.Bd4 Be5 2.Qxe4 Sc4≠

★日本のプロブレム界の希望の星、永野氏の新作です。「浩」は本名。本作は、B2枚の追いかけっこ。これをLosinskiのテーマと呼びます。黒のBの移動の意味が、3解とも異なっている点(Bb2は直接的なline closing、Bc3はself-block、Bd4は後で効果が現れるanticipatory line closing)がやや統一性を欠きますが、それでも狙いを実現させた手腕はたいしたもの。

- 橋本 哲：巧く出来ている。余詰消しのd7Sが惜しい。b7Q→f5, d7S→e7Pとする案もありそうだが、好みの問題か。5点
- 船山 雄：明快なテーマで楽しい。d4で取らせる手が面白い。5点
- 山田康平：これはすごい！ 5点
- 則内誠一郎：調和の取れた3解が大変美しい。作者のJ C P Sでの活躍に期待しています。5点
- 小林敏樹：ロシンスキー・テーマとしては3解では物足りないだろうが、良くできていると思う。3点

② V. Kos (1979)



SH=6

(作意)

- 1.Bd5 2.Qa8 3.Rh8 4.Rah1 5.Ka1
- 6.Ba2 Qxg7≠

(余詰)

- 1.Kxa3 2.Ka4 3.Ka5 4.Ka6 5.Ra5
- 6.Bc6 Qxc6≠

★まさかこれがつぶれるとは、驚きましたね。プロブレム年鑑の意味合いを持つFIDE Album から引用した問題ですが、結構誤植があるので、これもそのうちのひとつだったのかもしれませんが。真相は不明です。Pa7の配置あたりがどうも怪しいような気がします。作意・余詰双方解答者はありませんでした。

★作意はごらんとおり、4隅の駒がぐるりと回転します。QとR2枚の移動は、いずれも最終手Qxg7≠の邪魔をしないためのもので、単純明快な仕掛けがさわやかです。

橋本孝治：満塁で押し出し、ランナーが一塁ずつ進む。理屈を知らなくても狙いがわかる、こういう作はいいですね。

則内誠一郎：手数割には黒の配置が分散していると思うたら、実はフォークダンスの輪だったんですね。

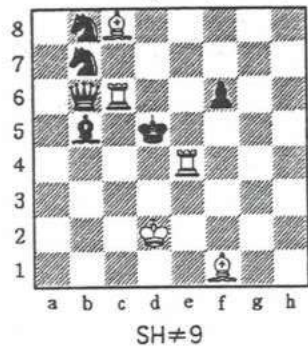
★こういうユーモアあふれる感想が開けるのを、楽しみにしての出題でした。

井上順一：最遠移動の連続。うまくできています。

永野 浩：これは夢の手順の実現ですね。

船山 雄：ベルトコンベアのように。盤面いっぱいを使う作品は大好き。

③ B. Lindgren (1978)



(作意)
 1.Bd3 2.Qd4 3.Sc5 4.Kc4 5.Kb5 6.Sb7
 7.Qb6 8.Ka6 9.Bb5 Ra4≠
 (余詰1) 喜多解
 1.f5 2.fxe4 3.Sc5 4.Sbd7 5.Se5 6.Kd4
 7.Qa7 Rd6≠
 (余詰2) 佐藤解

1.Kxe4 2.Kd4 3.Qc7 4.Qe5 5.Bc4
 6.Sa6 7.Sc7 8.Sd5 Rxc4≠
 ★これが早詰で、9手の余詰はいろいろありました。作意・余詰双方解答者はなし。わたしの出題ミスではないのですが、これも作品を引用した出所が誤植したのかもしれない。ひょっとしたら、白のKはd2ではなくてd1なのでしょう？ 謎です。
 金子義隆：この作者にしてBをダブラせるとはよくよくのことが……と思い、目を凝らすとa6に焦点が！ どちらかがQだったらこう簡単には解けなかったのですが。しかし、Lindgrenの作品が解けたのには感激。
 ★というわけで、原形のまま黒Kをa6に移動してトリプル・ピンメイトという狙いがきれいに表現されています。
 原岡 望：Kの引越し面白い。
 吉田 彰：白の駒がa6に利きが集中していることに気がついてようやく詰ませました。黒Kの移動法はいかにも理論的。
 花田 勉：Kが詰む位置は？と考えたら突然詰み形がひらめいた。
 永野 浩：シリーズ系はつくづくスイッチバック向きのルールですね。トリプル・ピンメイトもいい味です。

④ C. Feather (1970)



1.b1=R 2.Rb3 3.Rxf3 4.Kh4 5.Rh3 6.f3
 7.f2 8.f1=B 9.Be2 10.Kh5 11.Rh4
 12.Bg4+ Kf6≠
 1.b1=B 2.Ba2 3.Bd5 4.Bxf3 5.Be2 6.f3
 7.f2 8.Bf3 9.f1=R 10.Rh1 11.Rh4
 12.Bg4+ Kf6≠

★一つの解を見つけたとして、RとBのプロモーションが出てくるので、もう一つの解はQとSのプロモーションか……と見当をつけると、意外な泥沼にはまってしまいます。AUWは⑤でして、こちらの方は両方の解ともR・Bのプロモーションである点が意表を突くかもしれません。
 橋本 哲：2解とも実質同じ筋なのはちょっと残念。SHの複数解モノで展開がまったく異なる作例はあるのですか？
 ★もちろん、複数解でAUWを構成する例とか、いろいろあります。
 船山 雄：チェックを避けるための芸が細かい。
 小畑 勉：必要最小限の駒数で手順が限定されているのがすごい。
 佐藤善起：超難解。2解は同じ筋だが、同じ手数でできるとは驚き。
 ★作者のFeather氏からは、本欄に新作の投稿をいただいておりますので、9月号で臨時特集を組みます。お楽しみに。また、8月中旬発行予定の「プロブレム・パラダイス」には、〈ヘルプメイトの創作法〉と題する同氏の講座を翻訳掲載します。これは「プロ・パラ」のために寄稿いただいたもので、絶対にお見逃しなく！

⑤ E. Bartel (1969)



1.g1=S 2.h1=Q 3.Qxh3 4.Qf5 5.h3 6.h2
 7.h1=B 8.Bf3 9.Bd1 10.c1=R 11.Qb1
 12.Kc2 13.e2 14.Sf3+ Rxf3=。
 ★さて、Bartel氏と言えば誰でも知っている「AUWの王様」で、とびきりやさしいAUWを大量に作ることで有名ですが、昔はそんなにやさしいものばかりでもありませんでした。その例として、見ていただくのがこの作品です。

★考え方としては、b1の地点を何で埋めるかというのが先決で、QかBだということになりますが、ステールメイト形のイメージを想像すると、4種成ならここはQかなさそうだと見当をつけます。
 永野 浩：h4Pがブロックされたまま終わるはずがないとか、g3Rを取るわけがないのでf4Pはブロックするしかないとか、若鳥流(??)卑怯な解図で、今月いちばん早く解けたのですが、それでもため息の出るような仕上がりですね。Pf4がこれ一枚で作意を成立させていると言ってもいいような絶好の配置で、感心するばかりです。
 喜多真一：Pの4種成。こんな凄いな作に会うことができ、しかもそれが解けたので、こんなに嬉しいことはない。でも、25年以上も前の作だなんて……！ 詰めあがり図、1段目に4種類のピースが並ぶのも面白い。
 小林看空：みごとな4種成。最初h3PをSで取って苦労した。h1の成りは2枚目がBだった!!
 真鍋 浩：わかりやすい4種成。手順前後が許されない手順を考えれば意外に簡単。

【総評】

船山 雄：⑤を除いてとても解きやすかったです。例題の②番に感心しました。
 ★それが申し訳ありません。5月号例題②として引用したJ. Kricheli (SH#25)の傑作は、わたしの解説の中に致命的な誤りがあります(さてどこでしょう？ もう一度よく読んでみてください)。ここでお詫びいたします。
 則内誠一郎：プロブレム未経験者の皆さん！ 今回の解答は見ないと損しますよ。今年に入って解けない問題が多く、フェアリー恐怖症になりかけていました。でも今回は比較的解きやすく、しかも巧妙な作品ばかりで充分に楽しめました。

【結果】

	○	△	×	余	5	4	3	平均点
①	23	4	0		6	14	3	4.13
②	19	0	1	7			
③	20	0	3	4			
④	23	2	2				
⑤	16	0	11				

【解答成績】

満点 哲・永野 啓・山田康平・真鍋 浩
 橋本 哲・永野 啓・山田康平・真鍋 浩
 後藤角兵衛・屋並仁史・駒井信久
 新藤孝敏・小林敏樹・佐藤善起・喜多真一
 小林看空・赤木誉幸・則内誠一郎
 金子義隆・橋本孝治
 24~20点……4名
 小畑 勉・吉田 彰・花田 勉・船山 進
 19点……7名
 藤沢秀樹・原岡 望・塩田 洋・井上順一
 塚越良美・藤井美大・小原義孝

【お知らせ】

「プロブレム・パラダイス」創刊号で出題ミスが1題ありました。D15は「H#3 2解」となっていますが、「H#3 b)Kf5→d4」が正しい設定条件でした。この場を借りてお詫びいたします。
 なお、「プロブレム・パラダイス」第2号はただいま編集集中で、8月中旬にはお届けできると思います。新作100題をはじめ、Feather氏の寄稿など読み物も満載。お申し込みは、年会費3000円を、郵便振替で小林敏樹(00190-9-162538)まで。

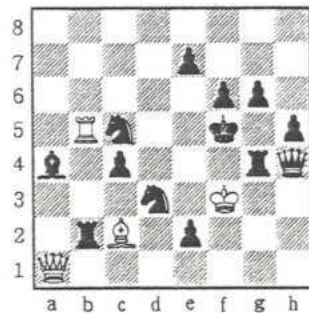


C. J. Feather氏

★今回は、ヘルプメイト界の第一人者の一人、C. J. Feather氏の臨時特集です。

★Christopher John Feather氏は1947年生まれで、ロンドンの北にあるスタムフォードという町に在住。職業は同地にある高校の副校長先生です。現在、The Problemist誌でヘルプメイト欄を担当。いま日本でプロブレム熱がさかんになりつつあるのに大きな理解を示し、「プロブレム・パラダイス」第2号にくヘルプメイトの創作法と題する講座を寄稿していただきました。

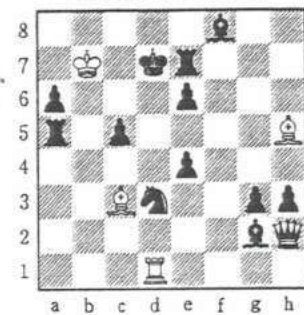
★まずFeather氏の作品を4題並べますので、それを自力で解いてから、次のページをご覧ください。

① C. J. Feather
British Chess Magazine 1976

H≠2 b)Pg6→g5

② C. J. Feather
Moultings 5 1991

H≠2 2解

③ C. J. Feather
Schach-Echo 1975

H≠2 8解

④ C. J. Feather
Australasian Chess Problem Magazine 1994

H≠3 b)Pf3→f2

★どうです、解けましたか？ さて、C. J. Feather氏と言えば、すでに本欄でご紹介したこともある名著*Black to Play*は、ヘルプメイトのすべてを語り尽くした批評的解説書として、プロブレム愛好家必読の一冊です。入手希望の方は、「プロ・バラ」第2号のBook Sale欄をご覧になってください。その後書きに、編者のF. Chlubna氏が付けた、作者のポートレートが名文ですので、それをそのまま翻訳して次に紹介します。

◆「Featherがチェス・プロブレムに興味を持ったのは1968年にさかのぼる。彼をばげましたのはJohn Riceと、とりわけ(若死にした)John Driverだった。Driverは、スタムフォードからはさほど離れていないケタリングに住んでいたのである。最初からFeatherはオーソドックスのヘルプメイト(フェアリー駒や条件のないもの)に惹かれた。彼の作品の85%はこのタイプである。それに加え、約50局のserieshelpmateや、grasshopper入りまたはCircleルールのヘルプメイトが数局ある。

◆「1989年に、彼は*Pluckings*という題の作品集を出版した。これは彼の創作初期の傑作を集めたものである。その翌年、長い中断期間の後で彼は創作を再開し、全世界のチェス・プロブレム誌も載せきれないほどの数の新作が発表されることになる。次いで彼は*Moultings*という作品集のシリーズを始める。これは12冊の小冊子で、平均27作の新作が収められており、彼はこれを全世界のプロブレム愛好家に送った。

◆「実を言うと、彼の全作品のうちちょうど半数以上(傑作も含む)は、どんなコンテストにも出品されることがない。彼にとってはこの記録が自慢の種である。なぜ創作するかといえば、創作行為そのものの純粋な満足感のためなのだ。作家が自分の野心を満足させるために必要とする、トーナメント、FIDE-Album、マスターの称号などは、彼にとって愚かしいことでしかない。作品が賞を取ってもそれを記録しておいたりすることはなく、自作を引用するときはそうした賞に言及する必要はないというのが彼の主張である。しかし、その作品の質から、受賞作が数多く存在することは容易に想像できるだろう。」

【例題の答】

- ①
a) 1.Bxb5 Qa8 2.Se6 Qd5≠
b) 1.Rxc2 Qd4 2.Sf4 Qe4≠

作者自身の評価では、代表作とのこと。見た目ほど単純ではなく、a)で1.Rxb5? Qd4、およびb)で1.Bxc2? Qa8という紛れを調べてみると、そのそれぞれで黒がバッテリーを形成して詰まなくなることがわかる(dual avoidanceのテーマ)。Black to Playの表紙を飾る傑作。

- ②
1.Qxg8 Rf3 2.Ke6 Re2≠
1.Qxf8 Bc4 2.Kf6 Bc3≠

黒のQが白のRBの交点f7にいる。一つの解ではRがf7を横切り、もう一つの解ではBがf7を横切る。従って黒はQをどけなくてはならないが、その際に、最初の解ではBを取って移動し、もう一つの解ではRを取って移動する。これが「Featherのメカニズム」と呼ばれる仕掛けで、作者お得意のテーマ。

- ③
1.Ra4 Bd2 2.Sb4 Bxb4≠
1.Ra2 Bd4 2.Sb2 Bxb2≠
1.Ra1 Bd2 2.Sc1 Bxc1≠
1.c4 Bd4 2.Sc4 Bxc4≠
1.Bg7 Bd4 2.Se5 Bxe5≠
1.Bh6 Bd2 2.Sf4 Bxf4≠
1.Bh1 Bd4 2.Sf2 Bxf2≠
1.Qh1 Bd2 2.Se1 Bxe1≠

黒Sd3による完全なKnight Wheel。Sの跳ぶ位置が、黒初手の手待ちによって決定する仕掛けがさすが。

- ④
a) 1.cxd5 Ba7 2.Kf4 Bb8
3.Qg4 Sxd5≠
b) 1.Rxe3 Bxc6 2.Kg2 Sd5
3.Sg3 Sxe3≠

難解作。2枚のBとSでバッテリーを作ったのdouble checkが見えるかどうかだが、黒が初手にBを取る手の意味が最終手になつてようやく判明するところがにくい。

【出題コーナー】

さてそれでは、いよいよショウを始めましょう。

C. J. Feather 氏のヘルプメイトを5題並べます。この5題のセットは、この催しのために同氏に特別に選んでいただいたものです。Feather 流のヘルプメイト芸術を味わう絶好の機会ですので、ぜひ多数の方々の挑戦と御解答をお待ちします。

④だけは本誌オリジナルですので、いつものように5点満点での採点をお忘れなく。

締切は9月末日。

宛先は〒563 池田市畑1-14-10-A
若島 正 (Fax: 0727-53-6557)

① C. J. Feather
Schach-Echo 1980



② C. J. Feather
British Chess Magazine 1995



③ C. J. Feather
Schach-Aktiv 1991



④ C. J. Feather
Original



⑤ C. J. Feather
Moultings 1992

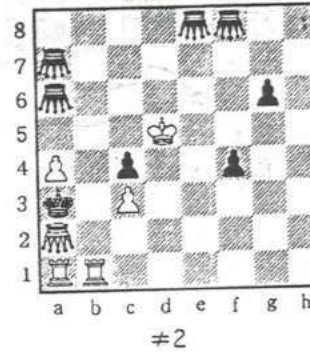


1996/10
現代チェスプロブレム入門
第13回結果 若島 正

★Grasshopper 特集の解答者数は26名。今回の選題は、我ながらうまく選べた部類で、好評でした。

★解説の最後に付けてある [○△×] の数字は、それぞれ正解・部分解・誤無解の人数を表しています。

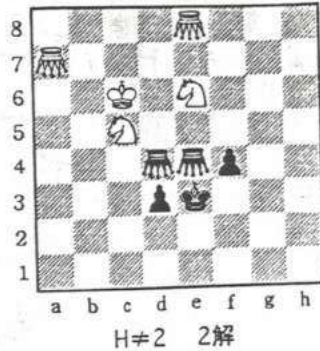
① K. Hannemann (1957)



Try: 1.Kxc4? Gg8!
1.Kc5? Gh5!
1.Kc6? Gf3!
1.Kd4? Gd8!
1.Kd6? Gd3!
1.Ke4? Ga8!
1.Ke5? Ga5!
Key: 1.Ke6! (2.Gd5≠)
1...Kxa4 Ga5≠

筒井浩実: Kを動かす手8通りのうち、1つがキーで、残りの7つが紛れであることはすぐにわかったが、セルフチェックで逃れることに気づくまでにしばらくかかった。
船山 進: セルフチェックを避けるのが狙い。慣れないと受けを探すのが難しい。
駒井信久: なるほど、これは名作。
小畑 勉: 絶妙な配置!
花田 勉: 1.a5? Ka4!の紛れも面白い。
広瀬行夫: 原理は一つ。Gだから可能。
[○24△0×2]

② H. Fougiaxis (1988)



1.Gb6 Sb3 2.Gf2 Sed4≠
1.Ge7 Sg5 2.Ge2 Sce4≠

花田 勉: いったんGを逆方向に跳ばなければならぬのに驚いた。黒Gの軌跡に2枚の白Sの動き。2解の対称性がすばらしい。

屋並仁史: 黒の初手は手待ちになっているのだが、何となく指してしまうので分かりにくい。もったいない。

駒井信久: 無駄のない配置で、縦と斜めが完璧に対称。

★この縦と斜めによる2解というのが、ツインの典型的な作り方の一つです。

井上順一: 両王手の詰上がりが見ごとだが、初手の手待ちがうまい。

小林看空: 1回休みの黒の初手が盲点。

橋本孝治: 両王手+手待ち。待ち方を間違えて王手をかけてしまいそう。

★1.Gc4? Sg5 2.Ge2 Sce4≠とした誤解が1通。初手が白Kにチェックをかけています。

川崎紀夫: 僕はヘルプメイト大好きです。複数解ものって好きです。

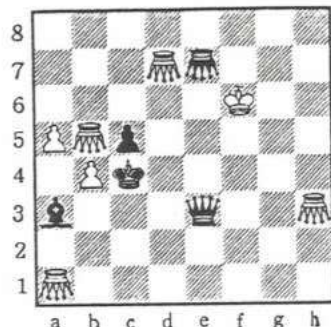
山田康平: 無駄がなったくない完成品。

船山 進: 白GSの間に跳べることに目をつければよいのだが、すぐには思いつかない。

★プロブレム年鑑であるFIDE Albumにも選ばれた佳作でした。

[○23△1×2]

③ G. Smits (1989)



H≠2

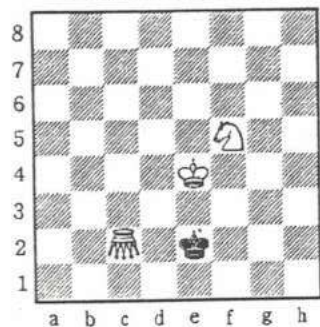
b/c) Kf6→d6/b6

- a) 1.Qd4+ Ge5 2.Gxb4 Gc8≠
 b) 1.Qc3 Ghb3 2.cxb4 Gda4≠
 c) 1.Qd3 Gd2 2.Bxb4 Ga6≠

藤沢秀樹：今月でいちばん難しかった。
 喜多真一：一番手強いとはこの作のことがな。一寸手こずりました。
 ★ご明察のとおりです。
 船山 雄：退路の塞ぎ方が難しい。白Gにヒモがついているc)から考えた。
 則内誠一郎：最終形でジャンプ台が逃げ出さないようにする点がコツ。
 吉田 彰：いかにGb5にヒモをつけるかで悩まされました。こんなにGがびよんびよん飛び跳ねる手順はすごい。ただ、1つ解を発見すると、あとは一気にラストまで行ってしまえるのは、いかにもツイらしい。
 ★手順の構成について言及した評を3つ並べます。
 真鍋 浩：b4の取り方で3通りとは！
 花田 勉：黒Qの移動位置、Pb4の取り方、a1, d7, h3の3枚の白Gの役割が、3つの解で対称的になっている。
 駒井信久：すべての手が対称的、循環的。
 ★a)で黒の2手目をBxb4とした解がありました。それが、それだと2...Gc8+のとき3.Gc7の受けが残っていてメイトではありませんので御注意。

[○16△1×6]

④ M. Caillaud (1986)



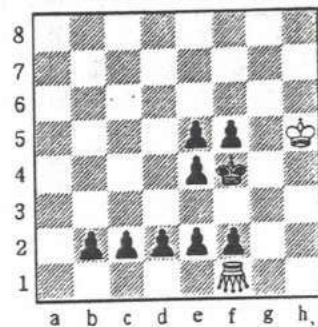
H≠5 (Set Play)

- 1...Gf2 2.Kf1 Kf3 3.Kg1 Gf4 4.Kh2 Kf2 5.Kh1 Sg3≠
 1.Kd2 Sd4 2.Kc3 Gc4 3.Kb2 Kd3 4.Ka2 Kc2 5.Ka1 Sb3≠

山田康平：これは凄すぎる！
 橋本孝治：0.5手の分水嶺。
 駒井信久：0.5手の差で左右対称の妙。
 真鍋 浩：詰め上がりが1通りしかないのでやさしかった。
 ★「あなたにも解けるCaillaud」キャンペーンの一作。しかし、こういう小技もめちゃくちゃに巧いんですね。
 船山 雄：たったの4枚でこの内容。ズルイくらいにうまい。
 佐藤善起：逆の隅を使うとはさすが「泣く子も黙る」Caillaud。
 筒井浩実：KGSによる詰め上がりは隅で詰むしかなないので、解くのは容易だ。しかし、この美しい表現には素直に感動するよりない。
 則内誠一郎：右方向は簡単でしたが、左方向には驚きました。
 永野 浩：このマテリアルのヘルプの決定版かもしれないね。
 塩田 洋：例題④はすばらしい。この作品もさすがだ。
 屋並仁史：今月のベストはこれ。シンプルな初形から左右対称の詰め上がり。どうしてこんなものを見つけられるのでしょうか。

[○22△0×4]

⑤ C. Poisson (1994)



SH≠8

- 1.b1=G 2.Gd3 3.c1=G 4.Ge3 5.d1=G 6.G1f3 7.e1=G 8.G1g3 Gc4≠

山田康平：吹き出した。
 川崎紀夫：解いて絶句。
 藤沢秀樹：大いに笑わせていただきました。
 吉田 彰：これは真っ先に解けました。もう大爆笑するしかありません。
 筒井浩実：これだけ徹底されれば笑うよりない。
 ★これだけ大勢の方に笑っていただければ、出題者としては満足です。
 小林看空：これがいちばん易しい客寄せでしょう。
 船山 雄：台駒を残しながら跳ぶ。Gは連続詰に向いてますね。
 塩田 洋：好み。こういうのを作りたい。
 井上順一：詰め上がり形が良そうできるので簡単だったが、この手順は気持ちいい。
 花田 勉：気づけば、「やられたな」と思ってしまうような手順。黒8枚のPが揃ってKのメイトに協力する姿がなんとなくおもしろい。
 ★手順前後が利かないところが、当然ながらうまいところで、Gの性質を利用した作りになっています。おそらくはその辺りが、創作の動機なのではないかと推測されますが、はたしてどうでしょうか。それはともかく、この作品はGrasshopperに親しむために絶好だと思います。

[○25△0×1]

【総評】

船山 雄：今回はやさしかった。プロバラの問題を解いたことが良い練習になったようです。

橋本孝治：Grasshopperは絶対「仮面ライダー」のマークがいい。(日本人の主張)

塩田 洋：Gは特殊駒という感じはしない、利用範囲の広い有用な駒である。

井上順一：フェアリー駒はよくわからないので、今まで敬遠してきましたが、今回⑤ができたので、他のにも挑戦してみました。おもしろいのもあることがわかり収穫。

吉田 彰：このGrasshopperって結構使いやすいですね。何か1つ作ってみたい。

【解答成績】

満点 (25点) ……17名

橋本 哲・永野 啓・山田康平・真鍋 浩
 後藤角兵衛・屋並仁史・駒井信久

新藤孝敏・赤木善幸・塩田洋・則内誠一郎
 藤沢秀樹・小畑 勉・吉田 彰・筒井浩実

花田 勉・船山 進

24~20点……4名

佐藤善起・広瀬行夫・喜多真一・橋本孝治
 19点……5名

井上順一・小林看空・塚越良美・川崎紀夫
 原岡 望

【お知らせ】

長いあいだ楽しんでいただいた「現代チェス・プロブレム入門」も、今年いっぱいで一応店じまいすることになりました。これからは「プロブレム・パラダイス」編集に専念するつもりでおります。プロブレム愛好家の方々は、ぜひそちらに御参集いただくようお願いいたします。

なお、来年からは、新しいプロブレム・ファンを開拓するため、初心向きの問題ばかりを並べた展覧会を年1回くらい催すという形でお目にかかります。そのときまで、ひとまずさようなら。

『プロブレム・パラダイス』第2号発売中!

年会費(4号分)3000円を下記へ。

小林敏樹 郵便振替 00190-9-162538

電話 (03-5605-0419) で小林までご連絡いただければ、見本誌を送ります。

1996/11

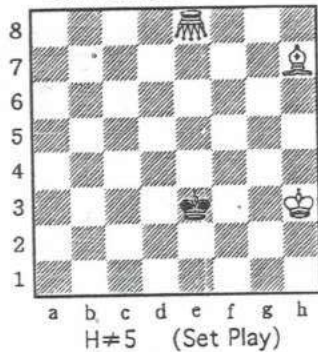
現代チェスプロブレム入門
最終回(第15回) 若島 正

いよいよお別れです。そこで今回は講座をお休みにして、卒業試験用に実力問題を並べます。

今年勉強した、Circe, Madrasi, Series, Grasshopperのものばかりを出題してみました。説明は省略しますので、必ず今年の本欄での講座をもう一度開いて、復習しておいてください。それではまた会う日まで！
締切は11月末日。

宛先は〒563 池田市畑1-14-10-A
若島 正 (Fax: 0727-53-6557, Nifty: QYJ15704)。

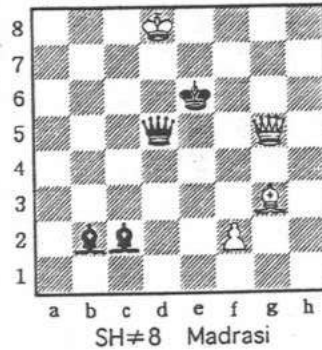
① M. Caillaud
Rex Multiplex 1985 V



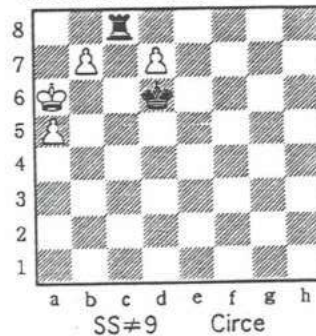
② J. van Atten
Die Schwalbe 1986 1 Pr



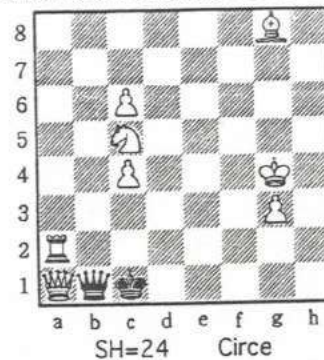
③ C. Nilsson
Springaren 1985-86 3 HM



④ G. Glass
British Chess Magazine 1979



⑤ K. Gandew
British Chess Magazine 1975 1 Pr



1996/12
現代チェスプロブレム入門
第14回結果 若島 正

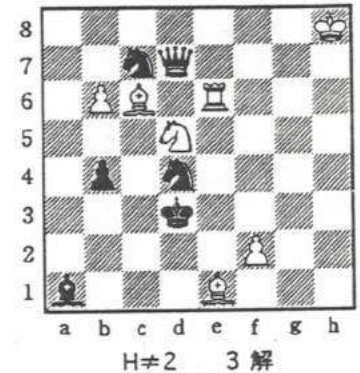
「プロブレム・パラダイス」の創刊で、「2ヶ月に5題解けば満足していたのが、一挙に100題以上になってしまった」(橋本哲さんの言葉) こともあって、解答者は21名とやや少なめでした。初の解答参加は富沢岳史氏。始めたと思ったらもう終わりですみません。これからは「プロ・バラ」の方で腕を鍛えてください。

① C. J. Feather
Schach-Echo 1980



1.Sdxc3 Rxe4 2.Sxe4 Qc1#
1.Sexc3 Qxd5+ 2.Sxd5 Rc1#
★白から指せるのなら、たとえば1...Rc1 2.Sdxc3 Rxc3#(他にも同様の手段あり)で簡単に詰むのですが、黒の初手に適当なテンポがなく、悩むこととなります。これは黒の2手目も同じことで、1.Sdxc3 Rc1 2.??? Rxc3#の筋も???に入れるべき適当なテンポがありません。そこで、白の1手目には黒のテンポに相当するような手段が要求されます。それが作意の順。
千葉 肇：黒のテンポは成立せず苦戦。Pd7では余詰？
★余詰はなさそうですが、それだとh1Bが成駒になるのを嫌ったのでしょうか。
則内誠一郎：テンポの変則といった感じ。盲点に入り実はいちばん手こずりました。

② C. J. Feather
British Chess Magazine 1995



1.Qxc6 Re2 2.Qc4 Sf4#
1.Qxe6 Sc3 2.Qc4 Be4#
1.Qxd5 Ba4 2.Qc4 Re3#

屋並仁史：今回のベスト。3解でサイクリックなものはいきれい。
★とにかく黒はQをc4にもっていきたいのです。ところがその経路には、白のR/B/Sの障害物があって、それをまず食ってやらないと目的地に行けません。この黒が白の主力駒を食うという筋は、専門用語でZilahiと呼ばれて、現在ヘルプメイトでは大流行しているテーマです。

★白は残った2枚でうまく詰み形を作ることになります。それが上記の解のように、RS/SB/BRと尻取り式の円環を成している点にご注目。これも最近ではよく試みられる作り方で、ヘルプメイトにおける形式美のひとつです。

山田康平：なんと美しい手順。
則内誠一郎：解の統一性では今回特集の中でトップ！円熟の芸だと思えます。

喜多真一：R, B, Sの回転が素晴らしいですね。

後藤角兵衛：白の3種の役駒の役割交換がよい。

佐藤善起：三つともギリギリに成立した美しい詰め上がり。

★狙いがわかりやすく、ヘルプメイトはこう作るものだという絶好のお手本ですね。

③

C. J. Feather
Schach-Aktiv 1991

H≠2 4解

- 1.Sxd4 Qxf6 2.Sc2 Qxc3≠
1.Sxd5 Qxf5 2.Sb6 Qxb5≠
1.Kxd4 Qxf6+ 2.Kxd5 Qd4≠
1.Kxd5 Qxf5+ 2.Kxd4 Qd5≠

千葉 肇：前半の2解がSによるinterferenceなのであと残り2解もと思ったが、もう取るPがない。そこでKで取ってみるが、Qの連続チェックは意表。1.Kxd4 Qxf5? 2.Sxd5?? Qxd5???≠と1.Kxd5 Qxf6? 2.Sxd4?? Qxd4???≠のパラドキシカルな紛れも味付け?

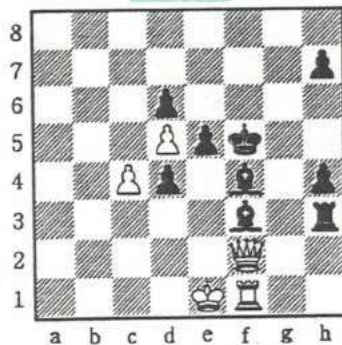
★解説すべき内容を全部代わりに言ってもらったような短評で、担当者としては大助かり。実際にこの紛れにはまった方も1名いました。黒の2手目がセルフチェックの禁手です。

真鍋 浩：KでPを取る方の2解が先に見えたので、SでPを取る方が見えず苦戦。吉田 彰：それぞれの駒が絶妙の位置にあって、やりたい放題にしていますね。ただ見た目は2解が2つある、という感じがしますが。

山田康平：2つのH≠2といった感じ。★こういう感想が多かったのですが、次の評も参考にしてください。

永野 浩：2組の手順を含む最近の試み(5年も前の作だが)。双方の1手目も関連していてもおもしろい。

④

C. J. Feather
Original

H≠2 5解

- 1.Bg3 Kd2 2.Ke4 Qxf3≠
1.e4 Qxf3 2.Ke5 Qxf4≠
1.Bh6 Qxf3+ 2.Kg5 Qf5≠
1.Bh5 Qxf4+ 2.Kg6 Qf6≠
1.Bxd5 Qxf4+ 2.Ke6 Qf7≠

★それぞれの解を単独に見ると、なんだこれはという味気ない手順で、実際に正解者の中にも「狙いがわからない」と書いた人がいたほどですが、こうして5解を集めてみると、あなるほどと納得します。

井上順一：最終手の規則性が見事と、答えを書いてみてからわかった。4点

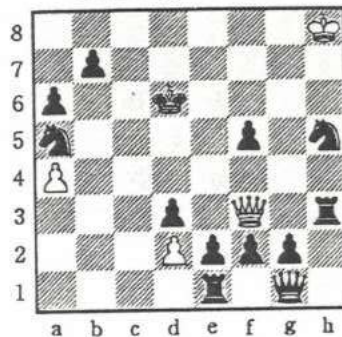
千葉 肇：2つ目が1.e4と破調なのでひょっとして余詰?と思ったが、全部揃えて納得。Rf1が発射台でQがロケット、どんどん上昇していく。それでもKd2とe4と駒を統一できなかったのは心残り? 3点

★そういうわけで、白の最終手がQf3~Qf7になっているところが主題。Feather氏は最近、白のQの動きをテーマにした作品を多く創作されているようで、これもその一つなのでしょう。なにしろヘルプメイトでは、白のQは相当に強力なので、これはよほどの腕力がないとできません。

花田 勉：解いていくうちに、狙いは黒Bの動きにあると思ってしまって、Qf3≠とQf4≠の2解の発見に手間取った。まったくすごい狙いがあったものだ。5点

小林看空：6解が作れそうだが…。4点

⑤

C. J. Feather
Moultings 1992

H≠3 4解

- 1.Kc5 Qxd3 2.Kb4 Qxa6 3.Ra3 Qb5≠
1.Kc7 Qxf2 2.Kb8 Qh4 3.Qa7 Qd8≠
1.Ke5 Qxg2 2.Kf4 Qxh3 3.Qg4 Qe3≠
1.Ke7 Qxe2+ 2.Kf8 Qg4 3.Re7 Qg8≠

★これも④に続いて、白Q単騎の動きが見所です。黒はKをd5からb4/b8/f4/f8といわばスター・フライトの2倍の位置まで移動しますが、それだけだと詰み形が作れないので、もう1枚セルフ・ブロックで退路を埋める駒が必要になります。白の初手Qxd3/Qxf2/Qxg2/Qxe2+は、いずれもその黒の駒(Rh3, Qg1, Re1)の利きを通すための着手です。

花田 勉：黒Kは斜め一直線に2手進む。白QはあるPを取ったあと、最終手に備えてこれしかない位置へと移動する。そして、解放された黒Q/RがKの壁を作り動く。例題④に比べればやさしいだろうけれども、みごとな構成だと思ふ。

吉田 彰：スター・フライト。黒の駒を呼び出すあたりはロードランナーを見るがごとく。

真鍋 浩：スケールが大きい。佐藤善起：Kの軌跡が美しい。井上順一：初手と詰め上がり位置で、4解がうまくまとまっている。★ところで、第4解の2手目で2.Re8 Qg7≠としてしまった誤解が1名。Sが利いています。

【総評】

井上順一：期待にたがわぬ好作揃いで楽しめた。

佐藤善起：当然ながら複数解は余詰でも変同でもなく、複数解の総和を超える価値を持つものであることが、どの1題を解いてもよくわかる。

則内誠一郎：全般的に駒取りが多いのに嫌味がないのは、手順に気品があるからだと思います。氏のプロバラ誌での講座は、優しさと厳しさを備えた内容で必読です。

永野 浩：日本人の作図はたしかに線が細いが、解図のパワーはプロプレミストたちとほとんど変わりがないと思う。Feather氏もちょっと手加減したかな?

塩田 洋：総じて難解で、ジャンルを究めると結局こうなってしまうのかという印象。

【結果】

	○	△	×	5	4	3	2	平均
①	21	0	0
②	20	0	1
③	18	2	1
④	20	1	0	4	8	5	1	3.83
⑤	18	1	2

【解答成績】

◇満点(25点).....16名

橋本 哲・永野 浩・真鍋浩・後藤角兵衛
屋並仁史・駒井信久・新藤孝敏・佐藤善起
喜多真一・赤木登幸・塩田洋・則内誠一郎
小林看空・小畑 勉・吉田 彰・花田 勉
◇24点以下

山田康平・井上順一・富沢岳史・千葉 肇
藤沢秀樹

【お知らせ】

「プロブレム・パラダイス」第3号ができました。第1号の結果稿が載り、なんとB5版60ページ! 永野浩氏の連載「Problem Watching」も始まりました。さらに、これまで詰バラおよびプロバラに掲載された作品や、海外雑誌に出た日本人作家の作品を40局集めた、英語版の特別号も付録として発行しました。会員数も100人の大台に近づきつつあり、JCP Sは本格的な軌道に乗ろうとしています。この機会にあたなもぜひ会員に! 入会希望者は年会費3000円(会報4号分)を郵便振替で小林敏樹(00910-9-162538)まで。

現代チェスプロブレム入門 第15回結果 若島 正

フェアリー駒とフェアリー・ルールの混
合とあって、最終回の解答者は12名と低
調でした。初の解答参加は高坂研氏。

① M. Caillaud
Rex Multiplex 1985 V

SH=5 (Set Play)

Set: 1...Ge2 2.Kf3 Gg4 3.Kf2 Bd3
4.Kg1 Bf1 5.Kh1 Bg2≠
1.Kd4 Kg4 2.Ke5 Ge4 3.Kf6 Gh4 4.Kg7
Kh5 5.Kh8 Kg6≠
★これが作意でしたが、本手順でたとえ
ば1.Ke2 Ge1 2.Kf2 Gg3 3.Kf1 Bd3+以下セ
ットと同様の詰みがありました。Caillaudに
しては珍しい簡単な見落としで、原因不明
です。双方解は真鍋浩氏。

② J. van Atten
Die Schwalbe 1986 1 Pr

SH=14

1.Qf4 2.Be4 3.Qf6 4.Sc4 5.Rb6 6.Re5
7.Sc5 8.Qxc6 9.e6 10.Qd5 11.Rd6
12.c6 13.Bc7 14.Bb6 Bxb6=

広瀬行夫：複雑に絡みあって難しいが抵抗
感なく楽しめる。Pc6 1個ですべての余詰
を消している。
★アンピンされた駒が動き、それでまた別
の駒がアンピンされて動き……という美し
い連鎖。こう見えてもなかなか難しく、つ
いに降参した実力者がいました。

③ C. Nilsson
Springaren 1985-86 3 HM

SH=8 Madrasi

1.Ba3 2.Bd6 3.Bf5 4.Qd2 5.Bh3 6.Kf5
7.Kg4 8.Kh4 f4≠
則内誠一郎：チェックをかけた駒にマドラ
シをかけて逃れる裏技を許すまじ。
★詰め上がりが見えれば簡単です。4.Qe5
5.Qf4 6.Kf6 7.Kg6 8.Kh5 Bxf4≠という解
答もありましたが、これは9.Kxg5!で逃れ
ます。

④ G. Glass
British Chess Magazine 1979

SS=9 Circe

1.b8=S 2.Kb7 3.a6 4.a7 5.a8=Q 6.Qa7
7.dxc8=Q(Ra8) 8.Qf5 9.Kc8 Rxb8
(Sg1)≠
小畑 勉：この詰め上がりしかないので案
外簡単だったが楽しめた。

★シリーズ・セルフという形式に慣れてい
ただくための出題。最後9...Rxa7とは取れ
ない(CirceルールでQd1が発生してセルフ
チェック)ところがポイントでした。

⑤ K. Gandew
British Chess Magazine 1975 1 Pr

SH=24 Circe

1.Kd1 2.Ke1 3.Kf1 4.Kg1 5.Kh1 6.Qg1
7.Qxc5(Sg1) 8.Qxc6(Pc2) 9.Kg2
10.Kf2 11.Ke3 12.Ke4 13.Qxc4
14.Qxc2 15.Ke3 16.Kf2 17.Kg2
18.Kh1 19.Qb1 20.Kxg1 21.Kf1
22.Ke1 23.Kd1 24.Kc1 Bb3=
屋並仁史：1st Prizeとあるが驚くほどの手
順ではない。白のQRBS Pを1通り取り
に行くのかと思ったのだが……。
★黒のKQの2枚が原位置に戻る、いわゆ
るRundlaufのテーマ。狙いはPc4の消去で
す。やさしいが楽しめるはず。

【総評】
高坂 研：まだ始めたばかりで、相当解図
に時間がかかる。でもチェス・プロブレム
も詰将棋と同じくらい面白いことがわかっ
てよかった。

【結果】
○ △ ×
① 12 0 0
② 7 0 5
③ 10 0 2
④ 9 0 3
⑤ 7 1 4

【解答成績】
◇満点(25点)……4名
橋本 哲・真鍋 浩・屋並仁史・駒井信久
◇20点以下
佐藤善起・広瀬行夫・高坂 研・永野 浩
則内誠一郎・小畑勉・吉田 彰・花田 勉

☆1996年度解答通算成績ベスト10

- 第1位 橋本 哲
真鍋 浩
屋並仁史
駒井信久 150点
第5位 永野 浩 144点
第6位 佐藤善起 141点
第7位 則内誠一郎 126点
第8位 後藤角兵衛
新藤孝敏 125点
第10位 山田康平 124点
★みごと全題正解された上記の4氏には、
詰バラ編集部から記念品を贈ります。

☆1996年度新作表彰 Hiroshi Nagano Tsume-Shogi Paradise 1996 Prize

After Black's 21st Move.
Game Score?

Hiroshi Nagano Tsume-Shogi Paradise 1996 Honourable Mention

H≠2 3 solutions

★充実の永野浩氏が2作受賞と決定しまし
た。同氏には記念品を贈呈します。